
とある初恋 S S （前編）

シンヘ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある初恋SS（前編）

【Nコード】

N6059T

【作者名】

シンへ

【あらすじ】

一方通行さん救済作品です。当分の間は、恋愛は関係ありません。レベル3のオリ主が、一方通行さんと共になんやかんやする物語です。1話1話が短めです。第1部は日常編で、とくに盛り上がりはありません。できれば第2部まで読んでいただけると幸いです。2話から原作キャラが沢山出始めます。6月3日第3部、6月4日第4部、6月7日第5部開始、同日（前編）完結、さらに同日（後編）開始しました。6月20日大部分を読みやすく書き換えました。

6月21日に外伝を投稿。

1 出会い（前書き）

初投稿です。第1部は日常編です。のんびりお付き合いください。

1 出会い

気づくと、知らない部屋のベッドの上にいた。

（ここはどこだろう）

自分の体を見ると、真っ白い半そで半ズボンの服を着ている。服の袖からは頼りなさげな細い手足が生えていた。

部屋は10畳ほどの広さがあり、壁も天井も真っ白。天井の真ん中には直径5センチくらいの黒い色の半円球状の物体がくっついていた。

ベッドは壁の一方に寄せられており、反対側の壁側には、不自然なスペースがある。

壁の一边には大きなガラスの窓があり、その向こう側には白衣を着た大人たちが忙しそうに歩いていた。

頭は霞がかかったようにぼんやりとしている。

（僕はいたい…なまえは…）

自分の名前がすぐに思い出せない。その事実には少年は恐怖を感じた。

（なまえ、なまえは……。そうだ藤田クオンだ。久しく遠いで久遠。それが僕の名前だ）

自分の名前を思い出し、少しだけホッとする。そして自分の細い腕と小さな手のひらを見ながら、こんどは自分の年齢を思い出そうとする。

（5歳から10歳のあいだくらいかな？ 比べる相手がいらないからわからないや。）

そんなことを考えていると、とつぜん部屋の扉が開いた。

（なに？ なんだよ）

いきなり起きた部屋の变化に、久遠は体をこわばらせた。扉のほうを見ると、白衣を着た大人の男が、ベッドを押しながら部屋に入ってきて、少年とは反対側の壁までベッドを移動させた。

その白衣の男は久遠をちらりと見ると、何も言わずに部屋から出て行った。

部屋にはまた静かな時間が戻る。久遠は運ばれてきたベッドを見た。敷布団にかけられた毛布は少し膨らんでおり、小さな声も聞こえる。

少年は恐るおそるそのベッドに近づいていく。するとその声は、泣き声だとわかった。

「なんで泣いてるの？」

勇気をだしてそう尋ねると、ヒツと小さな声が聞こえて、小さな子供が毛布から顔をだした。

その少年は真っ白だった。真っ白な髪と真っ白な肌、そしてとてもきれいな赤い目をしていた。久遠はその子供を見た瞬間、嬉しいような悲しいような、初めて会ったはずなのに、ずっと昔から知っているような、そんなよくわからない感情を感じた。

「僕の名前は藤田久遠。久しく遠いを書いて久遠。君の名前を教えてくださいな」

久遠がそう尋ねると、その子供は真っ赤な目に涙をうかべ、目を小さな手でこすりながら、消え入るような声でこたえた。

「さらしないつき。いつきは五十に樹木の樹」

「よろしくね、五十樹。ところでなんで泣いてるの？」

久遠が尋ねると、五十樹は左腕を見せると小さな声で答えた。

「ちゅうしゃ」

見てみると五十樹の左腕には小さくて丸いシールが貼られていた。

「注射されたんだ。痛かったんだね。」

「あア、嫌いなんだよ、注射」

五十樹は少し落ち着いたようで、今度はしっかりした声でそう答えた。そして続けて五十樹は久遠に話しかけた。

「お前の目…」

「僕が目はどうしたの？」

「こっただけ少し赤い」

五十樹はそういうと、久遠の左目を指差した。

「そうなんだ、知らなかったよ。」

「自分のことなのに、知らねエのかよ。変なやつだな、おまえ」

五十樹はそう言うのと、少し笑顔になった。

「僕の目は赤いのか。じゃあ君とおそろいだね、半分だけだけど」

「そうだな」

そして二人はハハッと笑った。

1 出会い（後書き）

更科五十樹という名前は、よそ様からの流用です。

2 エリート研究者の憂鬱

私の名前は宮元誠、研究者だ。専門分野は？能力使用の効率化？である。内容は…まあそのまんまだ。

25歳の独身で、自分で言うのもなんだがエリートだ。独身なのはモテないからではない。研究に忙しいからだ。青春の全てを研究に費やしていると言っても過言ではない。

そう、決してモテないわけではないのだ。

そのエリートである私は、この春から新たな研究所に勤め始めた。特例能力者多重調整技術研究所、通称？特力研？、その施設内の0棟。ここには優秀な研究者、そして将来有望視されている能力者が集められている。

今も会議室には20人近い研究者たちが集まっており、数人が激論を交わしている。

「一方通行ちゃん用に、痛みの無い注射針を使うってことがなんで反対されなきゃならんのですか」

「バツカじゃねえのお前、痛くて泣いてる方が可愛いからに決まってるじゃねえか。」

「お前こそバカだろ。想像してみろよ、痛くない注射をされて、？今日の注射、全然痛くなかったよ？って言いながら笑いかけてくれる一報通行ちゃんを」

「てめえこそバカ丸出しじゃねえか。痛みに一生懸命に耐えて、でも耐え切れなくてボロボロと涙を流すほうが萌えるに決まってるだろ」

「萌えとか言うなよ、このクソネラーが」

「ネラーって言葉を知ってるって時点で、お前も同類じゃねえか」

「やかましいよ、なにが？閃光の研究者？だよ。厨二病全開のコテハンなんぞ使いやがって。そんなに自分が早漏なのをアピりたいのかよ」

「なんで知ってんだよ、ストーカーかよてめえ。後輩の山本相手に腰ふってろよ、このホモ野郎が」

「お、俺たちはまだピュアな関係だ」

「主任、そろそろ多数決で決めちゃいませんか？」

「あと10分経ったらそうしよう」

ちなみに見ている限り、痛い注射派と痛くない注射派は共に2割ずつ、残りの6割はどっちでもいいからとっとと決めろよ派のようだ。

私はエリート…のはず。しかし今日はそのことに少し疑問が生まれた。来るところ間違ったかなあ。

3 朝食の風景

「ほら五十樹、早く朝ごはん食べないと学校に遅れるよ」

そう言いながら久遠は、テーブルに料理を並べていく。ソファア
に座っていた五十樹は、「あア」と短く答えると、テーブルの椅子
に座る。

「今日はトンカツだよ。縁起がいいようにね」

「何に勝つつもりだよ。てかお前の敵は誰だよ」

「そんなの五十樹以外の人間全てに決まってるじゃん」

「敵が200万人以上インのかよ、そりゃあ忙しいこって」

「違うよ地球規模でだよ」

「60億オーバーだよ」

そんな他愛もない話をしながら、白を基調とした制服に身を包み、二人で食事をとりはじめる。二人は今日から中学校に入学するのだ。

長点上機学園付属中学校、それが二人が通うことになった学校だ。

現在二人はそれぞれ一人暮らしをしている。部屋は隣同士で、毎食久遠が五十樹の部屋に訪れ食事の用意をしている。

どこに住むのかを考える際に、久遠は五十樹に「一緒に住もうよ」と、かなりしつこく提案したのだが、五十樹の「無^ねエよ」という一言で一蹴された。

そしてしぶしぶ隣の部屋ということで納得したのだった。

今後は研究所へは自宅から通うことになる。家賃は全額研究所からでており、それとは別に、二人には学園都市から奨学金がわたされている。

学園都市の生徒はみな、能力レベルによって違う奨学金の額を受け取る。そして二人の奨学金は、同額ではない。

「それにしても、食費も積もり積もれば結構な額になるんじゃないか？毎食作らせてるわけだし、全額だしてやるよ」

「いいよ別に。好きでやってるんだから」

「却下だ。レベル3のてめェとレベル5の俺じゃあ奨学金の額が違いすぎんだよ。今後経費はレシート付けて請求しろ」

「…わかったよ。ただし全額じゃなくて半額で。自炊してるから言うほどの額でもないし、それにいざとなったら俺の能力使うし」

久遠は、五十樹が言い出したら中々自分の意見をまげないことを知っているので、早々に折れた。

「あアお前の能力使えば金はかかんねェからな。でも食材は普通に買ってきてンだろ？」

「まあね。コピーした食材を食べても人体に影響は無いって研究所にお墨付きをもらってるけど、そこまでお金に困ってるわけでもないし」

「実際便利だよな、お前の能力。まさに一家に一台って感じだな」

「それは結婚して家族になろうってプロポー「ちげェよ」」

そう怒鳴ると五十樹は深いため息をついた。そして冷静さを取り戻すと、あきれた様に会話を続ける。

「お前の？原子操作？は使える能力だよなアってだけの話だ」

「まあね。でもほんとに一家に一台あったら、経済が崩壊しちゃうけどね」

久遠は笑いながら答えた。

ここで久遠の能力を簡単に説明する。物体を手で触り解析をすることにより、その物体を新たに作り出すことができる。作り出したものは自由に消すことができる。

たとえば書店に行き、並んでいる本を手で触ると、買わずとも欲しい本が手に入るのだ。ただし本を解析しても、本の内容を理解できなくなるわけではない。

内容を理解するためには本を作り出し、他の人と同じように読まなければならない。本人曰く、本のデータを自分の中に圧縮ソフトで圧縮して保存しているようなもの、だとか。

ちなみに解析したものは、タグを付けて管理している。以前研究所内で手当たり次第に本を解析しまくり、どんな本を解析して取り込んだかわからなくなった。

結局一冊作り出しては読み、読み終われば消すという作業を繰り返すはめになった反省からである。

「さあそろそろ行こうか。一緒のクラスになれるといいね」

久遠がそう言うと、五十樹は「まアな」と短く答えた。

4 藤田久遠について（前書き）

設定説明です

4 藤田久遠について

藤田久遠について

1、外見

髪は黒髪で左の目だけ少し赤い。しかし普段は左目に黒のカラーコンタクトをしている。本人曰く、五十樹との二人だけの秘密だからだとか。まあ研究者たちは皆知っているのだが。顔の作りはいたって普通。特徴のない顔と言える。基本的に笑顔。

2、性格

一方通行（更科五十樹）命。人類は？五十樹？と？五十樹以外？とに分けられると考えている。？五十樹以外？の人間に興味はほぼ無い（今のところ）。B L的な意味での好きでは無いと思う。少なくとも作者はB L展開を望んでおりません。

3、能力

A、現時点での能力のレベルは3。能力は原子操作。

B、物体の原子を手の平でのみ『操作』することができ。

a、電子機器などの、構造が複雑なものの原子の『操作』は不可（知識が無いため）。ただし『分解』は可能。

C、物体を手の平で『解析』し、記憶することができる。記憶したものは手の平からのみ『作成』することができる。

a、電子機器などの、構造が複雑なものは『解析』不可（知識が無いため）。

b、複雑なものほど『解析』・『作成』には時間がかかる。ただし使用頻度が高くなればなるほど、作成の時間は短くなる。

c、『作成』したものは、自由に『分解』することができる。

e、『作成』するときには、『解析』時につけたタブや解析日時、作成頻度で目的の物体を検索し『作成』する。

4 藤田久遠について（後書き）

5月30日に一部訂正。内容に変更は無し。
5月31日に一部訂正。内容に変更は無し。
6月2日に一部訂正。内容に変更は無し。

5 初登校

歩いて10分程度で学校に着いた。家を探した時の条件が、学校から近いことだったからだ。

「人がたくさんだねえ。同年代の人間がこんなにいるのって、まだあんまり慣れないよね」

久遠は五十樹に話しかける。

「まアな。研究所じゃあ周りはジジイかババアばかりだったからなア。何人かは俺たちと同じようなガキもいたがな」

研究所に入ったあとは、二人は小学校には通えなかった。そして中学生になろうかという年齢になっても、そのまま研究所内での実験漬けになると思っていた。

だから中学に通うことになると知ったときは、二人とも心底驚いたものだった。

「あ、五十樹、あそこに人だからできてるよ」

久遠はそう言うのと、早足であるいていく。五十樹もそれにつづく。

（クラス分けが貼り出されているみたいだな）

その白いベニヤ板に貼り出された名簿を見ながら、久遠は自分と五十樹の名前を探す。

（俺は1のCか。五十樹も同じクラスだったらいいのにな）

久遠は自分の名前を見つけると、今度は五十樹の名前を探し始めた。しかし同じクラスに五十樹の名前が無いことを確認すると、別のクラスを探し始めた。

そしてしばらく探して、久遠は固まった。

「どうしたんだ？」

いつの間にか後ろに立っていた五十樹がそう尋ねると、久遠は無言のままある一点を指差した。

貼り出された名簿の、1のSというところに五十樹の名前があった。それだけならまだいい。

問題は、1のSが更科五十樹一人しかいないということだった。

「おいおいさっそくなんのイジメですかアこれは」

怒りで肩を震わせる五十樹を見て、久遠は困ったように答える。

「やっぱりレベル5だから特別待遇ってことなのかな？」

五十樹は無言で入ってきたばかりの校門の方へ歩き出した。

「ちょっとちょっとどこ行くんだよ」

久遠が五十樹の肩を掴んで止めると、五十樹は「帰ンだよ」と短く答え、さらに歩こうとする。

「いやいや来たばっかりじゃん。今日はこのあと新生を集めての入学式をやって、そのあとにクラスに分かれての今後の説明だけ。

昼までに帰れるんだから、最後までいようよ」

五十樹は久遠の話を聞き、「しゃあねェな」と同意した。

そしてその日の予定を全て消化すると、二人はそろって家路に着いた。

「なんつうかよ、教室に行ったら2、30人は机置きそうなスペースに、1つだけ机があるってのは、なかなかシュールな光景だったぜ」

帰り道で五十樹は久遠にため息交じりでそう言った。

「…とりあえず一週間はがんばって通おうよ」

久遠は五十樹の肩に手を置いた。

ちなみに五十樹の能力の反射は、久遠だけを対象に無効化している。

初めてそのことに気づいた時に久遠は「お友達登録？」と五十樹に尋ねると

「違^{ちが}エ、事も無^なエ。が、その言い方はやめろ」

とすこし耳を赤くしながら答えた。

「じゃあお気に入り登録？」とさらに尋ねると「もうそれでいいよ」と言い残して立ち去った。

その時に久遠は、？なんで今の表情を動画保存しなかったんだろう？と、その後延々と後悔しつづけたとか。

6 五十樹の中学生日記

全くやってらんねエよ、クソつたれ。この一週間学校に通った俺の感想だア。

クラスが俺一人ってのは、まア百歩譲って許してやってもいい。正直なところ、頭のデキが違うからなア。

他のバカに合わせるってのは時間の無駄だ。

しかしあいつとなら同じクラスでも、まアなんだ、アリっちゃあアリだったが。

とにかく俺がむかつてンのは、授業の内容だ。論文一つとっても、教師どもの理解が浅いんだよ。

俺はガキの時から自分の実験に研究者としても関わってたんだよ。主に安全性に関してなア。

だから論文も結構な数を読んだと思う。論文ってのは、一つの論文を理解するために、基礎知識としていくつかの論文を先に理解しておく必要があることがほとんどだ。

だから必然的にその数は膨らむことになる。自分の寿命が削られかねねエから、必死に読んだんだよ。

それに論文を読んだ後で、教師どもと議論もしたが、内向的なやつが多いンだよ。教師向きじゃねエな。

前の特力研のやつらとは結構盛り上がったンだがなア。4割ほどキメエやつらもいたが。

おそらくここにいる教師共は、優秀な研究者になりそこねた奴らが大勢いやがるンだろうな。

ンなわけで、2週目からは学校に行つてねエ。あいつも特には何も言わなかった。ちよつと寂しそうに「そっか」と言ったダケだった。

クソ、なんかムカムカしやがる。

10日ほど経ったころ、あいつがやけに上機嫌で学校から帰って来た。なんでもあだ名を付けられたらしい。？黒犬？だと。

外見に似合わずイカツいあだ名だなアと返すと、？黒い髪をした第一位の犬？の略らしい。それって喜ンでいいのかよ、と心の中でつつこんだが、本人は嬉しそうだった。

無いはずの尻尾をブンブンと振っている幻覚が見えた。

そして笑顔で「五十樹のあだ名は、今のままいけば？白もやし？

だね」とか言いやがった。

「なんでだよ」と言いつつ胸倉を掴んで前後にブンブンと振ってやった。そしたら「だって白いしモヤシっ子だし」とか言われた。まんまじゃねエか。

いやまんまじゃねエよ。クソ、体鍛えてやる。

やつのクラスメイトの話を見ると、ほとんどが俺と知り合いになりたがってるらしい。あいつは笑顔で「窒素と酸素と、その他もろもろに分解してやりたくなるよ」と言った。

俺が言うべきじゃないが、あいつはもっとダチを作ったほうがいいと思う。

そしてあいつは笑顔のまま「俺はこのまま学校に通い続けるよ。いつどんなカタチで五十樹のために利用できる人間と出会うかわからないからね」と言った。

本当に、俺以外のダチを作ったほうがいいとマジで思う。

7 五十樹は暇つぶしをする

5月に入ったある日、いつものように二人で夕食を食べていると、久遠がおもむろに話をきり出した。

「ねえ五十樹、毎日毎日毎日引きこもってて暇なんじゃない？」

「あア？若干引っかかる言われようだが、確かにヒマかもなア」

「じゃあさ、ゲームやらない？テレビゲーム」

「はア？テレビゲームだ？あのテトリスとかのゲームのことか？」

「なんかセンスが古いけど、そのゲームだよ」

久遠はゲームソフトのパッケージを五十樹に見せた。

「タイトルは？国家元首になろう？っていうんだ。内容はそのままで、国家の元首になって国を運営するんだよ」

五十樹はパッケージを受け取り、マジマジと眺める。

「結構難易度が高くて、オンライン対戦もできるらしいよ。好成績を上げると、いろんな企業とかからスカウトがかかるとか、かからないとか。どう？」

「まアスカウトに興味は無エが、ヒマだしやってみるわ」

それを聞いた久遠は、「そう言うと思った。ちょっと待っててね」と部屋を出て行った。

そして一分もせずに戻ってくると、五十樹の部屋の玄関にダンボールを積み上げていく。

大きなダンボールが合計4箱積み上げられる。

「なんだよこれ？」

五十樹もそのダンボールの山の近くまできて、頭にハテナをたくさん浮かべた。

「ん？なにして、ゲームの参考文献。五十樹の分も買っと思ったんだ」

「ゲームってこんなに大変なのかよ」

「俺も他のゲームってそんなにやったことないからわかんないよ。説明書によると、参考文献は全部で127冊。中には本じゃなくて論文も入ってるよ」

五十樹は箱を開け、中の本を見る。？塩田の作り方？や？ランチエスター戦略概論？などという本が、ぎっしりとつまっていた。

「他のやつらはこれ全部読んでゲームやってんのか？」

「どうだろ？まあ一度読まずにゲームをやってみるのもいいんじゃない？それでムリっぽかったら読めばいいんじゃないかな」

五十樹は「じゃあそうするわ」と答えた。

「ンで、俺の分も本を買って来たってことは、おまえもヤンのか？」

「もちろん。まあ俺はとりあえずは本を読んでからゲームを始める予定だけどね。じゃあこのソフトを五十樹のパソコンにインストールするね」

そう言う久遠は五十樹のパソコンにソフトをインストールし始めた。

その夜、久遠が自分の部屋に帰ってから、五十樹はさっそくゲームを試みることにした。画面上に文字が出てくる。

「まずは新規ゲームを選んで、と。それからア」

？あなたが統治する国の名前を決めてください？

「まア適当でいいか。白の国つと」

？次に統治する年代を選んでください？

「ン？中世と近代と現代か。まア最初は中世でいいか」

？それでは国の統治を始めます。あなたは国家元首なので、基本的には部下に仕事を割り振ることで業務を進めていきます。？

「なるほどなア。確かに自分でなんでもやるわけにはいかねエのかもな」

？部下A「元首様、今期の予算案をお持ちいたしました」？

「ンで予算案を見て、選択肢を選ぶわけか。数字が並ンでるが、よくわかんねェな。まアこのままでもいいだろ。？この案で進めてくれ？っ」と

？議員A「元首様、予算とは別に地方に橋を作る特別予算をいただきたいのですが。」

その地方は長雨の影響で、農産物に壊滅的な被害が出ております。いまこそ国が地方にお金を落とすべきだと思います。いかがでしょうか？」？

「あア、公共事業ってやつか。いいンじゃねェか？？許可する？っ」と。

？部下B「元首様、わが国の国防局において、パワーハラスメントが起きている可能性があります。どう対処いたしましょう？」？

「ンなこと、いちいち俺様に報告すんなよ。えーっど？当人同士で話し合いをさせる？っ」と。

なんか意外とサクサク進むな。これならあの本の山を片付けるまで

もなく上手くいくンじゃねエの？」

二時間後

？問題発生1 部下Aが過労で倒れました？
？問題発生2 部下Bが過労で倒れました？
？問題発生3 議員Aが収賄容疑で逮捕されました？
？問題発生4 わが国の国防機密が漏洩しています？
？問題発生5 国防局員がわが国を相手に訴訟を起こしました？

「…どうしてこうなった。おい議員Aなにやってくれてンですか？それに優秀そうな部下に優先的に仕事をふっただけじゃねエか。

倒れる前に相談しろよ。てか疲労度とか数値で見れねエのか？」

五十樹は説明書を読んでみる。すると？ある程度の信頼関係を構築しないと、部下のステータスは見ることができません？とあった。

「クソ、他の部下に仕事を回せばいいンだろ？」

そしてまた1時間後

？問題発生1 業務に致命的な遅れが発生しました。これにより与野党議員から、元首様へのリコールが発議されました？

五十樹はその文章を見ると、静かにパソコンの電源を落とし、ダンボールの中にあった？人間関係に困ったら読む本？と書かれた本を手に取り、ソファで読み始めた。

8 五十樹はゲームを攻略する

7月に入った。

「ヒヤッハー！てめえらなんぞ、我が白の国の敵ではねエンだよォ
ッ！山ほどスパイを送り込んで、機密情報も丸裸ってなァ！」

テンションが上限を振り切れて、軽く人格が壊れている五十樹がそこにはいた。

あのリコールを受けた後、五十樹は約一週間で参考文献を読破し、朝となく夜となくゲームをし続けていた。

「てかもう一通りクリアしたんだね。俺はやっと中世編が軌道に乗り始めたってところなのに」

「あァ？まだそんなところでちんたらやってンのか。いいぜ、俺様が手ほどきしてやるよ」

その一言で、少しイラッとした久遠は小さな声でつぶやいた。

「引きこもりのくせに」

「ンだよ。他にやることがナンもねェンだよ」

「それなら一回学校にでも行ってみれば？考えるまでもなく出席日数足りてないんだから、確認のためにも学校に顔だしなよ。中学留年とか嫌だろ？義務教育でそんなのあるのか知らないけど」

「ンなもん電話で十分だろ。わざわざ外に出るなんぞかったりィし」

「じゃあますます白もやしルート一直線だね」

久遠の満面の笑みによるその言葉を聞き、五十樹は言葉につまる。

たしかにこの一ヶ月は、近くのコンビニに缶コーヒーを買いに行く以外外出していなかった。

「わかったわかったわかりましたよ。行けばいいンだろ行けば」

久遠はそれを聞くと少しホッとし、胸をなでおろした。そしてゲームを勧めたことをちよつとだけ後悔し、別の暇つぶしを考えねばと心に決めた。

そして三ヶ月ぶりに登校した五十樹を見て教師たちは狼狽し、

「じゃ、じゃあ論文一本書いて来て。論旨は自分の能力の有効的な活用方法について。期限は夏休み明けでいいから」

と、名目上の担任はそれだけを早口で言うのと、強引に会話を打ち切った。

その会話の様子を五十樹から聞いた久遠は

「なんでそんなに担任はビビッてたの？ いったい何をしたのさ？」

と尋ねると、五十樹は

「議論で泣きが入るまで徹底的に叩いた」

とだけ答えた。

ちなみに昼食を二人で食堂で食べていると、まわりの生徒が同じテーブルに着きたがっていたが、五十樹の元々の目つきの悪さと、ここ最近のゲームのし過ぎでできた深い隈により、誰も同じテーブルの席には座らなかった。

9 二人は目標を見つける（前書き）

このようなサムい話を読んでくださっている皆様に、心よりお礼を申し上げます。作者自身、盛り上がり欠けるなあと、己の力不足を嘆いている次第です。

さて14か15話あたりから物語りは大きく動き出す予定です。それまでしばらくご辛抱いただけると幸いです。

9 二人は目標を見つける

「なににすっかなア」

いつものように二人で朝食を食べていると、五十樹はつぶやいた。

「論文のこと？」

「あア」

「五十樹の能力の有効的な活用方法についてだっけ。つまりは将来はどんな職に就くかってことだよな？」

「まアそうとも言えるな。俺は漠然とだけど研究者にでもなるものだと思うってたんだよ。昔からやってたし」

「なるほどね。でも五十樹の頭の良さは発揮できるけど、能力は関係なさそうだよな、研究者って」

「そうなんだよなア。お前はなんか決めてんの？」

「俺？俺は言うまでも無く五十樹のおよめさ「却下」……。じゃあおむこさ「却下その2」……。最近冷たくなったよね、五十樹って。

初めて会ったときにした、大きくなったら結婚しようねって約束はもう忘れたの？」

「思い出を捏造すンじゃねエよ。俺からは一回たりとも言ってるねエし」

「……まあマジメな話、二人でなんかやれれば最高だけどね」

「それは、まアそうだな」

「能力が役に立って、且つ儲かる仕事だよね」

「俺は金には執着あんまねエけどな。まア儲からねエよりかは何かといいかなア」

「じゃあさ、殺し屋なんてど「却下だ！ンなもん論文に書けるかよ！受け取って読んだ教師ども大混乱じゃねエか。ンで暗号名は、白い殺し屋とかかよ。ねエよ！」、……なるほど」

「ゴ○ゴはダメか。んゝ。じゃあ…、おおゝいいこと思いついた。ゴル○がダメなら、ブラックジャツ○はどうよ？儲かるし能力も生かせるんじゃない？」

「医者…か。俺とお前で内科と外科か。マジでいいんじゃない？とりあえずは第一候補決定だな」

「じゃあ俺は学校に行ってくるよ。その間にやるべきこととかその他もろもろ考えというて」

そう言い残し、久遠は学校にむかった。

（医者、医者か。まさか俺が医者を目指すことになるとはなァ）

五十樹は苦笑いをうかべる。

（壊すことしかできねェと思ってたんだがな）

五十樹は自分の手の平を見つめ、自分の能力について考える。ベクトル操作。小学校にあがるときには、ほぼその能力は完成されていた。

研究所ではその能力を使い、いろんな生物を殺した。複数の動物

がひとつの体に宿ったモノや、五十樹と同じくらいの歳の人間も。

久遠の待遇も同じようなものだった。

二人にとって研究所とは世界の全てで、そして研究者達の命令は絶対だった。一日が終わると、二人は互いが死ななかったことを喜びあった。

「動物であれ人間であれ、死んだらそれはただのたんぱく質の固まりだ。僕たちにできることは何もないし、する必要もないと思う」

久遠は五十樹の目をまっすぐに見つめて、そう言った。そして

「五十樹が生きてて本当に嬉しいよ」

と満面の笑みで思いを伝えた。

きっと二人のうちどちらかが欠けても、残された方は壊れてしまっていただろう。だが二人は生き残った。それゆえに二人の絆は強い。

「死人に口出しはさせねエ。俺たちはこの手で掴むだけだ」

五十樹は力いっぱい握りこぶしをつくる。これからたくさんのもを掴んでいくのだろう。二人一緒に。

9 二人は目標を見つける（後書き）

研究所での久遠との出会いにより、一方通行さんの10歳の時の、小学校の友達との喧嘩↓軍隊との戦いイベントは発生しませんでした。

一方通行は白衣が似合うと思う。白いし。目つきが悪くて実は強い闇医者、マンガでは確実に重要キャラになると思う。

10 久遠の中学生日記

久遠です。今日は俺の学園生活についてお話します。

まずは登校。もちろん一人で登校します。なぜなら俺の愛する引きこもり男は、絶賛引きこもり中だからです。

当初の予定では、きゃっきやうふふな登下校をするはずだったのに。つつこむ人間がいないと、ボケは働く場が無いのです。

校門の近くまで来ると、クラスメイトに出会います。そしてそのまま他愛も無い話をしながら教室に向かいます。

近すぎず離れすぎずというヌルい関係を保ちます。楽ですから。クラスメイト達とは良好な関係を結べていると思います。一部を除いて。

「

やあおはよう藤田君、相変わらず辛気臭い顔をしているね」

「後生ですから3年間だけ口を閉じていてもらえないかな？牛乳？というあだ名の通り、牛乳を拭き終わった雑巾みたいな口臭がするんで」

良好な関係を結べない、否、結びたくないこの男、名前を潮^{うしお}入^い江^{りえ}という。ウシに入るでギュウニユウだ。命名者はもちろん俺。

見た目は残念な金持ちって感じだ。金髪で一見おかつぱ頭なのだが、髪の毛の右半分だけ左より長い。美容院を途中で抜け出してきたのだろうか。それとも値段が半額になるのだろうか。

心底どうでもいいことだが。

「フン、第一位が隣にいたくとも、口だけは一丁前のようだね。犬は犬らしく飼い主に尻尾をふっておきたまえ？黒犬？くん」

「犬は鼻がいいからね、口臭が腐った牛乳であるところの？牛乳？くんとは同じ空間にいたくないので失礼するよ」

「逃げるのかね？やはり第一位が隣にいないと、レベル4の僕が怖いんだね？」

こいつのウザさは、学園内でも数少ないレベル4の能力者だから、ではなく、修飾話のようにレベル4であることを強調することなのだ。

入学からしばらくは我慢できた。中身・外見ともに気の毒な頭の子なんだろうと放置していた。

すると奴はオートで調子に乗り出し、次のレベル5は自分であり、年齢的な伸びしろは十分にあるので、第一位になるのも不可能ではないなどと言いつ出したのだ。

ちなみに奴の能力は念動力で、レベル5の順位基準である？能力の応用が生み出す利益？において、五十樹を上回るとは到底思えない。てか年齢による伸びしろって、五十樹も同じ年なんだけどな。

入学から一学期が終わろうかというある日、もういいや、気体にも分解しちゃおうと心に決めた。能力を使えば証拠も残らないからね。そう思い背後から近づいた。

結論を言うと、実行できなかった。五十樹の顔が思い浮かんだのだ。そして話し合った？医者になる？という夢。？医は仁術なり？などと綺麗事を言うつもりはない。

しかし研究所での生活で、短絡的に殺人を肯定するようになってしまっている。これは今後きつと自分の足かせになるだろう。

これは絶対に克服しなければならない。

翌日の体育の日、俺は奴が脱いで置いておいた制服のベルト・ジッパー・ボタン全てをモロい物質に変えた。

それから3日後の日の放課後、駅前でズボンを足首まで下ろし、

その下ろしたズボンに足をとられ盛大に転び、そのまま気絶したというコントに出てきそうな変質者が現れたそうなの。

春も終わり、これから夏本番って時期なのよね。

10 久遠の中学生日記（後書き）

この作品に出てくるオリジナルキャラは、まともな扱いを受けないという法則発動。

11 二人は病院に行く（前編）（前書き）

原作キャラが出ます。しかし名前は勝手につけました。

11 二人は病院に行く（前編）

夏休みに入った7月末頃のある日、五十樹の部屋に久遠が駆け込んできた。

「みつけたよ五十樹」

とても興奮した様子で久遠は五十樹に話しかける。五十樹はソファーに寝転びながら医学書を読んでいる。

「落ち着けよ。ンで何を見つけたのか目的語をつけてしゃべりやがれ」

「医者だよ医者。それも能力者の」

五十樹は本を読むのをやめ、久遠の方を見る。

「ンでそいつは今まで見つけた能力者の医者ドモと何が違うんだ？」

五十樹も医者を探さずに医学書を読み漁っていたわけではない。何人か見つけ、二人して話を聞きに行っていた。しかしどの医者も

「まずは医大を卒業してから来い」と相手にされなかったのだ。

当然といえば当然である。二人ともまだ中学生なのだから。

「それがね、その医者は患者を助けるためなら、なんでもどんな技術でも用意するんだって」

「つまりは患者を助けるために必要なら、中坊の俺たちでも使う可能性があるってことかア？」

「たぶん。いやよくわからないよ、会ってみたいことにはね。けど今までのやつらよりは可能性はあると思う」

「ンじゃあ行ってみるか。無駄足にならねエ事を祈りながらなア」

五十樹は「場所は？」と聞くと久遠は「第7学区」と答えた。五十樹はパソコンに向かい「近場から探し回ったからなア」と久遠から聞いた病院の場所を確認し、二人で部屋を出た。

第7学区に向かうモノレールの中で五十樹は久遠に尋ねる。

「ンでそいつの名前は？」

「えーっとね、森野医蔵。顔がカエルなんだって」

「ンだよそれ、どっかの研究所でモルモットにでもされたのか？」

五十樹はパソコンでその病院の住所しか調べなかった。

病院のサイトには医師の個人データは掲載されていなかったのも、名前も顔もしらなかったのである。

「どうなんだろうね？会ったら聞いてみる？」

久遠は笑いながらそう言ったが、五十樹は「ンなことしたらすぐに全部が水の泡だろ」と意地悪そうな笑顔で答えた。

モノレールから降りると、10分くらい歩いたところに目的の病院があった。

「さーて、こっからどうする？」

「ンなもん正面から乗り込むに決まってンだろ。見舞い客もいるだろうから、俺らが入り込んでも問題ねェだろうしな」

「そだね」と久遠は短く答えると、二人は正面玄関から病院に入っ
ていった。

病院に入って、まずはひたすら病院内を歩き回ることにした。

「結構広いね。これは迷子になりそうだよ。手をつないであげよう
か？」

「ねエよキメエよ、逆にちよつと離れて歩け」

五十樹の言葉に「ひどいっ」と久遠は答え、さらに歩き続ける。

「なんつうか、こう壁が真っ白な空間ってのは、どうも落ちつかね
エな」

「壁と同化しそうだから？保護色的に」

「なんでだよ、ンなわけあるか！あの研究所と似てるからに決まっ
てンだろ！」

「ああ確かにそうかも。でもあそこと違って、ここは人間味がある

よ」

五十樹はしばらく久遠を見つめたあと、「まアな」とだけ返した。そんなことを話していると、知らない人が二人に話しかけてきた。

「どうしたんだい君たち。先ほどから目的も無さそうに院内を歩き回っているようだけど。目的の場所を教えてください、僕がそのまま案内してあげよう」

二人は振り返り、その男の顔を見た瞬間、二人の心の声は完全にハモった。

（（カエルだ））

二人は数秒硬直状態になった。そして久遠がおそろおそろ口を開く。

「あ、あの森野先生でしょうか？」

「ああそうだよ。僕の名前は森野医蔵だ。僕になにかようかね？」

久遠は「はい」と答えると、まずは自分たちの名前を名乗り、自

分たちの目的を話し始めた。

将来医者になりたいということ。

他の医者たちにはまだ中学生だからと相手にされなかったこと。

自分たちの能力についてと、今すぐにも自分たちの能力が何かの役にたつのではないのかということなどを。

「ふうん、なるほどね。ところで君たちはなぜ医者を目指そうと思ったんだい？能力を有効利用できるってこと以外で」

「そりゃアもちろん金が「ストロップ」」

久遠は五十樹の言葉をさえぎり、五十樹の肩に腕を組んで、カエル医師に背を向けた。そして小声で五十樹に言う。

「あのテの医者に金が目的だなんて言うべきじゃないと思うよ。どうせ黙ってればわからない事なんだし」

「そうゆうもんなのか？」

「そうゆうもんだよ」

「もしもし君たち、残念ながら全部聞こえてしまってるんだがね」

そう言うとかエル医師はため息を吐き、二人の顔をまじまじと見た。二人は息を呑み、カエル医師の顔を見ることしかできなかった。

しばらくするとカエル医師はもう一度深いため息を吐き、「いいだろう、ついてきなさい」と言い、二人に背を向けて歩き出した。

しばらく歩き、ある病室の前で立ち止まり軽くノックをすると、中から「どうぞ」と声がした。

中に入ると、ベッドの上に腰掛けた初老の患者が、カエル医師を見て声をかける。

「ああ先生、新しい足も慣れればどうってことないですな」

患者はズボンの右足のすそをめくりあげ、医師に見せる。右ひざから下は義足だった。

「それはなによりですね」

そう言うとかエル医師は久遠を見た。

「藤田くんと言ったかね？君の能力でこの山川さんに新しい足を付けてもらいたい。できるね？」

カエル医師は少し目を細め、真剣な声でそう話す。久遠はカエル医師の迫力に少しおされながら「えっと手首から先の再生なら経験が」と研究所での経験を思い返しながらそう答えた。

「ふむ。そうかね。それは何年くらい前の話だね？」

「あれは、ええーっと、3年くらい前だったと思います」

「なるほどね。ちょっと時間が経ってるね。じゃあついてきなさい。では山川さんまた来ますよ」

そう言い、カエル医師はきびすを返し、病室を出た。二人もそれに続く。少し歩き、エレベータの前までくると、下向きの矢印のボタンを押した。

すぐに扉は開き、二人に乗るように手で促した。

12 二人は病院に行く（後編）

エレベータに乗るとカエル医師は

「前の再生治療からすこし時間が経っているみたいだから、ちょっと練習してもらおうと思う」

とだけ言うと、エレベータが地下3階に止まるまで無言になった。

エレベータから出ると、そこには動物の臭いが充満していた。

久遠は研究所で見た、名前もわからないような動物たちの事を思い出し、五十樹を見た。

五十樹も同じことを思い出していたようで、二人の表情は少し硬くなる。

「さてここには事故などで怪我をした動物たちを一時的に預かっている。藤田くん、君にはその治療をしてもらおうと思う」

そう言うとカエル医師は大きめのケージの前に立った。中にいるのは薄汚れたゴールデンレトリバーだった。

久遠はしゃがんで犬を見る。犬には左後ろ足が無かった。

犬は久遠を警戒しているようで、じっと久遠を見ている。

「さあ檻から出すよ」カエル医師がそう言いながら、ケージの扉を開く。犬は未だに警戒しているが、カエル医師には懐いているように、ゆっくりと外に出てきた。

「噛まれたらどうしましょう？」

「だいじょうぶだよ、ここは病院だ。狂犬病の薬くらい売るほど置いてあるさね」

笑顔でそう答えるカエル医師を見て久遠は心を決めて犬を見た。そしてゆっくりと犬の頭をなでると

「ちよつとの間だけだから動かないでくれよ」

と犬に話しかけた。

久遠は犬のまだ残っている方の右後ろ足に触れ、『解析』を始める。次に犬の左側に回り、切断面にゆっくりと触り『作成』を始める。

すると小さな光の粒が犬の切断面に集まり始め、ゆっくりと足のカタチをかたどっていく。

そしてゆっくり光は納まっていき、茶色い犬の足になった。

「よしっ」久遠は小さくガッツポーズをつくり、カエル医師のほうを向く。

「いやはや見事なものだね、これは。想像以上だよ」

犬は何が起こったのか理解できていなかったようだが、無くなっただけの後ろ足が戻ったと気づくと、確認するかのようにペロペロと自分の足を舐めた。

そして久遠のほうをみると、小さくワンツと吠えた。久遠が犬の頭を撫でていると、五十樹が話しかけてきた。

「すげエモンだな、こりゃあ。生き物に能力があったの、初めて見たわ」

五十樹はしきりに関心し、久遠は胸をなでおろした。そのあと同じ部屋にいた同じように四肢や尻尾の欠けた猫2匹と犬3匹を治療し、エレベーターで先ほどの義足の老人の病室へと向かった。

3人で廊下を歩いて山川老人の病室へ向かっていると、突然天井のスピーカーから声が響いた。

「森野先生、森野先生、至急ER第2処置室までおこしてください」

久遠と五十樹はカエル医師を見ると、カエル医師は

「どうやら急患のようだね。君たちはここで待っていてくれ。くれぐれも山川さんに勝手に治療したりしてはいけないよ」

と言に残し、その場を去った。

「腕のいい医者ってのは、忙しいもんだな」

「そうだね。俺たちはもっと楽しんで稼ごうね」

どこまでも現実を嘗めたままの二人である。10分ほどその近くの椅子に座っていると、ピンク色の看護服を着た女性がすごい勢いで二人にまくしたてた。

「あなたたちが更科君と藤田君？」

看護師のあまりの勢いに、二人は気後れしつつも首を縦に振る。

「よかったわ、森野先生が呼んでるの。私について来て」

なにがなにやらわからない二人だが、とりあえず黙ってついていくことにした。

元居た2階から階段で1階におり、いくつもの角をまがり両開きの扉を開き中へと入る。

「二人ともこの服を着て。早く」

看護師に緑色の服とマスク、そして薄いゴム製の手袋を渡される。二人は無言でそれらを着ける。

「さあ準備ができたならこの部屋に入って」

看護師に言われるまま、二人は部屋の中に入る。するとそこにはカエル医師と他に4人の人間が忙しそうに動き回っている。

ベッドには右腕が肩から切断された男性が横たわっていた。そしてその横には、ステンレス製のトレイに入った右腕らしきものがあった。

右腕らしきものは何箇所も骨折しているようで、何箇所か骨が飛び出していた。

「二人ともよく来てくれたね。実は少し手伝って欲しいんだ。まあ簡単に言うと、この患者さんはとても珍しい血液の型をしていてね、この病院にもあまり在庫が無いんだよ。」

さらに血液を循環させる機械、僕たちはポンプと呼んでるんだけどね、このポンプも故障してしまったんだよ」

そこまで言うと、冷静になるためか、二人の顔を交互に見る。そして久遠の顔を見ながら話を続ける。

「藤田君。きみには損壊してしまった腕を再生、その後胴体に繋げて欲しいんだ。すでにある腕を再生して繋げるのと、ゼロから右腕を作り出して繋げるのではどちらが確実だい？」

久遠は少し考え、

「前者です。元々あるものをつかったほうが確実です」

と答えるとカエル医師は大きくうなずき、五十樹の方を向き話し出す。

「更科君、きみにはポンプの代わりをしてほしいんだ。今は肩で止血しているから血は止まっている。」

まずは胴体から流れ出る血液を、胴体の静脈に戻してほしいんだ。

そして藤田君が右腕を再生させたら、胴体から流れ出る血液を腕に流し、腕の静脈から流れる血液を胴体に戻してほしい。

藤田君が腕を胴体に繋げるまでね。できるかい？」

五十樹は一度首を縦にふる。カエル医師は目を細めて大きくうなずくと、「では始めよう」と言った。

30分後、二人の役目は終わり、二人は緑色の手術着を脱ぎもせずに処置室の前の廊下に横に並んでへたり込んでいた。

久遠は前を見たまま「殺すほうが簡単で気楽な気がする」というと五十樹は「あアそうだな」と短く答えた。

そこに処置室からカエル医師が出て来て、手術着や手袋を外しながら二人に話しかけた。

「まったく君たち二人は大したものだね。おかげで一人の人間を救うことができたよ」

その言葉を聞き、二人は力なく笑う。

「じゃあ山川さんの件は明日にしよう。さすがに今日は疲れただろうからね」

久遠は「明日ですか?」と聞き返した。

「なにか大事な用事でもあるのかい?」

その言葉に久遠は「えーっと学校が「中学校は全て夏休みに入ってるはずだよね?」…、わかりました。明日も来ます」と、観念した。

「きみたちの能力は本当にすばらしいよ。まさに医者になるために持って生まれたような力だ。誇りに思うべきだね。」

ああ明日は病院に来たら僕のオフィスに来てくれ、3階にあるから」

カエル医師はそう言うと、扉を開けてどこかに歩いて行った。

その後二人は一時間ほどその場でへたり込んでいたが、五十樹の「そろそろ帰るか」という言葉で立ち上がり、手術着などを?使用済み?と書かれたかごに放り込むと、病院を後にした。

帰りのモノレールの中で二人は無言のまま椅子に座っている。久

遠は五十樹の方を見ずに搾り出すようにして小さな声で言葉をだした。

「俺たちでも人の命を救えるんだな」

その言葉に五十樹は短く「あア」と答え、それきりまた二人とも無言になった。

無言のまま二人は部屋の前まで来ると、久遠が「晩飯は？」と五十樹に尋ねた。五十樹は「今日はいいわ」と答え、そのまま二人はそれぞれの部屋に入り、ベッドに倒れこむようにして泥のように眠った。

その日の夜、カエル医師は病院内の自分の個室に入り、今日会った二人の少年に関する情報を検索していた。

「おかしいね、第一位の更科くんはともかく、レベル3の藤田くんの記録も一部閲覧禁止になっているね。なにか危ないことに巻き込まれなきゃいいんだが」

そうつぶやくと、静かにパソコンの電源を落とした。

13 夏の終わり

次の日、久遠は目が覚めるとまずはシャワーを浴び、体を乾かしながら昨日の事を考える。

病院からの帰りに感じた倦怠感も幾分なりをひそめていた。そしていつものように朝食を作るために五十樹の部屋へと向かった。

部屋に入ると五十樹もシャワーを浴びたあとのようで、髪にタオルを乗せている。

久遠が「おはよ」というと、五十樹も「おオ」と返す。久遠が簡単な朝食を作り、二人して食べ始めた。

久遠が「昨日は、さ」と言うと、五十樹は「ン？」と久遠を見た。

「昨日はすごい体験したよね」

「あア確かにスゲー体験だったなア」

五十樹はトーストをかじりながら答える。

「俺はさ、たぶんビビッたんだと思う。今までやってきたことと、これからの明るっぽい未来を比べて」

「確かになア。俺も、過去は置いといて、今後はまともな人生を送るつもりだった。」

だがまアお前の言うところの、明るっぽい未来ってのが現実的になってきちまうと、なんかこう、尻込みつつうのか、しちまったわ」

「つまり俺たちは、まともな幸せには免疫が無いってことだよな」

久遠はそう笑いながら言うと、五十樹も「そういうことだな」とニヤリと笑った。

朝食を食べ終わると、二人で病院にむかった。モノレールの中で

「今日もめいっぱい働かされるのかな？」

「まアそうだろうなア。あのカエルまじで使えるもんは何でも使うってな感じだったからなア」

などと話し、昨日の帰り道での倦怠感は、もうすっかりなくなっていた。

病院に着くと、昨日言われた通り3階の森野と書かれたプレートのある部屋に来了。

ノックするとカエル医師が出てきて「やあ来たね」とだけ言うと、久遠の顔をじっとみつめた。

久遠が「どうしたんですか？」と尋ねると「いや、なんでもないんだ」と答えた。

「じゃあまずは昨日やりのこした山川さんの件から始めようか」

そういつとカエル医師はすたすたと歩き始めた。

それから二人は毎日、馬車馬のように能力を使って働き続けた。

一日の終わりにはカエル医師に医学書を能力で『解析』させてもらい、家に帰って読むという繰り返しになった。

ある日「3日後に更科くんに白血病の治療をやってもらう」カエル医師が唐突にそう告げた。

久遠は「白血病って五十樹の能力で治せるんですか？」と尋ねると、

「簡単に言うと、治すことのできる種類の白血病なんだよ。更科くんの能力で十分に対処は可能だよ。あとで資料をわたすからね」

と答えが返ってきた。

それを聞いた五十樹は「まア今さらなんだがよ、医師免許のない俺たちが治療をしていいのかよ？」と尋ねると、カエル医師は自信満々に返した。

「僕を誰だと思っているんだい？患者のためなら、使えるものは何だって使うのがモットーだからね。

免許のことなんてどうにでもなるもんさね。

それに薬での治療も可能だけど、副作用の無い薬なんてものは無いからね。

使わないにこしたことは無いんだよ」

それを聞いた五十樹は「ある意味イッちまってるなア」ともらし、久遠は「こうゆうのをマッドって言うんじゃない？」とつぶやいた。

それを聞いたカエル医師は、心底不思議そうな顔をして「そうかい？」とだけ答えた。

たまに病院帰りに、巨大ショッピングモールのセブンスミストにも立ち寄ったりもした。

「五十樹もたまにはちゃんとした服買いなよ、そんなウケ狙いのイロモノっぽいじゃなくてさ」

「はア？何言ってるんだ？これのどこがウルトラマンだよ」

「えっ？それマジだったの？（てか多少自覚はあるみたいじゃないか）」

「お前が着てるのと多分析がいくつか違うハズなんだがな」

「まあそれでいいんなら何も言わないけどね。そうだ秋もののジャケット見に行こうよ。全く持ってないんじゃない？」

「おオ確かに持ってねエわ。でもよ、ジャケット買ってもすぐに体に合わなくなるんじゃないか？」

「成長するのかなあ？」

「何か言ったか？」

「いやいやなにも。おお万年筆売ってるよ。ジャケット買ったら、やっぱり胸のポケットには万年筆挿したいよね。大人って感じするし」

こうして二人の夏は過ぎていった。

しかしビル^{リーダイアグラム}の壁面に備え付けられている巨大ディスプレイに、樹形の設計者が嵐の訪れを告げていた。

13 夏の終わり（後書き）

か、感想が欲しいです…。

14 物語は動き出す

夏休みの最終日、五十樹は意気揚々と学校の校門から外へと出た。

一ヶ月にわたる病院での見習い医師としての労働は、無事に3日前に終了した。

なぜ夏休みの最終日まで通わなかったかというと、当初の目的である論文を書くためであった。

もちろんゼロからこの一日二日で書き上げたのではなく、毎日少しずつ書き溜めていたのを、丸二日かけてまとめたのである。

そして学校が始まってしまえば他の学生がたくさん学校にいらるであらうと考え、夏休みの最終日である今日、学校に届けに行っただった。

病院での労働の最終日にカエル医師に

「時間が空いたらいつでも来るといい。きみならいつでも歓迎するさね」

と言われた。

ちなみに久遠は昨日まで目いっぱい働かされていたようだ。

「今日は一日中寝て過ごす！」

と朝食を食べていたときに五十樹に宣言していた。

町をブラつきながら、五十樹は昨日までの事を考える。

ちょっと能力を使っただけで、患者はみな大げさなくらいに感謝した。

その事を考えると、何かとてもくすぐったいような、今まで感じたことのないような感じがした。

「チツ、人がせっかく物思いにふけってるってのに、おたくはいったいどこのどちら様ですか？」

周りに人がいない場所まで来ると、五十樹は後ろを振り向き、そこに立つ黒いスーツを着た大男に、そう威嚇した。

「ああなんだ気づいてたのか。それならもっと早くに声をかけるべきだったな」

「耳の穴つまってンですか？ テメエはどここの誰だって聞いてんだよ！」

「おいおい落ち着けよ一方通行。アクセラレータ お前に楽しい楽しい実験の話を持ってきてやったんだからなあ」

「あアパスだ。今はンな気分じゃあねエンだよ」

「残念ながらパスは無しなんだわ。学園都市上層部の肝いりってやつだ」

それを聞くと五十樹は男の胸倉を掴むと、地面に引き倒した。そして男の右腕の上に右足を乗せるとギリギリと力を込める。

「ンでその肝いりってやつを断ったら、どうなるンですかア？」

「ぐがあっ！ガキがサカってんじゃねえよ、足をどけろや。断るとてめえの隣人が死ぬんだよ！」

その言葉を聞くと「ンだど？」とつぶやき、五十樹は一瞬で頭が冷えていくような感覚を感じた。

そしてもう一度自分の中で、その言葉をその意味を反芻する。

「ンなことさせるわけが、ねエだろうがアアア！」

そう叫ぶと、男の右腕を踏みつけていた右足を、ベクトル操作により地面まで踏み抜いた。

男の右腕を踏み抜いた五十樹の右足は、そのまま地面を深く陥没させ、四方八方にヒビを走らせる。

「ギャアアアアア、お、俺の腕があゝ糞クソくそつくそガキが。てめえ自分の立場わかってんのかよおお！」

男は自分の踏みちぎられた腕の断面部分を左手で押さえながら叫ぶ。

「喜べ！実験は受けてやる。ただし。アイツに指一本でも触れてみろ！この町ごとテメェら全員ブチ殺してやる！」

「くそが！最初ッからおとなしくそう言いやがれ！」

「ソラ早く近くにいるテメェの仲間を呼びやがれ」

一転冷静になった五十樹は、冷めた声で黒服の男に言った。

「ああ？なんで近くに俺の仲間がいるってわかんたよ？」

「デメエみたいな低能な三下が、こんな重要な仕事一人で任されるわけねエじゃねエか」

その言葉を合図にするかのように、黒いスーツを着た別の男が五十樹の目の前に現れた。

「部下が大変失礼いたしましたアクセラレータ一方通行様」

そう言うとその男は深々と頭を下げる。

「あちらに車を待たせております。どうかご足労ねがいます」

五十樹は「クソったれ」と小さくつぶやくと、その黒服の男の後をついていった。

五十樹を乗せた黒塗りのリムジンは、静かに走り続ける。車内では誰も一言も発することも無かった。

五十樹も久遠に手出しをさせない方法を考え続けるが、今後一生

片時も離れずに守り続けるのは不可能だと結論付けた。

そして今できる最善策は、まずはその実験内容を聞くことだと考え、静かに目を閉じた。

車が静かに止まった。五十樹の向かい側に座っていたリーダーらしき男が、五十樹に話しかける。

「目的地に到着いたしましたアクセラレータ一方通行様」

五十樹は無言のまま車を降りると、少しだけ雨が降り始めていた。そして黒服の男に先導され、古ぼけた建物の中に入って行く。

（ここは使われなくなった研究所か？一応電気は通ってるみたいだが。今回のためだけに用意されたってところか。

どうやらここを潰しても、実験を止める事はできなさそうだな。まあそんな甘いわけねエか）

先導していた黒服の男が部屋の扉を開け、無言のまま五十樹に入るように促す。

部屋に入ると、古ぼけたテーブルと2脚の椅子が置かれており、その1脚には見知らぬ男が座っていた。

男は不気味なほど大きな目で五十樹を観察するかのように眺めている。歳は50台くらいで、口の中には金歯が何本か光っている。

「遠いところまでご足労いただいて申し訳なかったの」

そう言うとその男は手で五十樹に椅子に座るよう促す。しかし五十樹は立ったままで、その男に言葉を返す。

「とつとと実験とやらの内容をしゃべりやがれ」

「ふうむ、せっかちだのう。まあよかろう」

男は右腕で自分のアゴを触り、そして話を続ける。

「君はレベル6になりたいとは思わないかい？」

「全く思わねえな」

「即答だの。どうやら本当に興味が無いようだの。まあ今度きみにやってもらう実験というのが、レベル6を作り出すことを目的としておるのだよ」

「ンで方法はどうやんだ？」

「簡単に言うのだの、とある人間のクローンを殺して欲しいのだよ」

「んなことでホントにレベル6になるとでも思ってたのかア？」

「ああ。そう ツリーダイアグラム 樹形図の設計者 がはじきだしたのだ」

「（ンなもんまで持ち出してくるって事は、そうとう大掛かりな実験みたいだなア。まさに上層部の肝いりってことか）

けどよオ、レベル6になるための実験なんだ、普通にクローンを殺して終わりってわけじゃねエよな？」

「いやいや、きみにしてもらうのはクローンを殺してもらうだけだぞ。ただし、その数は2万體だがの」

「……どオやらマジでイツちまってるみたいだなアテメエら」

「いやなに、クローンなんぞ、所詮ただの消耗品にすぎんよ。レベル6を生み出すためと考えれば、安いものだと思うがの」

「チッ。まあいい。ンで言いたいことはそれで終わりか？」

「まあ補足としては、？2万通りの戦闘環境で、クローンを2万体制害する？、つまり毎回違う趣向で君の相手をさせることになる。だから楽しみにしておいてくれ」

「クソが。最後にテメエの名前を教えろ」

「ワシの名前か？残念ながらそれはできんのだよ。まあどうしても呼びたければ、？責任者？とでも呼んでくれたまえ」

男は自分の金歯を見せるかのように、ニイツと笑った。

五十樹は無言のまま部屋を出て行き、車で黒服の男に家まで送らせた。

家に着く頃には天気は荒れに荒れ、バケツをひっくり返したような雨が降っていた。車を降りる際に黒服の男が

「実験の場所と日時は後日ご連絡させていただきます」

と感情のこもらない声で五十樹に伝えた。

嵐がおさまる気配はなかった。

14 物語は動き出す（後書き）

この時期にシフト実験を持つてきました。シスターズの殺害人数から考えると、これくらいの時から始まったんではないかなあと。しかしそうすると御坂美琴がレベル5になった時期がちょっと早すぎるかな、とも思いますが、そこらへんはスルーしてくださいと嬉しいです。

15 久遠はストーキングをする

昨夜から五十樹の様子がおかしい。昨日は全く晩御飯を食べなかったし、今朝は食べたことは食べたが、終始上の空だった。

そう言えば昨日は結構帰りが遅かった。そして帰ってきてから様子が変に。これは…女か！

もしも本当に彼女ができたのなら、俺も応援しなければならいだろう。

ああ見えて五十樹も男だ。溜まることもあるだろうし。

しかし相手が第一位ってステータス目当てだったり、五十樹を利用しようとしているようなビッチな売女バイタなら、排除せねばなるまい。

この一ヶ月で病院内にあった薬のほとんどは解析済みなのだ。

睡眠薬で眠らせて、遠くに捨ててこよう。乞食が集まりそうな場所とかに。

朝食後、俺は学校には行かずに私服に着替え、自宅マンションの向かいにある、昔ながらの喫茶店に来た。

ここなら五十樹がマンションから出てきても、確実に見つけることができる。

それにしても、たまにはこうして学校をサボるのもいいもんだ。
このコーヒーは旨いし、おかわり自由だし。

昔ながらの喫茶店万歳だね。

3時間が経った。出てこないなあ。

本を作り出して読もうかとも思ったけど、本に熱中したら五十樹が出てきても気づけない可能性が大きいからムリだ。

さらに2時間が経った。昼を過ぎたのでサンドウィッチを注文した。

店のマスターは紳士って感じの、初老の男性だ。紳士だから男性なのは当たり前か。

ホント中々出て来ないなあ。

今日は女のところには行かないのかな？まあ毎日会うこともないのかもね。五十樹ってタンパクそうだし。

さらに2時間経過。マジで五十樹の部屋に盗聴器と監視カメラをつけておくべきだったな。

実際何度かは考えたんだよ。でも電波とか電流とかのベクトルでバレルかも知れないって考えて、実行には移さなかった。

バレた時の言い訳が思いつかなかったってのもあるけどね。

「あっ！」

思わず声を上げてしまった。店内の少数のお客さんとマスター、ビククリさせてごめんなさい。

やっとこさ五十樹がマンションから出てきたのだ。俺は急いで会計を済ますと、10メートルほどの距離を空けて尾行を開始した。

五十樹の外見は遠くからでもとても目立つのだ。

30分ほど尾行を続けている。五十樹はどんどん人気の無い方へと歩いて行く。

工場の跡地っぽいな。こんなところに民家なんてあるのかな？それともまさか外で？さすがは学園第一位。

俺が知らない間に、そんなところまで進んでいたとは。

赤飯を炊いたほうがいいのかな？

あ、向こうの方に、制服を着た女の子が待っている。

えっと双眼鏡を『作成』してっと。お、結構可愛い。五十樹って

面食いだっただな。

頭にでっかいゴーグル？をつけている。ああいうのが今の流行なのだろうか。

それにしても感慨深いものがあるね。友人が自分より先に大人になっていくのを見るってのは。

あ、何か話を始めたな。女の子のほうに少しずつ近寄ってみよう。

んゝやっぱり聞こえないなあ。どっかで收音マイクでも『解析』してくればよかった。どこにあるのか知らないけど。

あ、あれ？女の子がゴツいナイフを取り出した。ケンカ？刃傷沙汰？ヤバく…はないか。うわっ、ほんとに切りかかった。まあ五十樹なら相手を無力化するなんてわけない…。

あれ？五十樹が女の子の首を掴んで持ち上げた。女の子はジタバタとあばれるが、すぐに動かなくなった。

俺は声を出さないように、自分の右手親指の付け根を強く噛んだ。

なんだよこれなんだよこれ。わけがわからない。

五十樹は来た道を、一度も振り返ることなく帰って行った。俺はオレはどう…助けよう。まずは助けて話を聞こう。

俺は女の子の元へと走って行き、首の辺りを触ってみる。どうやら首の骨は問題ないようだ。

じゃあ窒息死か。俺は心臓マッサージを始めた。

俺は心臓マッサージをしながら、なぜ五十樹がこんなことをしたのかを考える。いや、考えるまでもない。

これはなんらかの実験なのだろう。小さいときから嫌というほど繰り返してきた。

そして今の、つい数日前まで病人の命を救い続けていた五十樹が、殺しを伴う実験を受ける理由。

目から涙が溢れてきた。涙が女の子にポタポタと落ち続けるが止まらなかった。

どのくらい続けただろうか。1分とも30分とも思える。唐突に女の子が「かはっ」と息を吹き返した。

女の子がゲホゲホとむせ続ける横で、俺は五十樹のことを思って泣き続けた。「いつきい」と声に出して、さらに泣いた。

すると平静をとりもどした女の子が

「どうして泣いているのですか？とミサカは目の前の現実についていけず質問してみます」

と尋ねてきた。

俺はその女の子の両肩を両手で掴み、

「これはなんの実験なんだ」

と声をかけた。

するとその女の子は

「質問に質問で返すとはお里がしれますよ、と悪態をつきながらもミサカは規則なので符丁^{コード}を求めます」

俺が「符丁^{コード}?」と聞き返すと、

「符丁^{コード}を確認できませんでした。よって実験関係者ではないと判断し、ミサカはあなたの質問にはお答えできませんとキツパリと断ります」

わけがわからなかった。ふと後ろに人の気配を感じ振り返ってみると、目の前の女の子と同じ顔をした女の子が3人立っていた。

俺はますますわけがわからなくなり呆然としていると、同じ顔をした女の子たちは少し会話したあと、どこかに歩いて行った。

俺はその場で胃の中のものを全て吐き出し、そして五十樹のことを思い、また泣いた。

16 久遠は計画を立て、実行する

あの後フラフラしながらも、なんとか家まで帰って来れた。

夕食中も何を話せばいいのかわからず、二人とも無言で食べ続けた。

五十樹の部屋に置いてあった、大量の医学書はどこかに片付けられていた。

人を殺しながら人を助けるスベを得ることに耐えられないのだろう。

夕食後、俺は自分の部屋に戻り、今後の方針を考えた。

まずほぼ確実に、俺は実験の人質にされている。

だから第一に、俺は自分の身を守る力を手にしなければならない。

そして第二に、どんな実験が行われているのかを知る必要がある。

第三は、五十樹に俺がこの実験に関わろうとしている事を話すかどうか、だ。

第一の自分の身を守る力は、やはり『解析』によって武器を集めることだろう。今から剣道などの武道を始めても、おそらくは付け

焼刃になるだけだと思う。

なにより五十樹ほどではないにしろ、俺も体を動かすのが得意ってほどじゃないし。だから銃器だ。

ここは日本でそして俺はまだ中学生だから、合法的に手に入れるのは難しいと思う。スキルアウトどもは持っているのだろうか？

まあまずは比較的手に入りやすい特殊警棒を買おう。

第二の実験の詳細に関しては、全くアテがない。

それに頼りにできそうなのはカエル先生くらいしか思い浮かばない。でも巻き込むのは少し躊躇う。

ただの医者が裏の実験について詳しいとは思えないし。これに関しては完全に保留だな。

そして実験に関して詳細に知るまでは、実験を継続させ続けなければならぬ。

ちよつとした影響を与えたせいで実験が一部変更され、せつかく実験の詳細を知ったのに、？これは変更前のバージョンでした？ってことになるのを防ぐためだ。

まあ昨日1人助けてしまったが、やってしまった事はしょうがない。

第三の、五十樹に俺が関わることを教えるかどうかだけど…。

確実に反対するだろうなあ、結構心配性だし。まあ昨日のことで、実験を行う側の人間には俺のことはバレたと思ったほうがいいだろう。

俺に対して何らかの妨害があったときに考えるか。俺の介入によるペナルティの矛先は、五十樹に対してではなく確実に俺に向くだろう。

研究者ドモからすれば、第一位は貴重^{いづき}な被験者だからな。

そして考えるまでもなく、五十樹の実験相手の女の子は全員助ける。

正直なところ、五十樹以外の人間が何人死のうが知ったこっちゃないが、五十樹はきつと悲しむだろうから。

でもそうすると、いつも五十樹の動きを把握して、実験についていく必要があるな。

服に発信機を…は、現実的じゃないな。洗濯したら壊れるかもしれないし、なにより全ての服につけて、全てが五十樹にバレないってのはありえない。

いつも五十樹が身に付けてるもの…ん。あ、PDAのGPSだ。

俺のPDAで五十樹のPDAの位置情報を知ることができれば、でもそんな設定のしかたわからないなあ。

昨日の実験は確か昼の3時か4時くらいだったよな？五十樹は朝に弱い。だから実験は五十樹がちゃんと覚醒してから行われるんだと思う。

正確なデータを取るために。実験は昼から行われる可能性が高い。

次の日の朝の8時前、さあまずは特殊警棒を買いに行こう。

学校は当然サボる。別に学校を卒業しなくても、闇医者として生きていけそうだからな。

一応学校に「一身上の都合で、しばらく学校を休みます」と連絡しておいた。搜索願いでも出されたらかなわないので。

俺の住む第18学区の繁華街の大通りから、一本道はずれた場所、目的の店を見つけた。

ガンショップ灰島と書かれた店に入る。ガンショップといっても、当然売っているのはモデルガンだ。

俺が店に入ると、ムダにガタイのいい坊主頭の店員がこちらを見て「いらっしゃい」と面倒くさそうに言った。

店内の壁には、所狭しとモデルガンが飾られている。そして店員

が肘をついているガラスケースには、たくさんのナイフが並べられている。

「おい坊主、学校はどうした？」

「学校は今日は休みなんです。創立記念日ってやつで」

俺は堂々と嘘をつく。堂々としていたほうが、嘘はバレにくい。

それに俺の見た目はとてもマジメそうに見える。実際にこの前まではちゃんと学校に通っていたし、非合法なことには関わりにはならなかったしね。

まあ実験で人や動物は山ほど殺したが。

店員はすこしジロジロと俺を見てきたが「そうか」と興味なさ気に言った。

「んでこんな店になんのようだ？ ナイフやガス銃は売れねえぞ」

「最近この辺も物騒でしょ？ だから自衛のために警棒を買いに来たんです」

「まあ今に始まったこっちゃないが、確かに物騒かもか。で、どんなのがいいんだ？」

「実はぜんぜん詳しく無いんです。丈夫なほうがいいかなってくらいで」

「じゃあこれなんかはどうだ？柄のところにライトがついてんだよ。強い光をうけると目を開けてられなくなるだろ？」

「だから相手はひるむわけだ。アメリカ映画なんかでよくあるだろ。見たことねえか？警察とかS W A Tとかがライトをつけて銃をかまえるの」

「あ、ありますね。ライトが付いた銃とか。それにこちらが攻撃する前に相手がひるんでくれたら、相手を傷つけずにすみそうです」

いい子ぶってそう言うのと、「そうだな」と笑顔で言われた。

「それとスタンガンも見せてください。あとナイフも」

「おいおい坊主、お前はなにと戦うつもりだよ」

「いえ、買うわけじゃなくてちょっと興味があって」

「そういう年頃なのかもな。まあ男のロマンだしな」

「ええ。ロマンです」

店員はガラスケースの上に、数種類のスタンガンとナイフを並べてくれた。俺は一つずつ手に取り『解析』を行う。

「へえ、警棒の形をしたスタンガンなんてあるんですか」

「ああそれはスタンロッドっていつてな、警棒ほどは丈夫じゃねえな」

「ありがとうございます。じゃあ最初に見せてもらった警棒をいただきます」

そう言うと、店員は「まいど」と言い、後ろの棚から箱を取り出し、中身を確認してからビニール袋に入れて手渡してくれた。

店を出るときに「また来いよ」と声をかけられたので、軽く頭をさげて店を出た。

本当はお金を出して買う必要はなかったんだが、また来ること

あるかもしれないので、一本だけ買ったのだった。

店を出た俺は、このあたりで一番大きな本屋さんに行った。

店内をぶらぶらと歩きまわり、お目当てのものを探す。「お、あった」とつぶやき、？悪用厳禁 誰にでもできる簡単クラッキング？と書かれた、安っぽい紙でできた本を手取る。

特定の相手のパソコン内の情報をネット経由で覗いたり、ウェブカメラを乗っ取ったりする方法が書かれていた。

こんな本を読んでいる目的は、もちろん五十樹のPDAの位置情報を知る手段を探すためだ。

目次で目的の情報が書かれていないことを確認すると、元あった場所に本を戻した。

他の同じような本を次々と読んでいく。

そして4冊目の？ネットストーカーに狙われないために？という本で目的の情報を見つけた。

ちなみに？狙われないため？と題されているのに、？狙うため？の情報ばかり書かれていた。大丈夫かよこの国は。

とりあえず、俺はこの本を『解析』しておいた。さすがにこんな怪しげな本を買うわけにはいかなかった。

そして俺は急ぎ足で家路についた。

17 久遠は準備を進める

俺は自分の部屋の前まで来ると、静かに鍵を開け、中に入り、扉を音を立てないように閉めた。

注意していれば、となりの部屋の扉の開閉音が聞こえるのだ。時計を見ると11時を少し回っていた。

俺はソファーに座り、さきほどの？ネットストーカーに狙われなために？という本を『作成』した。

そして？こんなメールに要注意、あなたの居場所がバレるかも？というページを開く。

この本によると、手順はこうだ。

1、この本に書かれているURLにネットでアクセスし、プログラムをダウンロードする

2、ダウンロードしたプログラムをメールに添付し、相手に送る

3、相手のPDAでそのプログラムをひらく

これだけでいいらしい。おっかないなあ情報化社会って。

とりあえずはそのプログラムをダウンロードしておいた。あとは実行するタイミングをうかがうだけだな。

五十樹は基本的に家にいる時はPDAをソファアの横のテーブルに無造作に置いている。だからそんなにむずかしいことは無いと思う。

そのとき五十樹の部屋から、シンクに水を流す音がかすかに聞こえた。よし、まだ部屋にいるみたいだな。

あとは扉が開く音を待ち続けるだけだ。

ただ待っているのも時間がもったいないので、俺はショルダーバッグに自分の制服をつめ、すぐに持っていけるように、ソファアの上に置いた。

実験が終わったあとに使うつもりだ。

そして万が一の事を考え、先ほど『解析』した特殊警棒、スタンロッド、刃渡り15センチほどのサバイバルナイフを順番に『作成』しては消す。

俺の能力は、『作成』を繰り返せば繰り返すほど、その時間を短縮できるのだ。

これらは構造が簡単なため、すぐに1秒以下で『作成』が可能になった。少しだけ軽めの頭痛はするけど。

まだ五十樹に動きがないようなので、今度はそれぞれを手に持ち相手を切りつけるように振るってみる。

しかしナイフはいまいちしっくりこない。きっと相応の技術が必要なのだろう。

やはり一番手は特殊警棒だな。ためしに軽く自分のスネを警棒で叩いてみた。軽く叩いたはずなのに、床に両膝をつき悶絶した。

そんな一人自虐コントをしていると、五十樹の部屋の扉が開く音と、しまる音が聞こえた。

すぐに出て行くと廊下で見つかってしまう。

とりあえずさきほど制服をつめたカバンを肩にかけ、PDAの時計を見ると、時刻は14時53分だった。

そしてそのまま3分ほど待つことにした。

3分経ったのでゆっくりと部屋の扉を開け、外を見る。

廊下には誰もいない。エレベーターの前まで来ると、2機あるうちの1機が下に向かって動いていた。

俺は残りの1機のエレベーターの下ボタンを押し、廊下に戻り、マンションの玄関を見下ろした。

玄関から出てきた五十樹の白い頭を確認すると、俺は急いでエレベーターに乗り込んだ。

前回と同じように、五十樹の後ろを10メートルほど離れて歩く。

どうやら今回の実験も、昨日と同じ場所のようだった。

俺は昨日と同様に建物の陰に隠れ、様子を伺う。昨日と違うのは、五十樹を待っていたのが女の子3人になっていたことだ。

そしてそれぞれの手には、ハンドガン、アサルトライフル、刃渡り40〜50センチほどの刃物だった。

戦闘が終わるまでに5分もかからなかった。刃物を持った女の子は、昨日と同様の死に方をし、銃器をもった2人は自分で撃った弾丸をくらった。

そして昨日と同様に五十樹が立ち去るのを待ち、見えなくなってから彼女たちの元へかけよった。

3人を順番に見る。するとハンドガンを持っていた女の子に、かろうじて息があった。

俺は息のある女の子を放置して、他の2人の蘇生を始めた。

そして2人が自立呼吸するのを確認した後、再びハンドガンの女

の子を見ると、息をしていなかった。

そしてハンドガンの弾でできた傷を『操作』で治し、心臓マッサージによって蘇生させた。

昨日とは違って、女の子と会話をすることなくその場を離れた。

俺が一度女の子を見殺しにして蘇生したのは、繰り返しになるが、実験を変更させないためだ。

おそらくこの実験は、五十樹が女の子を殺すことが必須なのだろう。

そうでなければ五十樹なら相手を殺すことなく無力化させるなど造作もないことだからだ。

もし殺すことなく、俺が助けてしまうと、その女の子に対しての実験が失敗したことになるだろう。

そうすると実験が改変され、俺が実験の詳細を手に入れる手間が増えることになる。

正直なところ、俺はあの女の子たちの頭なり体なりに障害が残ろうがかまわないと思っている。

全て終わったあと、五十樹には彼女たちは？実は生きている？ということしか伝えるつもりはないからだ。

それで十分に五十樹の心の慰めになるだろう。

さて実験場を出た俺は今、第18学区の中心に近い場所にある公園のトイレの個室にいる。別に用を足しているわけではない。

カバンに入れて持ってきた制服に着替えているのだ。

そして近くにある商店街の宝石店に行き、店内に入る。正面と左右に、すぐにわかるだけでも3台の監視カメラがあった。

「いらっしやいませ」

40台半ばくらいの品のよさそうな男性が挨拶をしてきた。

「今日はどのようなものをお求めですか？」

「実は恋人に指輪を送ろうかと思ひまして」

俺は笑顔でそう言うと、店員は「それはようございますね」と答えて、ガラスのショーケースの中から、手ごろな値段のものをとります。

「これなどはいかがでしょうか。お若い方にはこういうシンプルなデザインのものが人気がございますよ」

と、宝石のついていない銀色の指輪を渡してきた。俺は受け取ると一応『解析』をしておく。

「なるほど綺麗ですね。せっかくなので、そちらの宝石がついたのも見せていただいていいですか？」

「ええもちろんです」そう言うと店員は、またショーケースからいくつかの宝石をトレイに乗せ、ショーケースの上にそのトレイを置いた。

「へえ〜綺麗なものですねえ」俺はそこから一番大きな宝石が付いた指輪を手に取り、天井の照明にその指輪の宝石をかざしながら、『解析』を行った。

そしてトレイに置かれた他の指輪も、一つずつ『解析』していく。

「たくさんありすぎて選ぶのに苦労しますね」と言う「そうです」店主は笑った。

「来週にでも恋人を連れてきて、本人に選ばせることにします」と言う、店員は少し残念そうに、「それがよろしいかもしれませんね」と答えた。

俺は一度店員に背を向け「あ、そうそう」と言い再度店員を見た。
そして続けて

「こういう宝石店には金の延べ棒って置いてるんですか？」

と尋ねると、店員は「ええ取り扱っておりますよ」と答えた。

「一度見せていただけませんか？見たことがないんですよ」

俺が笑顔でそう言うと、店員は一度俺の体を上から下まで見て、
外に出していた指輪を全てショーケースに戻すと「では少々お待ち
ください」と店の奥に入って行った。

5分もしないうちに戻ってくると、赤い布でつつんだものを両手
で持ってきた。店員がそれをショーケースの上に置くと、ゆっくり
とその赤い布を外す。

中には大中小3つの金のインゴッドがあり、製造番号らしき数字
や999・9といったよくわからない刻印がされていた。

俺が「触ってもいいですか？」と尋ねると、「ええどうぞ」と俺
に白い手袋を渡してきた。

俺は軽く触れると『解析』をした。薄い手袋越しでも『解析』に

は問題ない。そして大中小の3つとも『解析』すると

「ありがとうございます。ナゼか緊張しますね、金を目の前にすると」

お礼を言った。

それに「左様ですか」と店員が返した。

俺は「やらしい話ですが、これらはいくらくらいするんですか？」と尋ねると、

「大きい方から、400万円、200万円、100万円くらいですね。多少の変動はございますが」

と答えてくれた。

「では今度こそ帰ります。また来週に伺います」俺が軽く会釈しながらそう言うと、店員は「お待ちいたしております」と深々と頭を下げた。

店を出ると「ふう」と大きく息をはき、家に向かって歩きだした。

制服を着てきた理由は？店員から信用を得るため？だった。

学園都市トップの学校である長点上機学園、その付属中学校の制

服である。学校と同じ学区内にある店の店員が知らないわけがない。

それに？来週に恋人とまた選びに来る？と伝え、将来的な顧客になることをにおわす。

巨大なショッピングモール内にあるわけでもない、こんな商店街にある店だ。顧客を取り損なうのは是が非でも避けたいところだろう。

さらに一度？インゴッドがある？と言ってしまっていたから、見せてくれと言われたら断りにくかったという事もあったのかもしれない。

ゆえに金を俺に見せるハメになった。

まあ別に店に実害が起きるわけではないので、許して欲しい。

当然ながらもうあの店には二度と行かない。まあ不意に顔を合わせてしまった時には、恋人と別れてしまったと言っても言おう。

18 久遠はアジトに行く

宝石店から家に戻ると、俺は今度は普通に扉を開け、普通に扉を閉める。

音を気にする必要はないからね。そして部屋で制服を脱ぎ、部屋着に着替える。

隣の五十樹の家に入ると、五十樹はソファから上半身だけを起こし、こっちを見た。

眠っていたのか、眠たそうな目をしており、少し汗をかいているようだった。

（悪夢でも見たのだろうか）

俺は尋ねたい衝動に駆られたが、少し考えて尋ねるのをやめた。

どうせ今尋ねたとしても、本当の事を言ってくれるわけ無いというのがわかるからだ。

そして俺は可能な限り明るい声で言う。

「寝てた？ 晩御飯食べるよね？」

そう言う五十樹は「あア」と答え、「その前にシャワー浴びてくるわ」と風呂場に向かった。

ふとソファアの横のテーブルを見ると、財布とPDAが置いてあった。

俺は「今のうちに」と、五十樹のPDAを左手に、自分のPDAを右手に持った。

そして自分のPDAをすばやく操作し、五十樹宛の空メールに例のプログラムを添付し送信した。

するとすぐに五十樹のPDAは振動し、メールの受信を知らせる。

今度は五十樹のPDAを操作し、添付したプログラムを起動させたあと、その空メールを削除した。

そして五十樹のPDAを元の場所に戻し、自分のPDAの待機画面を見ると、はじめて見るアプリがあった。

そのアプリを起動させると、ネットに自動的に接続され、地図と×マークが表示される。

それだけ確認すると俺はニンマリと笑い、夕食の準備を始めた。

夕食を食べ終わると、俺は「それじゃあお休み」と言い、自分の部屋へと戻る。

そして部屋着から出かける用の普段着へと着替え、小さなカバンを背負い、今度は音を立てないように扉を開け閉めし、夜の街へと向かった。

それから約三ヶ月は、五十樹のストーキング↓夕食↓夜の街へ、という行動の繰り返しだった。

たまにカエル先生から呼び出されたときには病院に行く。俺でなくはどうしようもない時だけだが。

そして実験では、五十樹が一度に相手にする人数が最大15人に増えた以外は、特に変化はなかった。

いつものように夜の街の路地裏を歩く。季節は冬になっていた。たまにスキルアウトにからまれたりもするが、そんな時は逃げの手。

俺が求めているのはそんな事じゃない。

しばらく歩いていると、突然「ギャー」という叫び声がした。

俺は右手に特殊警棒を『作成』し、その声のする方へ走っていく。

しばらく走ると、前方に赤い光が見えた。

近づく、そこに男が二人いた。一人は立っていて、もう一人は仰向けに倒れ、右腕で自分の左腕を押さえている。

そして立っている男は、右手に直径10センチくらいの火の玉を持っている。

その火の玉を持っている男は、俺に気がつく

「なんだクソガキ、お前もこいつの仲間かあ」

とニヤニヤと笑いながら言う。そして続けて言う。

「てめえらみたいな無能力者見てるとな、イライラすんだわ。だからよお、てめえもちよつと燃えとけやああ〜！」

そう言う、と右手に持っていた火の玉を、俺に向かって投げつけてきた。

俺は火の玉を見て一瞬体を硬直させてしまい、反応が少し遅れて左手に少し火の玉をかすらせてしまった。

「あ、あづつ、あああ熱じいじゃねえかこのクソがああ〜」

俺は叫ぶとその男に全力で一直線に向かって走る。男は反撃を予想していなかったのか、少し後ろに下がった。

俺は右手の特殊警棒を、力いっぱいそいつの左の鎖骨めがけて振り下ろした。

クジャツ

「ぎい い い」と男は奇声を上げると、前のめりに倒れた。

どうやら痛みで気を失ったようだった。

俺はとりあえず右手で自分の左手を『操作』で治し、気絶したままの男の怪我も治した。

変に恨まれても困るしね。

俺は、左腕を押さえながらこちらを見ている男に声をかけた。

「大丈夫？ 治そうか？」そう言うと、「あ、ああ。可能なら頼むよ」と言われたので治してやった。

その男が「きみは」と何か言おうとしたとき、別の男が現れた。

「コータ、だいじょうぶか？」

そう言うとその男はゼエゼエと息を切らしながら、俺がたった今治療してやった男の元に駆け寄ってきた。

コータと呼ばれた男は「大丈夫。この少年が助けてくれたんだよ」と俺のほうを見た。

「そうか、やるなあボウズ、礼をするからついてきな」

俺の返事を待たずに俺の右腕をつかみ、歩き出した。急に腕を引っ張られたのでころびそうになりながら、俺はその男にされるがままついて行った。

すると古い倉庫の前に立ち止まり、通用口らしき扉から中に入った。中には年代モノの車や応接セットが置かれていた。

「ここが俺たち？ブラックバンド？のアジトだ。まあ今夜は俺たちしかいねえから、ゆっくりしていつてくれや」

その男は俺にソファアに座るように促し、冷蔵庫からリングジュースを取り出し、手渡してきた。

「ありがとうございます」と俺が礼を言うと、手を振りながら「いやいや」と答えた。

そしてテーブルを挟んだ反対側のソファーに男二人が並んで座った。

「最近たまあゝにああゆう能力者が現れんのよ。俺はコートから連絡もらって、急いで駆けつけたってわけ」

そして男は一呼吸おいて、俺に向かって言った。

「んでボウズはあんな所でなにしてたんだ？ ああそう言えばまだ名乗ってなかったな。俺の名前は加東ってんだ。加東雪丸。そしてさつき助けてもらったこいつが、南原幸太だ。よろしくな」

南原も、「よろしくね。そしてさつきはどうもありがとう」頭を下げながら加東の続いてそう言った。

「藤田久遠です。こちらこそよろしくお願いします」

「それで話を戻すが、こんな遅い時間に何してたんだ？」

「あ、えっと、ちょっと人を探してまして」

「へえゝ何て名前だ？もしかしたら知ってるかもしれないぞ？」

「いえ、特定の人間じゃなくて、情報屋とかの街の裏側に詳しい人を探してるんです」

「ほうそりゃあ一体何を知りたいんだ？」

俺は一瞬話そうかどうか迷ったが、しゃべらないと話が先へと進まないと思い「とある裏の実験の詳細についてです」と答えた。

「裏の実験ってのは：なんか、んゝ想像できねえな。もうちよつとわかりやすく言ってくんねえか？」

ここまで話しては後には引けなさそうな雰囲気だったので「人が死ぬような類の実験です」と答えた。

加東は俺の顔をジッと見つめると、「はあゝ」と息を吐いた。

「なんか深え事情がありそうだな。でもわかってんのか？そういう裏に詳しい人間に会うってことは、お前自身も裏の人間になる可能性がデカいってことだぞ？」

「はい、問題ありません。さっき言った実験に、もうすでに巻き

込まれているので」俺は笑顔で言うと、加東にもう一度ため息をつかれた。

「まあお前には南原を助けてもらったって恩もあるしな。じゃあちよつと待ってろよ」

そう言うとか東は紙に地図と住所を書いて渡してくれた。

「俺の紹介だって言えば、話は通るようにしとくわ。だから行くな
ら明日の昼以降な」

「ありがとうございます」俺はそう言うとか、アジトを後にして、
家路についた。

19 久遠は情報屋に会いに行く

加東と南原に会った翌日、俺はもはや日課となってしまうた実験の後始末を行っている。

同じ事を三ヶ月以上もやっていると、さすがに蘇生させるのにも慣れてくる。しかし対象が10人以上となると、やはり面倒くさい。

(AEDを『解析』できたらなあ)

AEDとは日本語では自動体外式除細動器と約され、簡単に言えば、心停止した人間に電気ショックを与えて蘇生させるための医療器具である。

学園都市の最新モデルでは、従来は不可能だった不整脈以外での心停止にも対応しているらしい。

つまり心停止後すぐに使えば、かなりの確率で蘇生させることができるのだ。しかも名前の通り、自動で。

しかし残念ながら、俺は構造が複雑な電子機器は解析ができないのだ。電子機器の知識にとぼしいのが原因だと研究所で言われた。

（ちよつとずつでも勉強するか）

少し話はそれるが、俺は未だにだいたい週1回の頻度で研究所に通っている。

特力研を出たあと、五十樹と二人で色んな研究所をたらいまわしにされた。まあどこも得力研と内容は大差無くグロかった。

しかし中学に上がると同時に、二人とも良い意味でヌルい実験内容になった。理由はわからないが。

しかし五十樹は今の実験が始まってしまった。そしてこの実験が最優先らしく、今は他の実験は行っていないようだ。

毎日五十樹の行動はGPSで追跡しているので間違い無い。

現実逃避を終了し、黙々と蘇生作業を続ける。

蘇生作業を終わらせた俺は、肩に小さなカバンを下げ、加東に教えてもらった情報屋のもとへと向かっている。

到着してその建物を見上げる。どうみても高級マンションだ。

情報屋っていうのは、もっとう、路地裏のじめじめとした場所に、合言葉を言い合ってから会話を始めるとか、バーのマスターが実は情報屋だったのだ、みたいな感じだと思っていた。

俺はマンションの玄関に入り、そこにあるタッチパネルに、メモに書かれた部屋番号の706を入力し、？呼び出し？と書かれたボタンを押す。

しばらくすると「誰の紹介だ？」と声が聞こえてきたので、「加東さんです」と答えると、奥の扉が開いた。

エレベーターに乗って706号室の前まで行き、一応チャイムを鳴らした後で、ゆっくりと部屋の扉を開いた。

「おおボウズ、加東から話は聞いてるぞ。とりあえず入れ入れ」

目の前のこの男が情報屋らしい。見た目は20代中ごろから30歳って感じのチャライ兄ちゃんてのが第一印象だ。

「コートはそこらへんにでも置いときな」と言われたので、コートを脱ぎソファーにかけた。

部屋は黒を基調としており、並んでいる家具はどれもこれも高そうだ。しかし心なしか収納が多いような気がする。

「どうだボウズ、この部屋を見た感想は」と聞かれたので、「情

報屋って儲かるんですね」と素直に答えた。

すると「すなおだな」と言い「カハハ」と笑った。

「それと一応訂正しておく、俺は情報屋じゃあネエ。まあしいて言えば何でも屋だな」

「何でも屋、ですか？」

「そうだ。金になるなら大抵のものは扱うぞ。女に車に銃器に薬に、そして情報も、だ」

男は壁に備え付けられている収納スペースの扉を開けた。するとそこには数丁の拳銃が飾られていた。

「本物ですか？」と尋ねると、「ああもちろんだ」と言われた。

男は収納スペースの扉を閉めると、俺の方を見て言った。

「んで加東の話だと、お前は裏の実験について知りたいってことだった、どんな実験なんだ？」

「いま現在学園都市の第一位の一方通行アクセラレータが関わってる実験です」

「へえ〜なるほどな。んで他に何かわかることはねえか？情報が多ければ多いほど、見つけるときに役立つんだよ」

「あとは…、中学生くらいの女の子を何人も殺してるって事くらいしか。あ、女の子は全員見た目は同じなんです」

「見た目が全員同じ…か。クローンかなんかか？」

「わかりません。あ、あとしゃべるときに不自然にミサカって言葉を使います」

「ミサカ…ネエ…。名前かあるいは何かの暗号か？」男は腕を組むと、ぶつぶつとつぶやいている。

「んで他には？」

「いえ、わかるのはそれだけです」

「そうか、わかった。んでこっから本格的なビジネスのお話だ」
そう言うと、男の目つきが鋭くなった。

「見たところ…金持ってるようには見えねえんだが、支払いはどうすんだ？」

「あ、あの料金はどれくらいなんですか？」

「んゝ情報ってのはピンキリだからなあゝ。200は超えねエと思っ
ててくれ。とりあえず調べ始める前に50で、終わったら残りっ
て感じだな」

俺は肩にかけていたカバンを床に下ろすと、ゴトリと音がした。
そして中に手をつっこむ。ソレをつかむと、男に渡した。

「100万円相当の金のインゴッドです。成功したら同じものを
もう一つお渡しします」そう言う男は「オオ本物か？」と手触り
を確認める。

しかし目は確実に笑っている。

「どうですか？」

「オッケーわかった。交渉成立だ」男が握手を求めてきたので、
黙って相手の手を握った。

「んで他に何か欲しいもんあるか？」

「そうですねえ、拳銃を見せてもらっていいですか？」

「もちろんイイぜ？」そう言うと、男はさきほど開けた収納スペースの扉を再び開け、今度はその隣の扉も開けた。

「デカイ奴はここにはネエぞ。マアお前に扱えるとも思えネエが」

俺は「触っても？」と聞くと、男は首をすくめて「ああ。落つことすなよ」と言った。

手に取ってみると、違和感を感じた。想像していたよりも軽いのだ。

「鉄じゃないんですね」

「アア。最近は特殊なプラスチック製の主流だな。軽いし分解したら飛行機にも持ち込めるかもよ？」

男はニヤニヤとしながら言う。「マア弾は金属だがな」とつけく
わえる。

「試射はできないんですか？」そう尋ねると、男はニヤツと笑い、
「こっちへ来な」と部屋の奥へと進んで行く。

俺は銃を片手に男につづく。

頑丈そうな扉を開けると、そこは奥行きが10メートルくらいの
細長い部屋だった。

手前はお店のカウンターのようになっており、奥には人の形をし
た緑色のマネキンのようなものが置いてある。

「俺の自宅自体が防音構造になってるし、さらにこの部屋だけ3重
の防音設備をつけてある。思う存分に撃ちな」

男は自慢のコレクションを見せびらかすように胸を張り、そう言
った。

俺はさっそく手に持っていた拳銃を構えた。すると男は「ちよっ
と待て、まだ弾が入ってねえよ」とクツクツクと笑った。

そして俺から拳銃を取り上げると、カウンター下の引き出しから
弾の入った箱を取り出し、マガジンにつめていく。

再び拳銃を受け取った俺は、一度大きく深呼吸をして銃を構え、引き金を引いてみる。

「パンッ」と乾いた音がして、緑色のマネキンの胸の辺りに当たった。

「どうよ？」男が聞いてくる。俺は「思ってたよりも反動が無いですね」と答えた。

「他のも持ってきてやるよ。ちょっと待ってな」そう言い残して男は扉を出て行った。俺は扉が閉まるのを確認すると、今度は何度か連射した。

マネキンに当たった弾は、貫通することなくめり込むだけだった。マガジンの弾を全て撃ってしまったので、男を待っていた。

5分ほど待っていると男が扉を開け、銀色の台車を押しながら入ってきた。

「お、撃ち終わったか。他のヤツも試してみな」そう言われたので、俺は合計17丁すべてを試射した。

そのあと「サイレンサー消音器サイレンサーって無いんですか？」と尋ねると「あるぞ」と言い、カウンターのサプレッサーと書かれた引き出しを開けた。

「んでどの銃につけるんだ？」と聞かれたので、自分に一番しつくりときた銃を手に持ち見せた。

「^{ジーシー}GCか。ちょっと待ってな」と言い、俺の手から銃を手に取り、器用に長さが10センチくらいの黒い筒を取り付けた。

俺はそれを受け取ると、マネキンに向けて発砲した。「パスツ」と小さな音になり、着弾する。

「この銃とサイレンサーに決めました」そう言うのと「よしわかった」と言い、さらに奥の部屋に入って行き、俺の手にある銃と同じ銃を手に戻ってきた。

「あ、弾はどうする？」と聞いてきたので、「マガジンに入るだけでいいです。とりあえずは」と答えた。

さきほどの射撃部屋から出た俺たちは、部屋の小さなテーブルを挟んで向かい合って座っている。

男が「よし、じゃあ今から手入れの説明をするぞ」と言い、分解手順やこの部品は消耗品だとかを説明してくれた。

銃の説明を受けた後、男は「他になんかあるか？」と聞いてきた。俺は少し考え答えた。

「学園都市製のAEDとその図面、それとその構造を知るための知識が欲しいです」

「AED？あの駅とか病院にあるやつか？ビリビリッてやって蘇生する」

「はい、そうです」

「AEDはまだわかるが、その知識ってのは、また変わった注文だな」

「ムリですか？」

「いや、なんとかするわ。他に無いなら、さっきの銃とAEDの前金で、さっきのインゴッドをもう一本だな」

そう言われたので、カバンに手をつつこんでインゴッドを取り出し、男に手渡した。「まいど」と男はインゴッドを受け取り、代わりに小さなメモ用紙を渡してきた。

「ここに住所を書きな。1週間から1ヶ月くらいで届けてやる」と言われたので、紙に住所を書き、男に返した。

「あつ、そう言えば、何て呼べばいいですか？」

「ああ、アッシュって名乗ってる。灰色って意味のアッシュだ」

「そうですか。ではアッシュさん、これで失礼します」

「オオまたな。お前は金回りはよさそうだから、いつでも来いよ」
そう言われたので、俺は軽く会釈をして、部屋を出て行った。

そしてすっかり日が落ちた街を、俺は家路についた。

ちなみに久遠がアッシュの前で金を『作成』しなかったのは、余計にふっかけられるのを避けたためである。

そして夜の街を情報屋を探して徘徊していた時は、カバンには着替えようのトレーナー（何か問題が起きて服が汚れるかもしれないと考えて）しか入れていなかった。

アッシュの家に行く時のみインゴッドをカバンの中に『作成』した。

さらに言うと、カバンの中に手を入れたときにインゴッドを『作成』すれば良いとも思われるかもしれないが、？カバンは軽そうな

のに、そこからインゴッドが出てきた？という違和感をいだかせな
いためである。

19 久遠は情報屋に会いに行く（後書き）

銃はグログを元に学園都市が作ったという設定で、グログのGと学園都市（college town）のCでGCと名づけました。university townのGUにしようかとも思いましたが、安売りの服屋みたいだと思い、やめておきました。

さらにどうでもいい設定ですが、情報屋のアッシュは本名を灰島？久遠は計画を立て、実行する？で登場したガンショップ灰島の店員の息子だったりします。親子そろってガンマニアになり、そして息子は本物の銃に手を出し、父親に勘当されたって設定があったりします。本当にどうでもいいですが。

20 久遠は見知らぬ男に捕まる

アッシュと会ってから三週間が過ぎた。街もテレビも年末ムード一色である。

俺はヒマさえあれば、拳銃を『作成』しては消す、を繰り返していた。

部屋でソファーに座っていると、家のチャイムがなった。モニターについているボタンを押し、「はい」と答えると「お届けものです」と声がした。

「ちょっと待っててくださいね」といい、エレベーターで玄関に向かった。

マンションの玄関まで下りてくると、青いキャップと青いつなぎを着た男が、キャップをとって頭をさげてきた。

男は「ここに受け取りのサインをお願いします」と言い、紙を渡してきた。

しかしその紙には、

送り主 灰色太郎
受取サイン

としか書かれていなかった。

普段目にする伝票とは全く違っていた。複写できるように、二枚重ねではあったが。

俺はサインをしてそれを男に渡すと、「ありがと〜ございました」とダンボールを一つ残して帰って行った。

荷物は手に抱えられる程度の大きさだった。

俺はソレを部屋へと持ち帰り、ダンボールを開ける。

中には分厚いノートパソコンのような機械とその設計図が数枚、それに3冊の本と手紙が入っていた。

俺は手紙を手に取り、読み始めた。

？AEDに関しては、入れておいた3冊の本を読んでくれ。わからない単語はネットで調べれば出てくるらしい。んで実験に関してなんだが、俺には調べられなかった。相当機密性の高い実験らしい。気をつけろよ。？

その手紙を読むと深くため息を吐いた。

てか実験の情報料に払ったインゴッドはどうなった？AEDの残りの代金と相殺されたのか？

まあいいか。

「それにしても使えねえな、クソが」そうつぶやいて、俺は届いたばかりの本を読み始めた。

二ヶ月後。年を越して、やっと3冊の本を全て理解することができた。

2月が終わろうとしていたその日、AEDを『解析』『作成』することに成功した。

実験の後始末の時には、まず体の損傷を治し、治し終わった固体に順番に『作成』したAEDをセットしていく。

操作案内が音声で流れるので、輪唱のようであつとおしかった。しかし今までとは比べようも無いくらいに楽に、そして短い時間で終わられるようになった。

小さな進歩だが、純粹に嬉しかった。

6月に入ったある日のこと、俺は夜の街を徘徊していた。

第18学区には、たいして使えないアッシュしか目ぼしい情報屋はいなかったので、他の学区にまで足を伸ばしている。

そして今いるのは第8学区だ。適当に街を歩き、そろそろ路地裏に入ろうかなと考えていると、後ろから声をかけられた。

「こんな時間にどこに行くんだい？」

俺はとっさに逃げようとしたが、左腕を掴まれた。

恐るおそる振り返ると、スーツを着た人のよさそうな30歳くらいの男だった。

「安心していいよ、僕は警備員だから」
アンチスキル

そう言うとその男は胸のポケットから身分証を取り出して俺に見せ、俺の左腕を掴んでいた手を離れた。

そして俺と目線を合わせるように少し屈んで言い聞かせるように話を始めた。

「ここら辺は教職員が多く住む地域だから他の学区よりかは安全だけど、でもやっぱり夜遅くに散歩するのはよくないよ」

ガキ扱いされるのは腹が立つが、本当にガキなんだからしょうがない。そして子供の脚で大人の男から逃げ切るのはほぼ不可能だろう。

そんな事を考えていると、男は話を続ける。

「どこに行くつもりだったんだい？ 目的の場所まで送ってあげるよ」

そう言われて、俺はとっさに嘘をついた。

「え、えっと第7学区の中央病院です」とカエル先生のいる病院の名前をだした。先生なら話を合わせてくれる…かも。

男はさらに「こんな時間からお見舞いかい？」と聞いてきたので「森野ってお医者さんから呼ばれたんです。えっと俺、傷を治す能力を持ってるんで」と言った。

「そうなのか。確認したいんだけど、電話番号はわかるかい？」

俺はPDAを操作して、先生の番号を出し、通話ボタンを押して男に渡した。それを受け取った男は、二言三言会話をし、「君に代わってくれておっしゃってるよ」と手渡してきた。

俺が「もしもし？」と言うと、「どういう事が説明してもらおうよ？」と、とても低い声で言われた。

その男の車で病院まで連れて行かれ、先生に「夜遊びしてて、そ

れでとっさに」というと、低い声で淡々と説教された。

早く大人になりたいよ。

20 久遠は見知らぬ男に捕まる（後書き）

アッシュの荷物を届けたのは、いわゆる運び屋というやつです。

21 久遠はストーキングをする2

SIDE 久遠

カエル先生に大目玉をくらった次の日のこと。実験の後始末をしたあと、俺は第7学区に来ていた。

先生に受けた恩を返すためだ。からの強制出頭命令が出たから

そして病院に着き、先生から「信賞必罰って知ってるね？」と言われ、「子供を叱るのは大人の役目さね」と、強制労働をさせられた。

先生、俺は今までこの病院で結構働きましたが、？信賞？を受けた覚えがないのですが…。

病院から出ると、外はすっかり暗くなっていた。深夜徘徊の罰にまた深夜徘徊をさせるってのはどうなんですか、先生え…。

まあまだ深夜って時間ではないけども。俺は五十樹に、遅くなるので晩御飯は適当に済ませてもらおうとメールを送った。

そして俺は肩にかけたカバンを背負いなおし、歩き出した。

その時、路地裏の方から、爆発音が聞こえた。

SIDE とある能力者

俺はレベル3の風力使いだ。エアロシユーターただの学生じゃあねえ。バイトで裏の仕事をやってたんだ。

裏の人材派遣会社に登録してな。まあ趣味と実益を兼ねてやってっただ。

裏の仕事は金がいいんだ。んで受ける仕事は、基本的に荒事全般ってとこだ。

今日の仕事は、金持ちオヤジの護衛だ。

正直護るってのは好きじゃねえ。

俺たち護衛は依頼主の家で警戒をしていた。

すると突然爆発が起きて、煙であのオヤジを見失っちゃった。

俺はとりあえず自分の周りに風を発生させ、煙をちらした。

そしたら依頼主は俺以外の護衛のヤツと別の部屋へと逃げて行くところだった。

男を追っかけんのなんぞ面倒だなあと頭を掻きながら周りを見回すと、金髪の女のガキがいた。

あんな護衛いたか？と考えながら近づこうとすると、そいつと目が合った。

そしたらいきなり逃げ出しやがった。

そう、男なんぞ追っかけるのはまっぴらだ。

追いかけるなら、ああいうメスガキがイイ。

俺はあのメスガキを追ひ、屋敷を出た。

たまに爆発物を投げつけてくるが、俺は全て能力で吹き飛ばす。
エアロシューター

俺は余裕を持って追いかける。

ああ話を戻そう。趣味と実益についてだ。

裏の仕事では、結構簡単に人は死ぬ。そして裏の人間なら、殺したとしてもなんとかなる。

死んだとしても死体さえ処理しまえば、捜す人間なんてほとんどいねえからだ。死体処理専門の業者もあるしな。

だから相手を殴っても蹴っても踏みつけても服を剥ぎ取っても切り刻んでも犯しても犯しても犯しても殺してから犯しても、問題ねえんだ。

ああやべえな。興奮が止まらねえ。誰かを護る仕事なんぞよりも、やっぱり狩るほうが俺向きだなああ。

いつの間にか細い路地に入っていた。もう息が上がってんじやねえか。

そろそろ終わりが近づいてきたな。メスガキが角を右に曲がって行っただけ俺もゆっくりと後を追う。

角を曲がるとメスガキはもう走れないのか、よたよたと歩いていった。

俺は立ち止まり、威力を加減した風をぶつけた。いきなり終わらせちゃったかもしれないねえからな。

メスガキは地面に転び、引きつった表情でこっちを見てきた。

さあ追いかけてここはお終いだ。

俺はゆつくと近づく。左腕を上に向けて風をつくろうとすると、いきなり体に衝撃がはしった。

路地の右側の壁に体をぶつけたみたいだ。右手で頭を触ると、血

がべつとりとついていた。

どうやら左の壁を爆破したみたいだ。

左腕は結構ひどい怪我かもしれない。

右手の手の平の上に、小さな風を起こしてみる。

能力は問題なく使える。ああ楽しくなってきた。

メスガキの顔が真っ青になってやがる。

もらしてんじゃねえだろうな？

まあそれはそれで楽しめるが。

S I D E 追われていた少女

ここまで逃げに逃げて来たけど、もう限界に近い。

足が動かない。

だから最後のカケに出るって訳よ。

計画通り屋敷内を爆破し、逃げようとするときに男と目があった。

そしてその男は私が逃げながらしかけたトラップを全て防ぎきった。

だから最後に罠にかけてやる訳よ。

私は路地を曲がると左の壁に指向性の爆弾をセットして、最後の力をふりしぼって前へと歩いた。

すると後ろから攻撃され、転んでしまった。好都合だ。

後ろを振り返り、爆弾の射程に入るのをじっと待つ。

結局、頭がいいほうが勝つって訳よ。

男が左腕を動かしたので、その瞬間爆破スイッチを作動させた。

自信満々の能力者を嵌めたこの瞬間が、最っ高ーに快感な訳よ！

私は男の死体を確認するために煙が晴れるのを待った。そしてその男を見た瞬間、血の気が引いていくのを感じた。

左腕はボロボロだけど、能力もまだ使えるみたい。

ポケットに手を入れて確認すると、小型ロケットが3つと時限式の爆弾が1つだけあった。これで決めるしか。

「今ので終いか？」男が醜悪な顔をさらに歪めながらこちらに歩いてくる。

「それじゃあ今か…がぶう？」

男の右胸あたりが真っ赤になって、こちら側に向かって倒れた。

その男の向こう側に、私と同じ年くらいの男の子が、銃を手に構えていた。

そして銃を下ろすと、倒れたままの男に近づき、何かを、いや治療をしているみたいだった。

撃った後に治療するってどういう訳よ？

その時ポケットの中のPDAが振動した。取り出して画面を見ると麦野からだった。

通話ボタンを押し「もしもし」と言った。

？あんだ今どこにいのよ？？

いきなり怒鳴られた。

「えっと変な能力者に追われて、近くの路地裏に」

？ふん、もうそいつは片付けたわよね？？

「ええっと、いま目の前で、ノビて…ます」

？じゃあとつとと集合場所に来なさい。こっちはターゲットを始末して、あんた待ちなんだけど？

「それがそのうちよつとした問題が発生したというか」

？アア？はつきりしねえな。とつととしやべれ！？

「あのですね、その、男を片付けたは片付けたんだけど、それを他の能力者に見られてしましまして」

？んだよ、んなのそいつも片付けられただけじゃねえか？

「それが…こっちはガス欠で、しかも向こうは銃を持っまして」

？……ほんんんとうに使えねえなあ。しょうがねえからそいつも

連れてきな!?

麦野に一方的にキレられて、電話も切られた。

なんだか超みじめな気分な訳よ。

S I D E 久遠

爆発のあった方に走っていくと、女の子を男が追っかけているのを見つけた。

気づかれないように後をつけることにする。

女の子の投げる爆弾を、男がことごとく防いでいる。戦い慣れているんだろう。

街中でやることじゃないと思うけど…。そして前方で爆発音がしたので、俺も続いて角を曲がると、血まみれの男が立っていた。

俺は右手に銃を『作成』してゆっくり近づくと、そいつの右胸に一発撃ちこんだ。

やっぱり場慣れしている能力者相手でも、不意打ちをすれば十分に倒せることがわかってとても満足した。

俺は一応その男の傷を治しておいた。裏の人っぽいから、その組織に狙われたりしたら困る。

女の子を見ると、誰かと電話してるみたいだった。

そしてそれが終わると、倒れた男の背中に黒くて大きなサイコロみたいなのを置いて、俺に「ついてきて」と言い、歩いて行ってしまった。

俺は一瞬考えたが、ついていくことにした。

カバンに銃を入れ、女の子の後に続いて2、3歩歩いたとき、後ろでドガアーンと大きな音がしたので反射的に振り返った。

すると地面と壁に真っ赤な血が飛び散っていた。せつかく治したのに…。

S I D E 五十樹

最近あいつとほとんど会話らしい会話をしてねエ。今の実験が始まってから、急に今までどんな話してたンかもわからなくなっちゃった。

俺のそんな変化にあいつも気づいてるだろうが、何も聞いてこねエ。正直なソて答えりゃいいのかわからねエから助かつちやいるソだが。

あいつが実験の事を知れば、なんか無茶しかねねエしな。

実験が始まってからも、あいつは以前と変わらなく見える。時折なソか考え込ソでるような素振りも見せるが、よくわかんねエ。

俺は感情に関してはニガテなソだよ、クソツタレ。

ソで最近は何ソでか実験対象のあの女に話しかけるようになった。自分のことなソだが、なソでそんなことを始めたのかもよくわかんねエ。

あいつとの会話の代わりか？ いやソなソじゃねエな。まア会話つっても、相手をビビらせるような言葉ばかりだがなア。

それにあの女はほとんどまともな言葉を返してこねエし。ほんとにわっかんねエことばかりだ。

学園都市の第一位が聞いてあきれンぜ。

ソなことを考えてると、PDAにアイツからメールが届いた。

？今日はちよつと用事があるから、晩御飯は適当に済ませてね？？
？？

あいつの能天気さには救われるな。多少疲れる時もあるが。

久々にファミレスにでも行くか。

22 久遠は拉致られる

俺は女の子の後をついていく。途中で「どこに向かっているの？」と聞くと「黙ってついてきて」とだけ言われた。

一応結果的にだけど、命を助けてあげた事になるのに、ヒドい扱いだ。

泣いてもいいんじゃないかと思う。泣かないけど。

女の子は通りに出ると、タクシーをつかまえ乗り込む。

俺も続いて乗る。運転手に「第3学区の個室サロンまで」と短く言うと、女の子は後は無言になった。

タクシーの中で考える。

女の子が路地裏とはいえ、爆発物をたくさん使ったり、躊躇することなく人間を爆死させたことを考えると、ほぼ間違いなく裏の人間だ。

こんな一般人がいてたまるか。

だから、もしかしたら五十樹の実験を知る手がかりを掴めるかも知れない、それが俺が彼女についていってる理由だ。

タクシーが止まり、彼女がお金を払い車から降りた。俺も続いて降りると、すごい豪華な建物が目の前にそびえ立っていた。

俺はほおくと呆氣にとられて見上げていると、彼女はすでに中に入り、受付の店員と何かを話していた。

俺も急いで建物に入った。

エレベーターで5階まで上がると、彼女は迷う様子もなく通路を歩いて行く。

彼女が502と書かれた部屋へ入ったので、俺もその部屋に入る。

すると彼女が一人の女の人に、両手でほったをつねりあげられていた。

「あんたねえ、どこまで足をひっぱれば気が済むわけ？」

「ほへんゴメン、ほへんはいふひほゴメン麦野」

「全く。滝壺、あんたも何か言ってやりな」

「大丈夫だよ、ふれんだ。私は建物の外から爆破すればいいのにわざわざ中に爆破の確認に入っていていつて敵に見つかって追っかけられ

てあげくの果てに他の人間に現場を見られたかなりうかつなふれんだを応援してる」

「結局、最後まで聞いたけど、全然応援してもらってる気がしないよ」

フレンダと呼ばれた子はほったをさすりながら、そう返した。

「んであんたが現場にいた人間ってわけね？」

キツそうな女の人が、俺を見てそう言った。

「あ、はい。藤田久遠といいます」そう答えると、その女の人が続けて言う。

「ぶっちゃけさあ、あんたはいま死ぬか生きるかの境界線上に立ってるわけ。死にたくなければ、あたしが喜ぶような事を話さない」

この女アタマおかしいんじゃないか？更年期じゃ「アア？お前いま失礼なこと考えただろ？」俺はあわてて首を横にふる。

やべえこの女、精神感應系の能力者か？

「えっと俺の能力は？原子操作？で、それで単純な構造のものなら

コピーできます」

「へえ、珍しい能力だな。いっちょ金出^{カネ}してみろよ金^{カネ}」

なんか本格的にカットアゲっぽくなってきた。いやや●ザの取立てか？人を助けたら組事務所に連れていかれたでゴザルの巻。

あはははうふふ。ダメだ。気をしっかりと持たないと。

「いえ、あのお金は通し番号があるので「チッ使えネエなあ」…」

泣いていいですか？

「そ、その代わりに」

俺は金のインゴッドを『作成』し、女に手渡す。みんなが目を丸くしてそれを見ている。

あれ？指輪のほうがよかったか？

「へえ便利そうな能力じゃない」

女はマジマジとインゴッドを見てそう言った。

よっしゃ、首の皮一枚でつながった！

続けざまに、俺はその場で土下座をする。

「不躰なのは十分に理解しているのですが、どうかお力をお借りできないでしょうか」

「な、なんだよ突然、アタマを上げな」

俺は言われた通りに頭を上げた。

「それで殺して欲しい相手でもいるのかい？」

「いえ違います。第一位の^{アクセラレータ}一方通行が受けている実験の詳細が知りたいんです」

「へえあんたがなんでそんな事を知りたがるのさ」

「俺の…たった一人の友達なんです」

女は自分の頭をガリガリと搔くと「まああんたには面白い能力も見せてもらったわけだし、時間があるときにでも調べといてやるよ」と言った。

俺は心の中でガッツポーズを作った。第一位の友達ってのが効いたのかな？

「じゃあ、あんたのアドレス教えな。わかったら連絡してやるから」

俺は「はい」とだけ答え、その女のPDAにアドレスを送る。そして「あの、あなたのお名前は…」と言うと、「麦野沈利」とだけ答えた。

すると麦野は俺に向かって手で出て行けと言わんばかりに手をふる。

俺は軽く会釈すると部屋の外へと出て、急いで建物の中からも出た。死ぬかと思った。

でもむぎのしずりって、どっかで聞いたことがある気がするんだけどなあ…。

部屋の中ではフレンダが「第一位の友達だって。殺さなくてよかったね麦野」と言うと「アア？」と不機嫌そうに麦野がフレンダを威嚇した。

そして「お前が全ての元凶じゃねえか」とまたフレンダのほつぺたを両手でつねり始めた。

22 久遠は拉致られる（後書き）

絹旗ファンの方、ごめんなさい。さすがにちょっとこの時点での絹旗の登場は早すぎるんではと思ひまして……。しばらくしたら、メイン扱いで出すと思います。それまでしばしお待ちを。

23 久遠はカフェに行く

麦野沈利

ヤ●ザに絡まれて2週間が経ったある日、そのヤ●ザさんからメールが届いた。

ちなみにあのあと家に帰る途中で、ヤ●ザさんがレベル5の第四位だと思いだした。

なるほどあの半端無い理不尽さは、レベル5だからかと納得した。

届いたメールを読むと、? 今日この場所に16時に来い? と簡潔に書かれた文章と、第3学区の地図が添付されていた。

おそらく実験に関して何かわかったんだろう。

呼び出しておいて殺されるとかないよな?

ん〜ない、よね?

とりあえずネットで、送られてきた地図がどんな場所かを確認しよう。

閉鎖された工場の跡地とかだったら…、でもどんな場所であつても結局は行かざるを得ないんだけどね。

あの人相手に約束を反故にするとか…考えただけで寒気がする。

実験の後処理も問題なく終わり、俺は指定された待ち合わせ場所に、約束の10分前に到着した。

そこはオシャレなカフェで、ヤ●ザさんはオープンテラスですでお茶を飲んでいた。

「すみません、お待たせしたみたいで」

「ほんとに。私を待たせるとはイイ度胸ね」

本日一発目の理不尽入りました。まだ約束の10分前なのに…。

「今度からはもっと早く来ます」と頭をさげた。ヤ●ザさんはニヤニヤしながら、「いい心がけだね」と言った。

くそ、お前なんぞ嫁ぎ遅れてしまえ。そう願うと、ヤ●ザさん、もとい麦野さまが無表情のまま目を細めてこちらを見てきた。

俺は店員を呼んで、アイスコーヒーを注文した。コーヒーはすぐに運ばれて来た。麦野さまの視線がイタい。

「調べるのに結構苦労したよ」そう言うと、麦野は横の椅子に置いていたカバンから、紙の束を出して、自分の右腕の横に置いた。

「では見ても「苦勞したんだよ！」…はい。ありがとうございました」

「だからね、前に言っただけ払いの料金他にも臨時料金をもらいたいんだよ」

本物の性悪だあゝ！ここまで来たら断れるわけじゃないじゃないか。

「ではあとおいくらほどお支払いすれば…」俺はそう言うと、麦野はニヤニヤと笑いながら言った。

「お金は別にいいわ。その代わり、ここで土下座して頼んで」

ここですか？俺は周りを見回す。今いるカフェは大通り沿いにあつて、俺はその店舗と道の間の席に座ってる。

つまり周りは人だらけ。

「どしたの？できないの？得意でしょ？ド・ゲ・ザ！」

ぐぬぬぬ。顔はいいのにここまで黒いか。完全な女王様だな。こ

の女と実験対象の無表情女と一緒に無人島に流れ着いたら、確実に俺は五十樹（妄想）を選ぶね。

しばらく黙っていたが、？冗談よ？と言ってくれる気配は微塵もない。それどころか心底楽しそうにニヤニヤとしている。

このドS女め。そっちがその気ならこっちにも考えがあるぞ。

俺は席から立って、地面に手について頭を地面にこすりつけながら大声で叫んだ。

「お願いします学・園・都・市・第・四・位・の・麦・野・沈・利・さ・ま・。哀れなわたくしめに、どうかお情けをくださいませえ〜！」

S I D E 麦野

お遊び程度の気持ちで土下座をさせたら、いきなり私の名前を叫び出しやがった。なんだこいつアタマわいてんのか？

周りの人間がこちらを見て、ヒソヒソと会話をしている。

通りの通行人たちも何人か立ち止まって見ている。

これはマズい。私もレベル5としての世間体ってもんがある。

街中で？雄奴隷に土下座をさせた女？なんて噂をたてられたら確実に、能力が暴走する自信がある。

「ちょ、ちょっとやめ、やめてよ」と小声で言うが、全くやめようとしなない。

それどころかもう一度繰り返そうとしている。

「おねが「やめろつつてんだろうがあ！」」

つつい大声を出してしまった。周りからの視線が痛い。私はこいつを力づくで無理やり立たせると、「もういいから座りな」と力なく言った。

するとこの男は「地面にですか？」とか言いやがった。

「椅子にに決まってんだだろうが！」

また大声を出してしまった。とりあえずこいつも椅子に座りなおした。

私も椅子に座るが、周りの人間がこちらを見ていたので、周囲の人間を目で威嚇した。

とりあえず紅茶を一口飲むと「ほらこれが資料」と言って渡してやる。するとこいつはすぐに読み始めた。

「まったく、デキの悪いロープレね、これは。スライムをプチプチプチ潰してレベル上げなんて。それも2万匹も」

そう言って目の前の男を見ると、見る見るうちに顔から血の気が引いていく。

そして無言のままカバンから金のインゴッドを出してテーブルに置き、そのまま帰って行った。

「コーヒー代は ^{コレ}インゴッド じゃ払えないわよ」

小声でそう言うと、アイスコーヒーの氷が、カランと音を立てた。

一連の騒動の現場近くの物陰に、怪しげな二人組がいた。

「こんな公衆の面前で土下座させるなんて、麦野はやっぱり麦野だね。あ、でもちょっと顔が赤くなってる。結局麦野はけっこう人

の目を気にするタイプな訳よ」

双眼鏡を覗き込みながら一人がそう言うのと

「滝壺もそう思わない？」

と尋ねた。

すると話し相手は

「南南西から電波がきてる」

とつぶやいた。

24 久遠は研究所に忍び込む

麦野から実験に関する資料をもらった翌日、俺はもう一度資料を読み返す。

要約すると、学園都市第三位の御坂美琴のクローンを2万体制殺すと、学園都市最強の五十樹はレベル6になる、ということだ。

実験を破綻させるためにはどうすればいいのだろうか。誰かが最強であるはずの五十樹を倒すのはどうだろうか。

たとえばレベル3の俺が、五十樹の食事に毒を盛って倒すとか…。

いや、能力を使って勝たないと意味が無いか。

他に五十樹を倒せる能力者を探すか？非現実的すぎる。

んー、何も思いつかない。俺は非常に常識人なのだ。

天才的な論理的飛躍による問題解決手段、いわゆるブレイクスルーなんて思いつくはずがない。

とりあえずできることをやろう。俺は麦野に電話をかけた。

「藤田です。昨日はありがとうございました。いま電話大丈夫ですか？」

？ああ。んでなんの用？？

「昨日の資料には、今後の実験内容は載ってたんですけど、具体的な日時と場所が載っていないんです。できたらそれを調べてもらえませんか？」

？めんどくさいわね、それを調べた情報屋を教えてあげるから、私抜きで取引しなさいよ？

「いえ、それだと麦野さんにお礼を支払う事ができないので」

？…わかったよ。あんたの思惑に乗ってあげるわ、感謝しなさい？

「はい、ありがとうございます。できれば一ヶ月先くらいまでの予定がわかればありがたいです」

？用件はそれだけ？それだけならもう切るわよ？

「はい、よろしくお願いします」

俺は通話を切った。バレバレか、まあ当然か。腐っても第四位だし。性格は腐ってても、頭は回るのだろう。

俺が期待したのは2つ。まず1つは、強大な相手が敵に回った時に、学園都市の第四位を味方につけること。

？敵に回ったのは俺だけじゃないよ、第四位もだよ？？

と相手に思わせて、敵の戦力を分散させること。

可能ならば麦野を俺の盾にしたい。

もう1つは、お願いをして引き受けるという関係を、当たり前のことと麦野に思わせる事で、今後俺からのお願いを聞いてもらえる可能性を上げることだ。

反復行動は、その行動を習慣にすることができる。

まあバレバレのようだから、いざとなったら簡単に切られそうだが。

そこは麦野のレベル5としてのプライドに賭けるしかないだろう。

？強大な敵だけど、レベル5の私が引くわけないだろう？

と思うてくれるとありがたいのだけれど。

まあ依頼を引き受けてくれたのだから、現時点ではそう思っているのかもしれない。

しかし元々非力なレベル3の俺は、できることならなんでもやっておくべきだろう。

可能性が1パーセントでも上がる見込みがあるのなら。

それから一ヶ月ほどして、実験に2つの変化が現れた。

1つは夜にも実験が行われるようになったこと。まあこれは特に問題はない。俺がやることは今までと変わらないからだ。

そしてもう1つの変化に頭を悩ませた。

ある日、いつものように五十樹をつけて実験場に向かっていると、五十樹はとある研究所に入って行ったのだ。

今までは人気の無いところで実験が行われていたので、自由に実験場に入り込むことができた。

しかし研究所となると、進入した瞬間に拘束されるかもしれない。能力者を研究する場所なのだ。

能力を無効にする手段もセキュリティーとして存在するだろう。

俺は研究所の前で頭を悩ませたが、能力者対策が施されているであらう施設に侵入する技術なんて持っているわけがないので、正面から堂々と入ることにした。

（まるでカエル先生の病院に、始めて行った時みたいだな）

あの時のことを考えると、不思議と笑みがこぼれる。迷っているかもしれない。さあ行こう。

10分後、円筒形の警備ロボットに囲まれ、身動きとれなくなっています。

俺の使える9ミリ拳銃ではほとんど歯が立ちませんでした。

すると白衣を着て、金髪をオールバックにした男がこちらに近づいて来た。

「やあ藤田久遠くんだね？今日はどんなご用かな？」

「俺の名前を知ってるってことは、俺の目的もご存知でしょ？」

「まあネ。？責任者？から聞いてるよ。もしも訪ねてくることがあったら、丁重におもてなしするようにと、ネ」

「ならこのでっかい茶筒みたいなのを下がらせてもらえませんか？」

「ああ、今そうするヨ」

その男は部下らしき男に命じて、警備ロボットを下がらせた。

「じゃあこっちに来てくれ。一緒に実験の様子でも見ようじゃないカ」

男が歩き出したので、俺も後につづく。

計器がたくさん置かれている部屋に入ると、そこに実験中の五十樹がモニターに映されていた。

モニターには血まみれの部屋と、それとは対照的に全く返り血を浴びていない五十樹が映されていた。

「俺はなぜこんなにすんなりここまで入ってこれたんですか？」

「ん？そんなに不思議かネ？まあ今までの行動から、実験に直接手を出して妨害しようとしているわけではないようだしネ。

もっと単純に言えば、君の治療によって、クローンにかかるお金が節約できるからだよ」

そんな単純な理由かよ。まあ言われてみればそうか。実験が終わっても、シスターズ妹達にはイロイロな使い道があるのかもしれない。外見はいいし、一応能力者だし。

俺は可能な限り明るい声で答えた。

「ああなるほど。腑に落ちました。研究所に入るときに緊張して損しましたよ」

笑顔でそう言うと、周りの研究者たちも声を上げて笑った。

コイツラ　ゼンイン　ブチコロシテエ。

「あ、終わったみたいですね。できるだけ早く五十樹を外に出してくださいね。俺が五十樹に見つかると、実験が破綻しかねないですから」

「ああ心得てるヨ」

10分後、俺は蘇生を開始した。

もっともっと力が必要だ。

25 久遠は少女を慰める（前書き）

今回原作キャラが登場しますが、性格も設定も何から何まで捏造しています。

25 久遠は少女を慰める

研究所に乗り込んだ日から約一年が過ぎた。年齢的には俺は中学3年になった。もちろん学校には行っていないが。

俺はこの一年は、研究者達と仲良くなってツリーダイアグラム樹形図の設計者を使わせてもらえないかなど、イロイロと実験を破綻させる方法を試行錯誤した。

結局すべて徒労に終わったが。

そして以前は静かな自分の部屋でばかり思索にふけていたので、逆ににぎやかな場所なら良いアイデアが生まれるのではなかろうかと思い、最近は色んな所をぶらついている。

自分でも浅はかだとは思うが、それほど打つ手に困っているのだ。

そして今は第6学区に来ている。

ここはアミューズメント施設が多く集まる場所で、騒がしいほうが良いとは思っていたが、それにも限度がある、と来たことを少し後悔し始めていた。

その時大きな声で呼び止められた。

「あ、あなたは超ドゲザ男じゃないですか」

ち、超ドゲザ？あの麦野とのカフェでの一件か？それにしてもこんなちびっ子まで知っているとは。

まあ後悔はしていないけど。

俺は頭を撫でる振りをして、この子生意気なガキの髪型をぐちゃぐちゃにしてやろうと頭に右手を伸ばした。

すると腕を左手で掴まれて遮られた。

「何するんですか。変なことしたら麦野に超言いつけますよ？」

そう言う俺の掴まれた右腕が、ビギッと鈍い音を立てた。

「いでででで！痛いって離せ離してくれ！」

やっと開放された右腕を撫でながら、そいつを見た。こんなチビっ子のくせに何て力してんだ。

「んでお前は麦野さんの知り合いってことでいいのか？」

「そうですよドゲザ男さん。麦野とは超知り合いです」

「藤田って呼んでくれないか？チビっ子」

「あなたは超藤田な人ですね、私には絹旗最愛って超可愛い名前があるんですよ」

「藤田って固有名詞を、勝手に悪口みたいな扱いするのは止めろ！」

「ところで藤田はこんなところで何してるんですか？一人ぼっちで友達いないんですか？超哀れですね」

人の話聞いてねえのかよ。

「人のこと言えねえだろ、一人なのはお前も一緒だ！それともお前にしか見えない友達が隣にでもいるのか？」

そう言うと、ため息を吐かれた。やれやれというジェスチャーをしながら、

「細かい事を気にする男は超もてませんよ？まあすでに手遅れって感じが超しますけど」

とか言いやがった。

ぐぬぬぬぬ、麦野の周りにはこんなやつばかりだよ。「そりやどうも」と言って、絹旗に背を向けて歩き出そうとした。

すると上着の腰のあたりを掴まれた。

「もしヒマなら、今から一緒に映画を観てあげてもいいですよ」

「謹んでお断り申し上げます。じゃあな麦野さんによ」「そんなに遠慮せずに」

そしてまた左手首を強く掴まれて、痛がる俺の声は完全に黙殺され映画館に連行された。

麦野さんの周りでは、他人を拉致するのが流行っているのだろうか。

3時間後、やっと映画館から出てこられた。

「てかなんだよ今の映画は！地球に降ってくる巨大隕石をなんとかするために男たちが宇宙船に乗って隕石に着陸するも失敗して男たちは全員死亡。最後に怪獣が現れて口からの破壊光線で隕石を破壊してめでたしめでたしって、なんじゃそら！そして3時間で長すぎるわ！」

「藤田のくせに超うるさいですね。そして今の映画のよさがわからないとか、やっぱり藤田は超藤田ですね。」

こいつとは金輪際映画には行かねえ。

「あら姉さん、こんなところで奇遇ね」

突然見知らぬ少女が絹旗に声をかけてきた。

「海鳥？あなたこそ何してるのよ？」

「いやだな、偶然に決まってるじゃない」

絹旗の妹らしき少女を見る。個性の固まりだ。パンクっぽい服に、先端だけ脱色した髪、そしてイルカのビニール人形。不自然すぎる。

それにしても姉と妹にしては：体型的には逆だなと思いながら二人を見比べる。

「藤田は超何か言いたそうですね」

「いや、姉妹にしては、体型は逆「言わなくていいです。超キモい藤田、超藤田！」」

怒られた。それを見ていた海鳥と呼ばれていた少女は、「この人は姉さんの恋人？」と言ってきた。

これは訴えたら勝てるレベルだと思う。だから簡潔に答えた。

「まさか、ありえない」

ベゴッ

「痛ってえゝバカじゃないのお前、ばかじゃないの？」

「バカって言うほうが、超藤田です！」

「はあ。もうつつこむ気力も無いよ。後は姉妹水入らずで楽しんでくれ」

そういい残し、俺はその場を離れた。

S I D E 絹旗

黑夜海鳥とは幼馴染だ。まあ二人とも置き去りとして捨てられて無理やり能力実験の実験体にされたのだけど。
チャイルドエラー

小さい頃から私の後を「お姉ちゃん待って」とよくついて来ていた。それがある日突然、研究所の研究員を皆殺しにして姿を消した。でもそのおかげで実験から抜け出すことができたのだけでも。

「それで何のよう？偶然ていうのは超不自然なんですけど」

「姉さんはせっかちね。せっかく二人っきりになったんだから、あつちでゆっくりと話をしましょ」

海鳥は目を細めながらニヤリと笑い、細い路地のほうを指差す。
なるほど。超理解できました。

研究所での成績はわたしのほうがよかった。けどわざわざ目の前に出てきたということは、何かがあるのかも知れない。

私たちは路地裏の方へ歩いて行く。

しばらく歩くと、広い空き地に行き当たった。海鳥はゆっくりとこちらを振り向いた。

「ここなら問題ないでしょう。始めましょ姉さん」

その言葉が合図であったかのように、メリメリメリとイルカの人形から、大量の肌色をしたミミズのようなモノ、いや、先端に小さな手がついたモノが這い出てきた。

「私の窒素爆槍は手からしか撃てないでしょ？だから手を増やしたの。私のために作られた特注品なのよ、まだ試作品らしいけど」

その細いミミズのようなたくさんの腕が、海鳥の右腕にまとわりついていった。海鳥は嬉しそうに笑うと、窒素の槍の雨を降らせてきた。

私は両腕を前に突き出して、ソレを防ごうとする。けどその衝撃で、後ろに吹き飛んでしまった。

「超悪趣味なおもちゃですね、藤田並みに超キモいです」

私は走って近づき、海鳥の目の前で飛び上がり、オフエンスアーマー窒素装甲で殴りかかった。

しかし海鳥は、地面に窒素爆槍を放ち、その反動で後ろに飛ぶ。

「姉さんは殴るしかできないのね」
ソレ

海鳥はそう言い、距離を取ってボンバーランス窒素爆槍を撃ってくる。

何度近づいても距離をとられ、攻撃を当てることができなかった。

致命傷はないけど、ボンバーランス窒素爆槍で吹き飛ばされるたびに地面に体を打ちつけてしまっている。

でも海鳥も能力の使い過ぎのせいか、表情を歪め汗をかいている。

「本当に姉さんは丈夫ね。でもそろそろ終わらせてあげる」

そう言うとき海鳥は右腕を上に掲げ、一気に二百メートルくらいの槍を作り出す。

私は避けるために横へ飛ぼうとした。

しかしその瞬間、目の前で爆発が起きた。

吹き飛ばされて地面に打ち付けられた私は、朦朧とする頭で考える。

たぶん今のは空気中から一気に窒素を奪い、そこに酸素や水素が雪崩れ込むようにしたのだろう。

（まずい、今あの巨大な槍で攻撃されたら超避けられない）

海鳥は微笑みながら近づいてくると小さな声でつぶやいた。

「姉さん」

すると途端に巨大な槍は霧散し、海鳥は口から大量の血を吐き出して、ゆっくりと倒れた。

私はわけがわからなくて、夢中で海鳥の傍へ駆け寄った。

海鳥は息も絶え絶えに話を始める。

「姉さん、あのね、私ずっと姉さんに、勝ちたかったの。でもね、どんなに、がんばっても、勝てなくて…。でも悔しくても、負けを認めたく、なくて、悔しくない振りしてた、の。姉さん、は実驗あんまり好きそう、じゃなかったのに、私より成績がよかったし」

海鳥はとても苦しそうに呼吸をしている。

「でもいつの、間にか、どんどんと？全部を壊したい？っていう感情が、抑えられなくなってきた、」

そこで区切り、大粒の涙を流し始めた。

「こんなものまで使っ、づがっで、お姉ちゃんに、ひどい、こと、ごべんねえ」

海鳥は泣きながら謝ってきた。いつのまにか私も涙がとまらなくなっていた。

私は海鳥の頭を撫でながら言った。

「お姉ちゃんぜんぜん怒ってないよ」

精一杯の笑顔でそう言った。

「お姉ちゃんだいす、きい」

最後にそう言って、海鳥はしゃべらなくなった。私はわんわんと声を上げて泣いた。

泣いても泣いても涙はどんどん出てきて止まらなかった。

いつのまにか藤田が横にいて、海鳥の体を触り、小さな声で話した。

「全身の血管の中に、小さな機械がいっぱいつまってる」

私はそれを聞いて、なぜかまた大声で泣いてしまった。頭を撫でようとしてきたので、今度は大人しく撫でられてやることにした。

そしてたくさん泣いたあと、藤田に海鳥のことを話した。

いつも私の後ろをお姉ちゃんといいながらついてきてたこと、

ずっと私に勝ちたいと思っていたこと、

でも負けを認めたくなくてくやしくない振りをしていたこと、

実験のせいで攻撃的になってしまったこと、

研究者をみんな殺して今まで姿を消していたこと、

最後に私のことを大好きと言ってくれたことぜんぶ。

すると藤田は静かにつぶやいた。

「絹旗を助けたくて、研究を止めたくて、研究者たちを殺したのかもね」

それを聞いて、私は「やっぱり藤田は超藤田です」って、また泣いた。

S I D E 久遠

絹旗が泣き止むのを待って「家まで送ってやろうか?」と言うと、絹旗に「ふ、藤田のくせに超エロいこと言うな」と言われた。耳年増め。

そして小さな声で「ありがと」と言うと、こちらに背中を向けて俺に手を振り、どこかに電話をかけ始めた。

俺はひとり家路についた。そして海鳥と絹旗の事を考える。もしかしたら俺と五十樹も、あの二人のようになってしまっていたかもしれない。

心をいじくられて、五十樹のことを敵と認識してしまう…、考えただけで寒気がした。

そして考えても意味がないと結論付けて、考えるのをやめた。

26 久遠は便利そうなモノを見つける

月日は流れ、とうとう高校1年…の年齢になった。まあ実験に関しては何も進展は無いんだけど。

4月になり、街には顔を輝かせて新しい生活を始める人たちがたくさんいた。正直妬ましい。

その日、実験は昼には終わり、俺は手持ち無沙汰の状態で自宅にいた。すると電話がかかってきたので出てみると、カエル先生だった。

開口一番に「君は看護師に興味はあるかい？」と聞いてきた。「えっと話が全く見えないんですが」と返す。すると先生はこう説明した。

「いやなに、今年の春から新しく入ってきた子に君の話をしたら、いたく興味をもってね。是非とも君に会ってみたいと言うものだからね」

目の前にでっかい釣り針の幻覚が見えた。針の先にはしっかりとかえしがついている。

ここは冷静になるために、一度電話を切って、こちらからかけなおそう。

「今から行きます」

あれ？口が勝手に。

「そうかね。じゃあ待っているよ」

電話を切られた。男だからしょうがないと思う。思春期だし。まあ罨だとしても、できることしかさせられないだろうし。

俺はため息をつき、病院に向かった。

病院に着くと、先生を見つけて声をかけた。すると「紹介するかについて来てくれるかね」と言われたので、先生の後に続いた。

正直ドキドキが止まりません。新人ナース！ビバ新人ナース！！男ってバカだよね。

「ああ紹介するよ、こちらが話していた藤田くんだ」

俺はその場に崩れ落ちた。なぜなら目の前にいたのは、30歳の男だったからだ。

「どうしたんだね？ 藤田くん。いきなり座り込んで」

そうですね、女とは一言も言ってないですもんね。そして？ 新しく入ってきた？ ってだけで、別に新人でもないんですね、中途採用とか。

いやまあ男って時点でアウトですけど。

「ああ。何か勘違いをさせてしまったのかね。まあせっかく来たんだ、少し働いていくといいね」

俺の精神力はもうゼロです、先生え。自分から落とし穴に落ちに来たんですけどね。ホント男ってバカだ。

でも先生がわざと俺に誤認させたのか、本当に純粹に紹介したかったのかわからない。

もうどうでもイイけどね。

全力で脱力しながら家へと向かう。今なら無能力者の小学生にも負けそうな気がする。

人通りの少ない抜け道を通る。可能な限り早く家に戻って寝たい。

今夜はきつと枕を濡らすことだろう。

しばらく歩くと、10メートルくらい先で女の子が男3人に絡まれているのが見えた。少女よ、すまぬ、今の俺には何もしてやれそうにない。

まあ死ぬことはないだろうから、気を強く持ってね。そう考えて通り過ぎようと決めた。

するとそこに、ツンツン頭の男が割って入ってきた。

俺の前に立つと、そいつはデカイ声で叫んだ。

「ちょっと待てよ、彼女困ってるじゃないか！」

すごいね、よく言った。後は君に任せた。

女の子と不良たちがこっちを見た。

「なんだあ？お前ら。なんか文句あんのかあ？」

「あるに決まってるんだろ！いい加減その子を離してやれよ！」

「かつこつけてんじゃねえぞ！3対2で勝てると思ってんのか？」

「そんなのやってみなきゃわかんないだろうが」

あ、あれ？すごく嫌な予感がするよ？？お前ら？とか？3対2？とか…。

てかツンツン頭も、そこは否定しろよ。？お前らなんか俺一人でじゅうぶんだ？？とか言ってる。

ああほら相手の2人がナイフ出しちゃったよ？ほらほらツンツン頭くん、いやお前なんかツンツンで十分だ。

もおほら、避けてばかりじゃなくて攻撃しなきゃ。

あくまで部外者を装っている俺に、一人がナイフで切りかかってきた。

俺は仕方が無いので、特殊警棒を『作成』し、ナイフを持つ男の手に、思いっきり警防を叩きつけた。

男は「手が手がア〜」とか言ってる。うん、手が折れたね。気の毒に。

ツンツンは、もう一人のナイフ男とまだ遊んでいるみたいだったので、俺が代わりにそいつの鼻っ柱に警棒を叩き込んであげた。

ツンツンは「お前すげえな」とか言ってきたが、ナイフと警棒のリーチ差を考えると、なにもすぐくないんだけど…。

そこに、3人目の男が、右手に火を纏わせて襲ってきた。うお、能力者かよと思って一歩後ろに下がった。

するとツンツンは俺の盾になるように立ちふさがり、右手で相手の右手を掴んだ。するとパキーンとなにかがはじけるような音がして、相手の手の火が消えた。

そのままツンツン頭は、左のこぶしで相手の顔面を殴りKOした。

俺は「おい、今のは」と聞こうとすると、助けられた女が「ありがとうございます」と割り込んできた。

邪魔だ女！

俺はツンツンを連れて、路地裏から通りに出た。「さっきの能力っていったいなんだったんだ？」と聞くと、「ああ、なんか俺、あ

あいう能力を打ち消す力があるんですよ」となぜか敬語で離してき
た。

とりあえずさっき『作成』した特殊警棒を渡し、「これを持って
みて」と言った。

ツンツンが触ると、またパキーンと甲高い音がして、俺の警棒が
消えた。「おお今のヤツ能力で作ってたのか」とか驚いている。

驚いたのは俺のほうだ。

俺が『作成』したものは、元になったものと全く何もかもが同じ
だと研究所で言われてたのだ。

「俺は藤田久遠、高1だ」と言って、手を出す。するとツンツン
も、「上条当麻だ。同じく高1。よろしくな」と二人で握手をした。

俺はこの日、とうとう解決の糸口を見つけたと思った。

「晚饭まだなんだけど、一緒に食いに行かね？」俺がそう言う
と「実は俺もまだなんだ。じゃあ行くか」と二人で近くのファミレス
に向かった。

「それじゃあ学園都市に来たばっかなのか」

「ああそうなんだよ。だからこの辺の地理とかもわっかんなくてさ。で、さっきの路地裏に迷い込んで今にいたるってわけ」

「そうなのか。それにしても、さっきの能力すごかったな」

「まあすごいって言われても、無効にできるのは、右手の手首から上だけなんだけどな。」

それにここに来てすぐに受けた能力診断じゃあレベル0システムスキャンって診断されたし」
無能力者

「それは無能力者じゃなくて、無効能力者だろ」

「そう言ってもらえると気が楽になるよ。ありがとな」

「ホントのことだろ？だから礼なんていらなくて。それにしても久々にファミレスに来たけど、けっこう腹いっぱい……、ちょっと待ってて。メールするの忘れてた」

「ごめんよー五十樹。テンション上がりすぎて？晩御飯先に食べてメール？をするの忘れてた。カチカチポチッとな。よしこれで〇

K。

「おまたせ。それにしても毎回今日みたいな人助けやってんの？」

「あゝまあ、ああいうの目にしちゃうとき、体が勝手に動いちゃって」

「へゝ上条ってイイやつだな」俺は笑顔でそう褒めると、「いやゝ」と頭を掻いて照れている。

頼むから、俺と五十樹にとって都合のイイやつでいてくれよ。

「じゃあそろそろ帰るか」俺が言うと、上条も時計を見て「そうだな」と同意した。

そして「今日は俺がおごるよ」と言うと、「いやいや悪いって」と遠慮した。

「まあ、ようこそ学園都市へ、っていう歓迎の意味も込めてな」

「そっか？悪いな」

「いいよこんくらい」

俺は伝票を持ってレジへ行くと会計を済ませた。「じゃあなんかあったら、いや、無くても連絡してくれよな」と上条が言い、俺も「ああ。そっちもな」と手を振った。

さあ、どうやって巻き込むかな。

26 久遠は便利そうなモノを見つける（後書き）

みなさまからのポイント評価やお気に入り登録、感想は、すごいやる気につながります。本当にいつもありがとうございます。

27 久遠は実験をする

上条と会った日から、俺は可能な限り上条と行動をともにした。PDAを操作すると、画面を見た。

「なあ上条、今度はあっちに行こうぜ。けっこう大きな公園があるんだよ」

「おおいいぜ」

行動をともにして3日目、その日も上条をいろんなところに連れまわしていた。

そしてわざとスキルアウトとも喧嘩になるように仕向けたりもしている。

今も別にただ単に街を案内しているわけではない。

目的の一つは、上条と行動をともにすることで、こいつの考え方や性格、行動パターンを知るためだ。

そしてもう一つは、…。おっいたいた。さっすが有名人、ネット

の掲示板に目撃情報が多くて助かった。

？御坂さまをかげから見守るスレ（98）？

だと。ちょっと気の毒に思えるな。

「おお上条！あれ第三位の御坂美琴だぞ」
レールガン

俺は周りに聞こえるようなでかい声でそう言う。

「おまつ、声がでかいって」

そんな上条の声を無視して続ける。

「お前の能力なら、御坂美琴レールガンにでも勝てるんじゃない？」

その言葉を聞いて、上条は表情を引きつらせて、顔を青白くした。

お、面白いからお。

「まずいっ「ちょっとあんた!」、はい?」

御坂美琴^{レールガン}が、体から少し放電させながらこちらに近づいてくる。

「ずいぶんとえらそうなこと言ってくれるわね！」

「まあ可能性の話だけだね。でも俺は勝率は8割以上だと思ってるけど」

「上等じゃない！その喧嘩、買ってあげるわ！」

そのあいだ、上条は俺と御坂を交互に見ながら、喧嘩の話が決まると「不幸だ…」と肩をおとした。

近くの河川敷まで来て、日が沈み始めた空の下、御坂と上条は向かい合って立っている。

俺は少し離れた土手の上でくつろいでいた。まあこれでもし上条が負けたとしても、別に全く痛くない、俺は。

でも計画はまた一からのやり直しとなるが。

正直なところ、五十樹の実験は止めるのがムリなら、それも已^やむ無しとも考える。

2万匹殺して実験が終了した後に、俺が全力で五十樹の支えになればいいのだ。

何年かかっても俺は五十樹の心の平穏を取り戻してみせる、ただそれだけだ。

「あんた！覚悟はできてるんでしょうね？あんなだけ大口叩いたんだから」

「いや、俺は^{上条さん}何も言っていないんですが」

「問答無用！行くわよっ！」

御坂が額から電撃を放つ。うおっ、すごい光と熱。御坂の短いスカートがはためく。

上条は右手を前につきだして、その電撃をかき消す。おっしゃ！レベル5の能力も無効化成功か！

これで俺の計画の成功率が上がった。

電撃を防がれた御坂は、少し驚いた表情をしたが、すぐにもう一度体に帯電させる。

どうやら電気を溜めているようだ。うあ、髪が逆立ってるよ。こ

つちにまで熱風が来る。

俺ならあれを自分に向けられたら、一目散に逃げるね。

いやあ上条は偉い子だなあ。

御坂は溜めに溜めた電撃を放つ。さっきとは比べ物にならないくらいにデカイ。範囲も威力も。

上条^{あそこ}が立っている場所にいるのが俺じゃなくて、ほんとよかったと、自然と笑顔になる。

上条はまたもその巨大な電撃の渦をかき消した。

「ちょっと何よその能力！ぜんぜん効かないじゃない！」

「だからもうやめようぜ、ビリビリ中学生」

「だあれがビリビリよお、私の名前は、御坂美琴だあ」

河川敷の小石や砂粒が舞い上がる。そしてスカートもめくれ上がり、パンチラげつとだぜえと期待したのだが、短パンをはいてやがった。

ちくしようにちくしように、思春期の男を弄もてあそびやがって。

ちくしように。

御坂の周りに黒い粒が集まっていき、何匹もの蛇のようにウネウネと動いている。

そしてそれらは一斉に上条に襲い掛かる。しかし上条はそれらを全て消し去った。

御坂は呆然としている。まあこの超能力のはびこる街で、その超能力を無効化させるなんてのは反則みたいなもんだからな。

「…あんたに私の能力が効かないってのはわかった」

御坂はポケットからコインを取り出した。そして今までの最大限の電氣量を体に帯電させる。

「だから次が私の最後の攻撃よ」

指でコインを上弾き、そして目の前に落ちてきたところを、指ではじいた。

空気をコインが切り裂く。俺は両手を合わせ、死んだら線香あげ

にいつてやるからな、と心の中でつぶやいた。

しかし上条はそれを難なくかき消した。

俺はレールガンの余波で、全身砂まみれで、耳がキーンとする。

なんてはた迷惑な能力だよ。責任者出て来い。

「まいったわ、私の負け。あんた名前なんていうの？」

「あ、ああ。俺は上条当麻。御坂美琴だよな、よろしく」

二人は仲良さ気に握手をしている。俺はそんな二人に近づいていく。

「いやゝお疲れ様、上条。ホント出鱈目だよなあその右手^{ッレ}」

「おい藤田、なんてことさせんだよ！危うく死ぬところだったじゃねえか！」

「いやあ悪かったな。でもお前ってすごいヤツなのに、自分のこと卑下してばかりだろ？だからちよつとでも自信をもって欲しくてな。悪かった」

心底すまなさそうな態度で、軽く頭をさげた。

「そんなに俺なんかの事を…」

上条は少し微笑んで、そしてハニカミながら「ありがとう」と言
った。

「それに、第三位の超能力者が、人を殺すようなことしないと思っ
たし」

俺はそう言って、御坂を見た。御坂は「あ、あたりまえじゃない」
と目を泳がせながら言った。

ウソだ！ぜつつつたいにウソだ！

「そっか、御坂もありがとな」

そう上条が言うと、御坂は顔を真っ赤にした。

「べ、別に、そんなの当たり前じゃない」

上条は御坂のそんな様子を見て、軽く微笑んでいる。俺は、デレやがった、と呆れてため息をついた。

「これから三人で飯でも食いに行かねえ？」

俺がそう提案すると上条は「ファミレスなら」と言い、御坂は「しょ、しょうがないわね、付き合っただけ」と、まだデレてやがる。

フラグが立つ瞬間を始めて見たかも。

そのあと俺たちはファミレスで飯を食った。今度は五十樹にちゃんとメールを送ったあとで。

そこで御坂は、上条がレベル0だということに驚き、御坂に学校はどこだと聞かれたので長点上機だと答えるとまた驚き、上条は「どこそれ？」と頭にハテナを浮かべていた。

俺の籍はまだ残ってるのかな？

そして「上条、一応なんかあった時のために、御坂とアドレス交換しとけよ」と御坂を見ながら言ってやった。

上条は「ああそうだな、教えてくれるか？」と言うと、「わ、わかったわよ。悪用したら許さないからね」と顔を真っ赤にした。

ああ砂糖を吐くって表現は、こういう時に使うんだね。

「御坂、俺にもアドレス送ってくれ、上条のついでに」と言い、赤外線ですてられてきた御坂のアドレスに、？貸し1つだ？とメールを送った。

御坂はそのメールを見ると、顔を真っ赤にしながら「あんたねえ！」といきなり立ち上がった。

上条が「どうした？御坂」と言うと「な、なんでもないわよ」と席についた。

俺はニヤニヤがとまらないっ。

そして以前上条から聞いておいた、上条の家の住所を御坂にメールしてやると、御坂はメールを確認し、無言でこちらを睨んできた。

きっと普段から他の女たちにいじめられているので、その鬱憤が溢れ出たんだろう。だから御坂、恨むなら麦野ファミリーを恨め。

そして三人はファミレスを出て解散した。

その際に御坂が「今日は負けたけど、また勝負してもらおうわよ」と言い残し、俺は上条の肩に手を置き「モテる男はつらいな」とからかい、上条はまたもや「不幸だ」と肩を落とした。

28 久遠は心からの贈り物をする

上条たちと別れたあと、俺はその脚でアッシュの家に向かった。

アッシュとはあの何でも屋のアッシュだ。

マンションの前で大中小それぞれ2本ずつのインゴッドが入ったカバンを『作成』し、中に入って行った。

部屋に招き入れられて、型どおりの挨拶をかわした。

「今日はどんな用なんだ？」

「●●と、それについての知識が欲しいんですけど」

「●●ってあれか？あの戦争映画とかで見るやつ」

「ええそれです。用意できますか？」

「ああ、まあできることはできるけどよ、何に使うんだよ？」

「まああの例の実験に関してです」

「へーその実験に関して調べはついたのか？」

「はい、なんとか」

「：そうか。もう結構深いところまで足を踏み入れちまってるみたいだな」

「自分から進んで踏み込んで行ったんですけどね」

俺が笑顔で話すのを見て、アッシュは「わかった、用意してやると諦めたように言った。

「今回はおいくらですか？」

「前のインゴッドでなら、前金で1本、後でもう1本だな。だが実験が全部終わってから、無事に帰ってきて2本持って来い」

「ははっ、ダメですよ、商売なんですから。死んだら取りっぱぐれますよ」

俺はそう言うと、カバンからインゴッドを2本テーブルの上に置いて、アッシュの家を後にした。

死ぬつもりはないし、何よりまたここまで来るのは面倒だしね。

それから一週間ほどは何も動きが無かった。上条と会ったり実験の資料を読み返したりして過ごした。

ただ、実験場で妹達を蘇生する前に、^{シスターズ}それらが血まみれで倒れている写真をたくさんカメラに収めた。

研究者には、自分が治療する固体の治療記録のためと、あとは記念にです、と言っておいた。

研究者からは、「君はいい研究者になれるよ」と褒められてしまった。

そしてアッシュの家に行ってから10日ほど経って、やっと注文の品が届いた。

長さが1メートルちよつとある長細い箱を2つ受け取った。

そして説明書を一日で読み、ソレを『解析』した。

それからは、麦野經由で手に入れた、今後一ヶ月の実験の場所と

時刻の書かれた資料を読んで、実験場所を一箇所一箇所確認して回った。

この資料を麦野から手渡しで受け取った時に、上条がもし負けた時のために、五十樹に勝てる見込みがある人間を選定するため、第二位の調査を頼んでおいた。

俺の理想としていた実験場の条件と、一番近い場所を見つけ、その場所にイロイロと細工を施した。

決戦は5日後に決定した。

俺は上条と御坂に、差出人が不明になるように封筒を送った。

作戦決行日の2日まえに届くように。

封筒の中には、上条には×印と日時を書き加えた地図を。

御坂には量産能力者計画と、絶対能力進化の資料を送った。
レディオノイズ
レベル6シフト

ちなみに御坂に送った資料からは、クローンたちが全固体蘇生さ
れているとの記述を削除した。

そして実験場所と日時に関する資料は入っていない。

それと？この資料を上条当麻に見せて、詳しく話を聞け？と書いたメモと、俺が最近実験場で撮りまくった血まみれのクローン達の写真を入れておいた。

御坂が上条に話を聞きに行かずに、自分で実験場所を調べて実験に乱入する可能性もあったが、御坂が殺されたならそのことを上条に伝えるだけだ。

御坂に送った資料を上条に送ることで。

それに御坂にしてみれば、メモに？上条に聞け？と書かれている以上、一番最初の手がかりであるはずの上条に会いに行かないということはないだろう。

それからの一週間は、御坂と上条からの電話やメールは全て無視した。

二人と並んで実験場に行くわけにはいけないので、話に巻き込まれないようにするためだ。

そして念のため、作戦決行の日までは加東と南原のチームのアジトで寝泊りした。

御坂に自宅の場所をハッキングされて押しかけられるのを防ぐためだ。

もちろん蘇生作業にはちゃんと行った。

家を出る時に、五十樹には一週間ほど泊まりで出かけてくると言っておいた。

SIDE 御坂美琴

その日もいつもと変わらない朝を迎えた。なぜか私のベッドで寝ていた黒子を排除し、食堂で朝食を採った。

「御坂、お前あての郵便だ」

寮監に大きな封筒を手渡された。なんだろう？と思いい封筒の表と裏を見たけど、差出人が書かれていなかった。

自室に戻ってベッドの上で封筒を開けると、中から大量の写真が零れ落ちてきた。その写真を見ると背筋が凍りついた。

写真の中には、たくさんの私が血まみれで倒れていた。それが何枚も何枚も何枚も。写真の日付と時間を見ると、昼に撮ったものもあれば夜に撮ったものもある。

屋外で撮ったものやどこかの部屋の中で撮ったものもある。

悪質なイタズラかも、と思い、封筒を覗くと、紙の束が入っていた。

その資料を全て読むと自室の洗面所で胃の中のものを全て吐き出してしまった。

あの時私がDNAマップを提供しなければ……。自分のベッドに戻り、写真を封筒に直した。

できれば二度と見たくないからだ。

その時黒子が部屋に戻ってきた。

私の顔を見ると「ひどい顔をされてますわよ？ 御加減でも悪いのでは？」と、とても心配そうに聞いてくれた。

「今日は学校を休むから、学校と寮監に伝えてくれない？」

そう言うと、「まかせてくださいですの。お姉さまはゆっくり養生なさってくださいませ」と言い残してカバンを手に取り部屋を出て行った。

私はベッドに座りなおし、資料を再び読み出す。

すると資料の最後のページに手書きのメモが添えられていた。

？この資料を上条当麻に見せて、詳しく話を聞け？

あいつに会わなくちゃ。

S I D E 上条当麻

俺にとっては珍しい事に、居残りをさせられることなく学校を出た。

家に向かって歩いていると、電話が鳴ったので画面を見てみると御坂からだった。

「もしもし、どうした御坂」

？ごめん、もう学校終わった？？

「おおいま家に帰ってるところ」

？これから会えない？？

「いいぞ。どこで会う？」

？実はあんたの家の近くにいるんだけど？

「じゃあ家に来るか？」

？わたった。じゃあ後で？

電話を切ったあとで、あいつに俺の家の場所って教えたことあったかな？と疑問に思った。

しかし家に来るってことは、まさかまさか、いや、この上条さんに限ってそんなハッピーイベント起こるはずないよな。

でもひょっとしたら…。

寮の前まで帰ってくると、御坂が立っていた。

「場所、すぐにわかったか？」

「うん、突然ごめんね」

そう話す御坂は、いつもとは違って元気が無いみたいだった。心なしか表情と体がこわばっているように見える。

ポストを見ると、封筒が届いていた。なんだろうな？まあいいか。

「じゃあ部屋に行くか」そう言って御坂の方を振り向くと、うつむいたまま「うん」と返事をした。

奥の部屋に入って上着とカバンとさっきの封筒を置いて、リビングに戻った。

「今日は突然どうしたんだ？」

「うん、あのね？見てほしいものがあるの」

そう言うと御坂はカバンから封筒を取り出した。中に入っていたものを見て、俺は血の気が引いた。

「なんだよこれ」

その写真には血まみれになったたくさんの御坂が倒れている姿が写っていた。

「私もわからなくて。それでこの資料も読んでみて」

俺は手渡された資料を読んだ。全く理解が追いつかない。

「これって事実なのか？」

「わかんないわよ、私にも。でも資料の最後のメモを見て」

そのメモには？この資料を上条当麻に見せて、詳しく話を聞け？と書かれていた。

「俺に？俺だってこんなの知らないぞ？」

いや、でもなにか理由があるはずだ。この封筒…もしかして。

「ちょっと待っててくれ」

俺はさっき奥の部屋に置いた封筒を手し、リビングに戻った。

「帰って来たとき、ポストに入っていたんだ」

そう言って封筒を開けた。中には×印と日時が書かれた地図が入っていた。

「これってもしかして、次の実験の日時と場所じゃない？実験の関係者が私たちに実験を止めてもらいたくて送ってきたのよ」

「そうかも知れないな。明後日の16時か。俺たちで実験を止めてやろうぜ」

「いいの？あんたには関係ないじゃない」

「関係ならある。だって俺たち友達だろ？」

御坂は小さく「うん」と言って、今日会ってから初めて肩の力を抜いたようにみえた。

「なあ藤田に連絡してみないか？あいつ頭いいんだろ？長点上機に行ってるくらいなんだから」

「でもこれ以上だれかを巻き込むのは…」

「…それもそうだな。あとで文句言われたら、一緒に謝ってくれよ？」

「わかったわ。ドゲザでもなんでもしてあげるわ」

そう言って俺たちはちよつとだけ笑って、御坂は自分の寮に帰って行った。

28 久遠は心からの贈り物をする（後書き）

次回、やっところさの決戦開始です。

29 決戦日（前編）（前書き）

数日前、禁書のDVDを借りてきました。

29 決戦日（前編）

S I D E 五十樹

あいつが泊り込みで出て行ったちょうど一週間後、俺が実験に向かおうと玄関のドアを開けると、あいつが目の前に立っていた。

「ねえ五十樹？ 実は俺、五十樹の実験のこと知ってるんだ」

それを聞いた瞬間、俺は体が固まった。

「ねえツラいんでしょ？ もうやめなよ。実験になんて行かないでよ」

その言葉を見殺して外にしようとしたが、あいつは俺を通そうとはしなかった。

「どうしても行くっていうんなら、？ 反射？ の友達設定を解除しなよ」

おそらく俺との決別宣言なんだろう。俺は言われる通りに設定を解除し、「これでいいんだろ」と言ってあいつの肩に触り、ベクト

ルを操作し軽く吹き飛ばした。

マンションの廊下の壁にあいつはぶつかり、そのまま崩れるように廊下に座り込んだ。じゃあな、と心の中で別れを告げ、エレベーターの方へ歩く。

「イツキいゝ！」

その言葉を聞いて後ろを振り返りゃあ、あいつが目の前まで走ってきてやがって、飛び上がって右手で殴りかかってきた。

しかし反射の壁にはばまれて、あいつの右腕はグシャグシャになった。

（悪りィな。今度こそ本当にさよならだ）

俺は心の中で謝り、もうここに反することはないだろうと心に決めた。

（おまえが死ぬくらいなら、俺が地獄にでもどこにでも行ってやるよ）

実験を断ればあいつは死ぬんだ。それよりはよっぽどましっても

んだ。

実験場に着いた。今日は廃校になった小学校の校庭のようだ。いつもの通り辛気臭エツラした女が俺を待ってやがった。

「よオいつもいつもご苦労なこったなア。毎日俺の実験につき合にしちまってるンで、言いにくいンだがよオ、今日は虫の居所ってやつが悪いンだわ。だからいつもみたいに簡単に死ねるとは、思わねエことだなア！」

「全く問題ありません、とミサカは簡潔に返事します。それよりもあなたがなぜそんなことをわざわざ宣言するのがミサカには理解できません、と自分の疑問を率直に述べてみます」

「チッ。てめえと会話が成立するなンざアはなっから思っちゃいねエよ。そろそろ始めるか」

「午後16時00分00秒、これより第8236次、実験を開始します。被験者アクセラレータは所定の位置についてください。とミサカは伝令します」

「…おイおイ頼むよ。一般人なンぞ実験場に連れ込んでンじゃねエよ」

俺は後ろに気配を感じ、誰に言うともなく言った。

「こんな場合、どうすんだ？口封じのために殺しちまうかア？」

俺は後ろを振り向いた。男は見たことねエ奴だが、女はクローンと同じ顔をしてやがる。

「うるせえよ」

男がつぶやいた。聞き間違いか？と思った。俺にそんな口をきくやつなンざいなかったからなア、あいつ以外は。

「あア？」

「ごちゃごちゃ言ってねエでその子から離れろよ三下がア」

初対面のやつに、三下呼ばわりされちまったぜ。あア今日はムカツくことばっかだなア。殺しちまってもいいよなア？こんなムカツくやつは初めてだ。

「言いてエことはソンだけか？」

「アクセラレータ！」

女がコインを手に持っていきなり叫んだ。クローンとは違エなア。あいつらはデカい声なンざ上げねエし。

「アクセラレータあんたは何のためにこんな実験をやってるの？」

「あア？ 人には人の事情ってもンがあンだよオリジナル！」

「それは2万人もの人間を殺してでもやらなきゃならないほどのものなの？」

2万人？ 足りねエよ全然足りねエ。あいつは以前60億人より俺が大事だとぬかしたンだ。2万人なンざ誤差の範囲だ。

「当たり前のこと聞いてンじゃねエぞ！ 第三位つってもその程度わかンねエほどバカなのかア？」

もし2万人のほうが大事と思うなら、とっくの昔に実験なンぞやめてるだろオが。

「こんんのおおおお」

オリジナルがコインを飛ばしてきたが、当然反射されて、オリジナルの横を通りすぎていった。こいつ俺の能力知らねエのか？知らねエでこんなどこに来てンのか？本物のバカか？

「なんかやったか？オリジナル」

「御坂、さがっていてくれ。こいつは俺が倒す！」

三下ウニ頭がなンか言ってンなア。ンでまっすぐつつこんでくる。多分こいつもバカなンだろう。気の毒なこった。

俺は地面を踏み、ウニ頭の下の地面を爆発させた。

「うわゝ」

ずいぶん飛ンだなア。あいつは仰向けンなって、手を地面につけたまンま動かねエ。今ので終わりってこたアねエよなア？

俺はもう一度地面を踏んで、あいつの体の下の地面を爆発させようとした。だがなんも起こらねエ。計算ミスったかア？

男が立ち上がった。しょうがねエから、じかに触って血液を逆流させてやるか。

さっき嘗^なめたこと言われて、血が逆流するほどムカついたから、そのおかえしだア。

俺が左手でそいつの体に触れようとしたとき、俺の左手をはたかれた。

「はア？」

なんで反射が効かねエンだ？俺の反射は間違いなく働いてンのに。

「がはっ！」

クソ、殴られた。わけがわかんねエ。俺は後ろに下がってジャングルジムをあいっに向かって飛ばした。そしてあいっに向かって突進した。

それを避けた瞬間に終わらせてやるよ。避けられるとも思えねエがなア。

だがジャングルジムが男に当たった瞬間に、ジャングルジムが粉々に砕け散った。

なんだな何が起こってんだ？ 全く訳がわかんねエ。

そしてまた殴られた。

クソっ、とりあえずは地面の爆破はできんだからそれやって距離をとるか。

俺はまた地面を爆破してやった。空に舞い上がったあと、また地面に叩きつけられた。

だが男はまた立ち上がろうとしてやがる。

男の能力は、能力と物体を分解しちまえるってどこか。

まアここには元々モノはあんなま置かれてねエがな。

じゃあ距離をとってプラズマでも作るか。ンでここらへんのもん全部消し炭にしてやる。

そこまですりゃア多少はすっきりするかもなア。

俺は両腕を伸ばして風の計算を始めた。頭上にバカでけエ光の塊ができていきやがる。

突然後ろで爆発がおきやがった。後ろを見ると地面が大きくへこんでやがる。

爆風でプラズマが少しは小さくなったが、問題ねエ。もちろん俺は無傷だしな。

驚かせやがって。俺はまた男の方を向きなおした。

いつのまにか、男は目の前まで走ってきてやがった。

「歯あ食いしばれよ^{最弱}、俺の^{最強}最弱はちつとばつか響くぞ!!」

男は叫んで目の前で飛び上がって殴りかかってきやがった。

それを見て俺は、自分の部屋の前であいつにされたことを思い出しちゃって、体が固まった。

今日はクソみてエなことばつか起きやがる。クソつたれ。

そしてそこで意識が途切れちゃった。

30 決戦日（後編）

S I D E 久遠

「ハデに殴られたなあ」

俺は校庭を見渡せる場所から、五十樹が殴られたのを見てつぶやいた。そしてアッシュから受け取ったRPGー7を『分解』した。

すべての段取りを行ったのは俺だが、やっぱり五十樹が殴られるのを見て嬉しいわけではない。

俺は五十樹が倒れている方へ歩いて行く。

五十樹のそばまでくると、上条は少し離れた所に座り込み、御坂は五十樹を見下ろしながら立っていた。

「やあお二人さん」

声をかけると、上条が歩いて近づいて来る。

「藤田、こんなところで何やってるんだよ？」

「なにして、君たちと同じだよ？実験を止めに来たんだよ」

「はあ？もつとわかるように説明してくれよ」

「まあ話せば長くなるからちょっと待っててね」

そう言って御坂のほうを向く。

「もしかしていま、砂鉄とかで埋めちゃえば窒息させて殺せるかも、とか考えてる？」

「あんたには関係ないでしょ？」

「関係大ありなんだけど」

俺は両手に拳銃を『作成』して、クローンと上条に銃口を向けた。

「ちょっと、あんたなにやってんのよ？」

「ん？わかりやすく今の状況を説明したつもりなんだけど。」

「どういうことだよ？」

銃口を向けられた上条は、両手をあげながら尋ねてきた。

「いや、だから、御坂が アクセラレータ 一方通行 を殺そうとしたら、俺がクロ
ーンと上条を殺すってこと」

「はあ？もっとわけわかんねえよ。ちゃんと説明しろよ」

「あんたこいつが何やったのか知ってんの？」

「んー。簡単に言うと、上条と御坂はクローンのために実験を止め
ようと思った。」

んで俺は アクセラレータ 一方通行 のために実験を止めようと思った。そういう
事。わかった？」

「お前こいつと知り合いなのかよ？」

「幼馴染ってやつ」

「でもこいつがやったことは許されることじゃないわ」

「マア何と言うか：クローンは一体も死んでないんだよね」

「「はぁ？」」

「それどういうことよ？」

「一方通行に実験で殺されて、その後全員蘇生されてんの」

二人は顔を見合わせている。

「疑うんなら、そこにいるクローンに聞いてみれば？」

「あんたどうなの？」

「はい。その人が言ったことは事実です、とミサカはお姉さまに対

して言い切ります。それと補足説明すると、ミサカの全固体を蘇生させたのは、その人です、とミサカは噂のあの人に会えた興奮を押さえ、頭を下げてみます」

「まあ俺の都合でやったことだから気にしないでいいよ。それまでやる気？」

「うっ」と御坂は声をつまらせている。

「それで、こいつが実験をやってた理由って…」

「ああ人質をとられてたんだよ。実験を断ったら人質を殺すってね」

「こいつが言ってた2万人を殺すよりも大事な事情って…」

「えっ？そんなこと言ってくれたの？嬉しいなあ」

「人質ってお前かよ！」

「そうだよ。だから俺も、一方通行に、ああ本名は五十樹って言うんだけど、五十樹に内緒で実験を止める方法をずっと調べてたんだよ」

「まさか：いやなんでもない」御坂は上条を見てそう言った。

ああ気づいたのね、俺が今日の日のために二人に近づいたってことに。

「それで結局どうするわけ？」

「わかったわよ。帰ればいいんでしょ？」

「それがいいと思うよ。あ、そうそう上条」

俺は上条のほうを向き、銃を構える。

「五十樹が距離をとって攻撃し続けたらこういう結果になって無かったと思うから、自分が第一位より強いとか勘違いしないでよ？」

あ、あと仕方が無かったとはいえ、五十樹を殴ったのはムカつくから、一発くらい銃弾くらっても我慢できるよね？」

「い、いえ、遠慮します」

「そっか、残念」

俺は銃を『分解』し、三人が帰るのを見送った。

「はあゝゝ終わったゝ長かったああゝ」

俺は五十樹の横に腰を下ろした。そして五十樹の横で大の字になって寝転んだ。

S I D E 五十樹

「おいお前こんなところでなにやってンだ？」

目が覚めたら、隣にあいつが寝転ンでやがった。

「何って五十樹が起きるのを待ってたんだけど」

「ンなことじゃねエよ。ナンでお前が実験場にいるのかって話だ」

今日はわけがわからねエことばかり起こりやがる。

「そりゃあ俺が実験を止めるためになんやかんやと裏で動いてたからだよ」

おいおいちよつと待て。

「…いつから知ってたんだ？」

「いつからって言われても。んゝ最初から？」

「はア？」

「だから、あの廃工場でナイフを持ったクローンを殺した時から」

「なんで知ってんだよ！」

クソ、あの時のこともしっかり記憶に残ってるから、ウソを言ってるように思エねエ。

「いやあ五十樹の様子がおかしかったから、女でもできたんじゃないかと思って、後をつけた。テヘッ」

「テヘツじゃねェよ。じゃあなンでなンも聞かなかったンだよ？」

「聞けば答えてくれた？ 答えてくれないだろうから、聞かなかったっただけだよ」

まあ確かに。こいつが関わろうとしたら、全力で止めるつもりだったからなア。

「クソッやられた」

「ああそれから五十樹に発表があります。実はッ、クローンは一体も死んでいません。ジャジャーン」

わけがわからねェ。確かにこいつの能力なら可能だろうが。それより問題は別にあンだろ。

「…ちよつと待て。なんでそんな重要なこと隠してたンだよ！」

「いや、日本には、敵を騙すなら味方もねっ、て言葉がありました」

「もういいわ。なンか一気に疲れた」

護ってたつもりだったのに、護られてたとかみっともねエ。

「そろそろ反射のお友達設定をしておしてくれない？体動かないんでしょ？」

クソ、殴られただけでコンナンになるとは思わなかったぜ。

「チッもうどうとでもしやがれ」

今はあの家に帰って眠りてエ。俺は無様にもこいつの背中に背負われて、実験場を出て行った。

30 決戦日（後編）（後書き）

長かった。本当にここまで長かった。

RPG-7は携帯式対戦車擲弾発射器と約され、手持ちのロケット砲って感じです。

次回は後日談です。

3 1 決戦日の翌日（前書き）

これでこの章は終了です。

31 決戦日の翌日

実験が終わった次の日、二人で朝食を食べた。とりあえずは実験は停止しているようで、五十樹に実験に関する連絡は無いようだ。

そして俺はいま、五十樹の部屋で正座させられている。

「で、だ。お前は学校にも行かねェで、毎日俺をつけて実験場に来てたってわけか」

「はい、おっしゃる通りです」

「研究所とか施設内での実験はどやったんだ？」

「えっと、堂々としていたら、君の能力は経費の削減になるとかなんとか」

「実験の日、わざわざ反射設定を変更させた上で俺に殴りかかってきたのは？」

「えっと、心理的拘束をかけようと思ひまして。あのツンツン頭に

殴られそうになった時に、俺のことを思い出して動きが止まればいいなあ」と

「あア、まんまとひっかったよクソ。ンで、一番の疑問が、だ。なんで俺に一回も気づかれず、見失わずに俺の後をつける事ができたんだ？ すんげエ嫌な予感がすんだけど」

「えっと五十樹のPDAの設定を書き換えて、位置情報を盗ん「やっぱるかよ！！」てめエ今すぐ元に戻しやがれ！ いや信用できねエ。買い換えることにするわ」

「ひどいっ！ 五十樹の目を盗んでバレずにやるの結構緊張したんだよ？」

「自信満々に言うことじゃねエよ！」

ああ。なんか懐かしいなあこの感じ。

「あアそう言やアまだ疑問があったんだよ。昨日実験場から出てタクシーに乗るまで、ずっと俺を背負ってたよなア？」

「そうだね。それがどうしたの？」

「あの時よ、たかだか打撲なンぞ、オマエの能力で治しちまえばよかったンじゃねェか？」

「それはいつもと違って弱ってる五十樹って萌えるから、庇護欲があふれ出てきて」

「テメエの欲のためかよ！なんなんだよ！テメエはどこに向かってんだよ」

「いや、計画を立てた時に、絶対にこうしようって考えてたんだよ。いやあ一生の思い出になったよ」

「クソッ、俺にとっちゃあ黒歴史だ！」

いやあ本当にいい経験したよ。でもなんで誰かに録画を頼まなかったんだろ？ああ友達いないんだった。泣いてなんかいないんだからね。

「ンで結局あのウニ頭的能力はなんだったンだ？」

「全ての能力を無効化するんだってさ。デタラメだよねえ」

「あ～？そんだけか？」

「えっ？俺が知ってるのはそれだけだよ？」

なんか他にあるのか？俺にも内緒にしてたような、近くで見た五十樹にしか気づけない能力が。

「じゃあジャングルジムを投げつけたのに、体に当たった瞬間碎け散ったのはなんだったんだ？」

びっくりした。何か見逃しがあつたのかと思ったよ。

「あああれか。あれはもちろん事前に実験場に来て俺が、あの実験場内に置いてあつた大きな物体は全部モロい物質に『操作』しといた」

「デメエはどこまで…まあいいか、もオ。つたくドンだけ手間隙かけたんだよ…。」

そう言つて五十樹は大きくため息を吐いた。俺ってよく人にため息を吐かれる気がする。なんでだろう？

「それにしてもよオ、学校どオすんだ？」

「どうしよつか。まあ別に必要ないっちゃあ無いけどね」

ブラック●ヤックまっしぐらだよな。ホントそれでイイと思うんだけど。

「学校ぐらいちゃんと出とけよ」

「：五十樹にだけは言われたくないな。じゃあとりあえず学校に電話してみるよ」

カチカチポチッ

？はい、長点上機学園付属中学です？

「あの私、藤田久遠といひまして、ずっと自主休学していたのですが、まだ籍は残ってます？」

？少々おまちください。：はい、残っていますよ。ただ正確には、長点上機学園所属となっておりますが？

「では更科五十樹についても調べてもらえますっ？」

？はい。：同様ですね？

「そうですか。どうも」

通話を終えて五十樹に向かう。

「二人とも長点上機学園に残ってるんだって」

「じゃあお前はちゃんと行っつけ。カリキュラム時間割受けて、レベル上げてこい」

「五十樹はどうするのさ」

「俺か？俺は…まアちょっとずつでもよオ、またカエル先生ンところこうと思ってンだ」

「そっか。実験でなにかしら思うことがあったってことだね」

「まアな」

「長い休みも終わりってことだね」

「あア。いいンじゃねエの？その方が普通って感じがすンじゃねエか」

五十樹がニヤリと笑った。確かにそうだね。俺は正座をやめて、ソファーに腰掛けた。

「そうだね。五十樹もこっちおいでよ」

そういつて、俺は座っているとりのスペースをバンバンと叩いた。五十樹は何かを疑うような目をしながら、しぶしぶ俺の隣に座る。

「じゃあさ、長い休みが完全に終わる前に二人で祝杯をあげよう」

俺はお酒のビンとショットグラス二つを順番に『作成』した。

「おいおい酒かよ。未成年が…て今さらか」

「今さらだよ。俺は結構重火器類も『作成』できるし」

「それは歳の話じゃあねエ気が：てかお前昨日おれの背後になんかミサイルみたいなもンぶっぱなしやがっただろ？」

「撃ったね。手持ちのロケット砲」

「ンなもンどこで手に入れたんだよ！」

「んゝ夜の街を彷徨ってて知り合った何でも屋さんから？」

「：もういいわ。それより開けンぞ」

五十樹はボトルの上にかぶさっていた封を、能力を使って一瞬で外した。これぞ能力のムダ使い。そしてそのまま俺のグラスに酒を注いでくれた。

「世話ンなったな」

「お互いに、だろ？」

そして二人ともグラスを掲げ、酒宴を始めた。

「ひゃっはっはアゝこりや旨エなアゝ何杯でもいけんぜエひひひあはア」

「あいらの、もるとでえにまんちよいと、したからねえ」

「2万ちよいだアゝア？ンなバカ高けエもん盗んで来たンかよオオ。謝れエ俺に謝れエエ。全力でナアアア」

「うゝぬすんでねえって。のうりよくでふくせいしただけでえ」

「お前はデジタル万引きってのうオ知らんのかアア？」

「かわりにいいぼきんばこおおにさんまんつつこんでえきたしい」

「募金箱に3万つつこんだアアア？店とはア関係ねエだろうがアア」

「ぼきんばこのなかみってえ、みせがぬいてるんじゃないのおゝ？」

「お前はアお前はア全国のお店をオオ敵にまわしたぞオオオ」

そして俺たちは、また元の日常に帰っていく。

久遠の日記帳

4月×日

上条当麻という無効能力者と出会った。五十樹の実験を止めるカギとなる可能性があるので、巻き込むことにする。

さて、上条をどうやって巻き込もうか。とりあえず、いま上条の事でわかってるのは、

A、五十樹に能力で対抗できる可能性が高い

B、困った人間を放ってはおけない

C、裏表がなさそう

D、能力は右手首から上部分でのみ発動

E、レベルは0と判定された

くらいかな？

まずは実験の前提は、五十樹は学園都市最強の能力者ってことだ。これを上記E（レベルは0と判定された）の、レベル0が倒せば、前提が覆って実験は停止される。これは確実だ。

また再計算されて再開される可能性もあるが。

次に、どうやって上条を実験に参加させるか、だ。

やっぱり上記B（困った人間を放ってはおけない）の人情で攻めるか。被害者扱いできるのは、妹達と、次点で御坂美琴オリジナルか。

それで妹達シスターズとどうやって接点をもたせようか。街中で上条と妹達シスターズを会わせるか？でもクローンって事を理解させるためには2体以上と会わせる必要があるよな。

でもあいつらは実験の時以外では、街で2体と一緒に行動はしないよなあ。

？常盤台の制服を着た、御坂美琴のそっくりさんが歩いてる。しかも2人も？

って感じに大騒ぎになるだろうから。てか妹達の行動スケジュールが手に入るかどうか。シスターズ

いっそのこと、実験場に上条を連れて行くか？おおこれいいんじゃないか？現場を見たら、確実につつぱして行きそうだし。

いや、やっぱダメだ。今日の不良との喧嘩を見たけど、あの程度のモチベーションじゃ確実に五十樹に秒殺される。

やっぱり身近な人間が困ってるってほうが、モチベーションは上がるんだろうな。じゃあまずは上条と御坂美琴を知り合いにさせるか。

知り合いと同じ顔の人間が殺されそうなのを見たら、モチベーション上がるだろうし。

おおだんだん組みあがってきたぞ。

1、まずは上条と御坂美琴を知り合いにさせる。

2、二人に実験の資料を送り、実験が起こっていることを知らせる。資料には、全クローンが蘇生されていることは書かない。

3、資料に書かれた時間に実験場所に行くと、本当に実験が行われ

ている。それにより資料の信憑性を上げる。

4、上条が実験場で御坂美琴と同じ顔のクローンを見て、資料の信憑性をさらに上げる。

そして御坂美琴と同じ顔をした人間が、資料によるともうすでに8千人以上殺されていると書かれている。完全に資料を信じれば、モチベーションMAXで戦闘へ。

次に実験場所の選定だな。上条は上記D（能力は右手首から上部分でのみ発動）の通り、接近戦しかすることができない。

そうすると五十樹に周りにある重量のある物体を、遠距離から投げられ続けられればいつかは詰む。

じゃあモノがあまり置かれていない実験場のほうがいいな。一番良いのは、広い更地だな。

次は戦闘に関してだな。接近戦になったら、十分に上条に勝機はあると思う。五十樹は殴りあいなんてしたことないし。

上条に戦闘の経験を積ませるのでもいいかもしれない。スキルアウトどもと、あとはレールガンと一戦交えさせて自信をつけさせるのもアリだな。

あとは五十樹の気をそらす方法があればいいんだけどな。それか

殴られそうになった時に、五十樹の体が硬直するような仕掛けが。

今のところはこれくらいか。

31 決戦日の翌日（後書き）

日記は上条当麻とあった日（御坂美琴とまだ会っていない時）に書かれたという設定です。

32 掃除の話その1

あの実験終了から5日ほど経った4月のある土曜日の昼、俺は自分の部屋でゴロゴロしていた。

五十樹は病院に行っていて不在。ヒマだ。こんなことなら俺も一緒に行けばよかった。

昨日約三年ぶりに学校に行った。まあ中学じゃなくて高校の校舎に、だけど。

とりあえず復学の手続きをすませて、なぜかすでにできあがっていた学校のIDを受け取り帰って来た。

思っていたより、メガネの生徒は少なかった。みんなメガネだと思ってたのに。

俺は麦野さん宛てに？頼んでた第二位の調査はもう必要なくなりました。いろいろとお世話になりました？とメールの文章を作った。

実験が終わったことを知らせていなかった。忘れていたのだ。

人間って思い出したいくない人や物事は、思い出さないようにできているのだ。文句ならそういう風に人間を作った神様に文句を言うて欲しい。

俺は心の中で神様に責任転嫁しながら、震える指でメールの送信ボタンを押した。

お、一瞬で返信が来た。裏のお仕事ってやっぱり昼間はヒマなのかね？

？ブチ殺すぞ？

…直球でした。直球の危険球でした。確実にわざとバッターの頭を狙って投げるタイプですあの人。

なんて返せばいいんだろうか。俺の周りには、まともな女はいないから、相談する相手もない。

五十樹の実験の時に知り合った芳川さんくらいか、まともそうなのは。

でも

？女の知り合いに、ブチ殺すぞってメールされたんですけど、どうしたらいいですか？？

なんて相談されても、まともな答えを返せる人はいないだろう。

こんなことを送ってくるヤツが異常なんだ。

あんまり返信への間を空けすぎると、そのことでまたキレられそうだ。とりあえず話を変えるか。

？何かと立て込んでいて、ご連絡が遅れてしまいました。申し訳ないです。ところでそちらの映画の趣味のおかしい幼女は元気ですか？以前会った時は、かなりヘコんでいたようなので？

これでいいだろう。

？見た目は平気そうなんだけどね。こっちの世界じゃあちよつとした油断が死に直結するから、どうかしてやりたいんだけどね？

話題の変更成功だ！絹旗、いま確実に俺の役にたったぞ、喜べ。そしてすかさずメールを終わらせるっ！

？早く元気になるように、微力ながら俺も祈っております？

まあ無宗教だけど。てかここは科学の街だしね。

？近いうちにあんたに連絡取らせるから、一緒に映画にでも行つてやれ？

OH、何か別の問題が発生したって気がするっ。あの映画の趣味は理解できないんだよね。

？追伸、上手く話を変えられたつもりだろうが、私は忘れて無いからね？

ナンテコッタイ。：今度はちゃんと五十樹に神様^{レベル6}になってもらって、麦野から俺を護ってもらおう。

ん？家の前ので、なにやらカチャカチャと音がする。俺は玄関の扉を開けて外を見た。すると五十樹の部屋の扉の前に男が立っていた。

そいつは顔中ピアスだらけのひよろ長い男だった。その男は右手でスプレー缶を振っている。

そして今にも扉に落書きをしようとしていた。

俺はすぐさま両手に警棒を『作成』し、右手の警棒で相手の右手首を叩き折り、左手の警棒で相手の右耳を殴りつけた。

男は左腕を下にした形で倒れた。トドメに軽そうなアタマを踏みつけようとも思った。

だけど気を失っているようなので、やるだけ無駄だと思い、その男を非常階段に引きずって行った。

とりあえずガムテープを『作成』し、手足を拘束したあと、『操作』で傷を治した。

そしてペットボトル入りのミネラルウォーターを『作成』して男の顔にかけた。

こんな男には便所の水でさえもったいないが、今使える水はこれだけなのだ。

ちなみに家の中にあるものはかたっぱしから『解析』済みだ。だから大抵のところでのサバイバル生活が可能だ。行く予定ないけど。

電化製品は『解析』不可だし、そもそも発電機を『解析』したこともないから、屋外では使えないだろうけど。

そんなどうでもいいような事を考えていると、やっと男が目を覚ました。

俺を見るなり「ひいひい」とウルサイ。

俺は唇のピアスをひとつ引きちぎり、言い聞かせるようにゆっくりと「黙れ」と言った。

やっと黙ってくれた。本当にしつけて大事だよね。

「名前は？」と聞くと「中畑大輔」とすぐに答えてくれた。人間は素直なのが一番だ。

「この建物オートロックなんだけど、どうやって入ってきたの？」

と優しく尋ねると

「他の人間のあとについて」

と顔が青白くなっている男は答えた。セキュリティが機能してないな。単純だけど、防ぎ難い^{がた}。

「なんであんなことをしようとしたの？」

と聞くと、だんまりをきめこむ。俺は右まぶたのピアスを引きちぎると、もう一度

「なんで？」

と尋ねた。しかしまだ

「あうううえっどおお」

とわけのわからない事を言うので、左耳のピアスを引きちぎった。
するとやっ

「仲間が、第一位が無能力者に負けたから、俺たちでもやれるんじゃないかって」

：アホだこいつら。五十樹は別に能力を失ったわけでも何でも無い。
い。

山ほどの準備と上条がいたからこそその敗北だったのに。

ってかどこからその情報がもれた？

俺は足の拘束はそのままにして、腕の拘束を外してやった。そして

「IDと携帯を出せ」

と言うと、ポケットから素直に取り出した。

IDを『解析』しその携帯電話を地面に置いて

「おまえたちのグループの名前とお前以外の人数は？」

と聞くと

「カラミティで10人…です」

と答えてくれた。

そしてそのIDを目の前で『分解』して見せ、

「こうなりたくなかったら、ちよつとの間黙っててね」

と言い聞かせポケットからPDAを取り出した。そして加東に電話をかけた。

「ちょっと聞きたいんですけど、カラミティってグループと加藤さんは友好関係にありますか？」

？カラミティ？無い。あいつらはただのガキの集まりだから？

「そうですか、ありがとうございます」

俺は電話を切り、そいつの足の拘束を外してやる。

「今からお前たちのアジトに案内しろ」と命令し、連れ立って歩き始めた。

20分ほど歩いてやっとアジトに着いた。古い倉庫のようだ。裏口から入る前に『作成』したガムテープを男に渡し、自分で自分の足を拘束させた。

そして腕を後ろ手に拘束し、最後に口にもガムテープを貼ってやった。

俺は倉庫に入った。すると全員が一斉にこちらを見てきた。

「誰だおまえは？」

と聞かれたので

「中畑さんから伝言を預かってきたのですけど」

と答えてあげた。人数を数えるとちゃんと10人いた。よかったよ
く探す手間が省けた。

「で、なんて頼まれたんだ？」

「はい、第一位の部屋への襲撃は失敗しました、とのことですよ」

すると全員が一斉に笑い出した。

「やっぱりあいつにやあムリだった」

「だよなへたれだし」

「てかみんなで行って部屋荒らすってのはどう？」

「いいねそれ」

などと口々に言う。一部の人間の暴走かとも思っていたが、全員
有罪の方が面倒が無くていい。

俺は右手にサイレンサー付きの銃を『作成』し、無言で全員の腕や足を撃っていった。

「ぎゃー」だの「いでえ〜」だの「助けてえ〜」だの、口々に叫んでうるさい。

そして銃を『分解』し、特殊警棒を『作成』した。

そして一人ずつ腕や足を警棒で殴っては治し、殴っては治しを繰り返した。全員に7回ずつ繰り返すと、誰もしゃべらなくなった。

やっぱり静かなほうがいいね。俺が倉庫に入ってきた時とは全く違い、皆が虚ろな目になっている。ゾンビみたいだ。しかも寝起きなの。

俺は床に転がっていたジュースの缶を『分解』して、男たちを見回しながら言った。

「アクセラレータに何かしようとしたら、また来るからね。あ、あと、アクセラレータに何かをしようとしてるやつらがいたら、そいつら潰してて。」

知らなかったとか努力したとかは通用しないからね。もし約束破ったら、このジュースの缶みたいに消しちゃうから」

そう言い残して、俺は倉庫を出た。そして扉の外に待たせておいたピアス人間の、口のガムテープだけ外し、ピアスを引きちぎってできた傷を治してやり、家路についた。

家へ着くまでに、加東にもう一度電話をかけて

「第一位にちよっかいをかけようとしたカラミティが、何者かに襲撃を受けて、ボロボロにされたって噂を流してもらえませんか？」

と頼むと、加東は快く引き受けてくれた。他に襲撃を考えているやつらがいても、あの連中を見れば少しは躊躇する人間も出てくるだろう。

俺は足を止め、これじゃあダメだと考えを改める。

そして目的地を変更した。

33 掃除の話その2 (前書き)

引き続きグロ注意です

33 掃除の話その2

30分後、俺はとある高級マンションの一室にいた。

「今日はどうした？」

アッシュがコーヒーを2つ手に持って歩いてきて、ソファアに腰掛ける俺に1つ手渡し、向かいのソファアに腰掛けた。

「実験が無事終了した報告と、それと1つ頼みたいことがあります」

「話してみろ」アッシュが目を細めて、少し厳しい顔つきになった。

「最近、第一位がレベル0に負けたという話は聞いてますよね？それを機に動き出してるゴミの情報が欲しいんです」

「…それを聞いて襲撃でもすんのか？」と聞いてきたが、すぐに「まあいいか」とテーブルに置かれているパソコンを操作しはじめた。

「いま手元にある情報では3組織だな。うちに武器を買いに来た。」

お前の端末に送ってやるから携帯出せ」

俺はPDAを出しアドレスを教えた。そして受信した情報を確認し、深く息を吐いた。

「アッシュさん、こいつらはなぜこんなバカな行動をしているんでしょう？第一位は能力を失ったわけでもレベルが落ちたわけでもないのに」

「さあな、俺にはわかんねえわ。まあただ単にバカなのか、それとも裏で？今なら勝てる？って煽^{あお}ってるやつがいるのか」

「そうですか。ここで武器を買って行ったってことは、結構な重火器で武装してるんですか？」

「いやいや、やつらはそこまで金持ってるわけじゃ無いからな。そいつらに売れたのは3つの組織合わせて、たかだかハンドガン十数丁だけだ」

「わかりました。あ、それと、できれば支払いは後日ってことには…」

「まあ手ぶらで来たからそんなこったろうとは思ってたよ」アッ

シュは表情を崩した。そして「それに」と続ける。

「手ぶらで来るくらいに急いでるんだろ？まあ実験終了祝いって事で後払いにしておいてやるよ」

そう言ってニカッと笑った。アツシュ…使えない男とか思ってたゴメンよ。

あんたちゃんと利用^{使える}できる人間だよ。アタマに血が上りすぎて、カバンを途中で『作成』してくるの忘れてたんです。

「だけど丸腰で行くのか？」

アツシュが尋ねてきた。俺は考え込む。他人に自分の能力を教えるのは避けたい。

「おいおいここには山ほど武器はあるんだぜ？遠慮せずに持って行けよ」

ありがたい方向に、アツシュは勘違いをしてくれた。俺がアツシュに前金も払わずに武器をもらって行くのを遠慮していると思ったみたいだ。

「ありがとうございます」

俺は深く頭を下げた。人間関係はイメージだけで大抵はなんとかなる。心の中なんて見えないしね、能力者なら別だが。

「じゃあちよつと待ってるよ」

アッシュはそう言い残して奥の部屋に入って行った。戻ってきたアッシュは、手にリュックサックを持っていた。

テーブルに置き、中身を出しながら説明してくれた。

「とりあえずお前が前に買った銃とサプレッサー、それと予備にもう一つ同じ銃だ。あとは予備のマガジンも6に、スタングレネードも6、用意した」

俺はスタングレネードを手にとった。カンコーヒーみたいな外見だ。

「スタングレネードって、あの音と光で相手を無力化するやつですよね？使う時の注意点があります？」

「そうだな。まず横の握りを握ったまま上の栓を抜く。抜いて投げ

れば約5秒後に発動する。だから投げたらすぐに物陰に隠れて、目を閉じて耳を塞げ」

「わかりました。それと今後第一位に敵対する人間の情報が入ったら、逐一教えてもらえませんか？武器を売った後でいいんで。

あ、あとアッシュさんの電話番号教えてもらえませんか？次からちゃんと連絡してから来たいので」

「両方おしえてやるよ。あんまり他人に教えたくはないんだけどな。まあお前ならそろそろいいか」

そう言って俺のPDAに送信してくれた。「ではちょっと掃除してきます」そう言って立ち上がり、背を向けた。

「俺は何でも屋だからよ、客がやることに口出しはできねえ。だから、まあ、気をつけてな」

後ろからそう声が聞こえた。

PDAを見ながら、一つ目の標的のアジトに到着した。太陽は完全に落ちていた。そこは古ぼけた病院だった。

確かにベッドはたくさんあるから、寝床としては重宝するんだろ

うな、などと考えながら中に入っていくと、ひとつの部屋から明かりが漏れていた。電気は通ってるのか。

PDAを見ると敵は最大で7人と書かれていた。

俺は扉の前まで来ると、スタングレネードの栓を抜き、扉を開けて中に放り込んだ。そしてすばやく身を隠し、目を閉じ両手で耳を塞いだ。

部屋の中から、パシュツと音がしたので、銃を右手に持ち、部屋に入った。

そして1、2、3と打った人数を数えながら銃を撃った。6人まで撃ち、念のために全員の右肩をまた数えながら撃っていた。

その時自分の腹がとても熱くなっていくのを感じて左手で触れてみた。すると真っ赤な液体が手にべっとりついていた。

左手で『操作』して治し、後ろを振り向くと、男がひとり銃を構えて震えたままこちらを見ていた。

「だっ、誰だよおまえ！なにしてんだよ！」

それには答えず、「7」と銃を撃った。そして先ほどと同じように、『作成』したガムテープで手足を拘束し全員を治療したあと、

口も塞いだ。

うるさいのはゴメンこうむりたい。

そのあと部屋の中を見回してみると、ひとつだけ場違いなものがあつた。ボロボロに錆びた道具入れだ。

中を開けて見てみると、たくさんの工具が入っていた。

俺はペンチを手に取り男たちを順番に見回す。するとさきほど俺を撃ったやつと目があつた。

「学園都市の第一位に敵対するってことが、どういう事かわからなかったの？」

俺はその男の手を握り、男の強く握りこぶしを作っている指を伸ばそうとした。しかし全く開こうとしない。

俺はペンチでそいつの側頭部を殴りつけ、指を伸ばさせた。

そいつはガタガタと震えながら「んゝんゝ」となにか喋ろうとしていた。わかんねえよ、日本語で喋れ。

「悪さをしたら、おしおきしなきゃね」

俺は人差し指をペンチで強く握った。「んゝゝ」と男が叫び、涙を流し始めた。あれ？予想では簡単にパチンと潰せるはずだったのに。

今後は握力を鍛えよう。ペンチを『解析』したあと放り投げて他の男たちを見た。

そして特殊警棒を『作成』し、肉体言語でお話を始めた。

とりあえず満遍なくお話を終え、最後に、カラめ？カラも？カラなんとかと同じように、？第一位を敵に回したらまた来ること。第一位の敵を見つけたらそいつらを潰すこと？などを伝えて病院を出た。

34 掃除の話その3（前書き）

グロ注意の話の最後です。

34 掃除の話その3

2つ目の組織を潰した時には、もう翌日の昼前になっていた。

時間がかかった理由は、アジトまで遠かった事と、相手が15人と多かったこと、アジトの内部が入り組んでいたことが原因だ。

そこではスタングレネードを使い果たし、4発も撃たれた。まあスタングレネードは既に『解析』済みだし、即死じゃなければ能力で治療が可能だから問題ない。

両手を同時に吹き飛ばされない限りは。クローンを8000体以上蘇生した経験が、こんなところで生きてくるとはね。

最後には、バリケードを築いて防戦に徹しようとしていたので、そのバリケードをRPG-7で吹き飛ばした。

一人だけ爆風に吹き飛ばされて打ち所が悪かったのか、治療しても起きなかったので、AEDで起こした。

そろそろ体力も限界だったので、ホテルで仮眠をとることにした。目に付いた簡易ホテルに行くと身分証の提示を求められたので、先日学校に行ったときに受け取った学生証を見せた。

すると「未成年者はお泊めできません」と断られた。子供って不便だ。

しょうがないので、ネットカフェに行って軽く食事をとってリクライニングチェアで寝た。

ネットカフェを出ると、15時を過ぎていた。そして3つ目の組織のアジトに向かった。

3つ目は、あるクラブのオーナーが代表だった。俺はその店の裏口に回り、リュックを『解析』したあと『分解』した。

そして頑丈そうな扉の横にあったインターホンを押し、「代表に、第一位についてお話があります」と話すと、扉が開いた。

そのまま開店前の店内を案内されるままついていき、地下の大きな扉の前まで来た。そこでボディーチェックをされた後、部屋に通された。

部屋には立派な応接セットとその奥に大きな机があり、その机の高そうな椅子には、茶髪の20歳くらいの男、両脇には屈強そうな黒服の男が2人立っていた。

「それで、第一位に関してどんなことを聞かせてくれるんだ？」

代表らしき男が、椅子にふんぞりかえりながら尋ねてきた。

「その前に、なぜ第一位を狙うのか教えてもらえませんか？」

「だまれよクソガキが！てめえは聞かれたことに答えてりゃいいんだよ！」

怒鳴られた。ビククリしたよ。そんなに沸点が低くて、組織のトップなんてできるのかな？と心配になるよ。

「ごめんなさい」

俺は両手を腰の後ろにまわし、頭を下げた。

そして両手に銃を『作成』し、頭を上げるのと同時に、黒服二人を撃った。

「てめえどこのもんだ！」

また怒鳴られた。耳が痛い。男がゆっくり右手を動かしたので、右肩を撃っておいた。

そして扉のほうに歩いていき、部屋の鍵を閉めた。

「こんなことしてただで済むと思ってんのか！」

そんなに怒鳴るなよ。何歳児だ？それにしても、誰も部屋に入ってこないってことは、きちんと防音設備がついてるってことだね。

クラブってそんなに儲かるのかな？

「ただで済むように話し合おうよ」

俺は笑顔でそう言うと、机を回りこんで男に近づいた。

すると最初に撃った黒服の腹部が赤く染まっていたので、このままでは死ぬと思った心優しい俺は、手足を拘束した後、治療してやった。

みんな俺の優しさを見習えばいいのに。

もう一人の黒服も拘束・治療をした後、代表の両腕を、椅子の肘ひじにガムテープで固定した。

「こんなことしてただで済むとおもうなよ！」

それさっきも聞いたよ。語彙力が小学生並みだな。

俺は『作成』したアーミーナイフを男の左腕に上からつきつけ、
ゆっくりと体重をかけ始めた。

「やっやめやめろやめろおお」

腕にナイフをさしたまま手を離すと、ナイフは腕を貫通してゴム
製の肘掛ひじかけにまで刺さっているようだ。

俺は男の口にガムテープを貼り付けた。もっと早く貼っておけば
よかった。

「なんで第一位を狙うのか話す気になった？」

男は俺を睨みつけてきた。疲れたから早く家に帰りたいのに。

俺はもう一本ナイフを『作成』し、男の左手の甲にあてがった。
すると男はすばやく手をグーからパーにした。おお話が早い。

そのまま甲にナイフをゆっくり沈めていく「んゝんゝんゝ」と男は
涙を流し始めた。

そして手をパーにした震える手を左手で掴み、右手でペンチを『作成』した。

男がバタバタと暴れだしたので、左腕に刺していたナイフをゆっくり抜いて、そしてもう一度ゆっくりと同じ場所に刺した。

男がおとなしくなったので、小指を軽くペンチではさむと、男がまた「ん〜ん〜」と叫ぶので「話す気になった？」と聞くと、何度もうなずいた。

口のガムテープを剥がしてやると、早口でまくしたてた。

「ハクをつけるためだ。無能力者に負けたなら、俺たちにだって勝てるハズだからな」

ハク？ ハク。ハクねえ。

「んんなものために襲うのかよお！」

俺は怒鳴り、左手で相手の髪を掴み、右手のペンチで、相手の左耳を潰した。

そしてギャーギャーと男が喧しく叫ぶので、左手で警棒を『作成』し、男の鼻に全力で叩きつけた。文字通り鼻っ柱を折ったのだ。

「学園都市の第一位を狙って、ただで済むと思った？」

さきほどと同じセリフをまた言った。べ、別に語彙が少ないからじゃないんだからね。

いつのまにか二人の黒服が目を覚ましていて、真っ青な顔でこちらを見ていた。

「相手して欲しいの？」

右側の黒服に話しかけると、目を逸らされた。

さ、寂しくなんかないんだからね。目の前にちゃんと代表オモチャがあるし。

なんだか面倒になってきたので、話しを終わらせることにした。

男たちの目の前で、『作成』したナイフやペンチを一つずつ『分解』していく。

「次に第一位にちよっかいをかけようとしたら、君たち全員いままみたいに消しちゃうから」

そう言う代表は大きくなずいた。

「あ、もし他の連中が第一位を狙ってたら、そいつらも排除してね。他の連中が狙ってたのを知って何もしなかったら、努力はしたとか関係なく消しに来るから。寝込みを襲われたりするの嫌でしょ？」

するとまた何度もうなずいた。俺は傷を治し、拘束をといてやる。

代表はずっと左腕をさすっていた。そんなに触らなくとも、ちゃんと治したって。信用ないなあ。

最終的に全員の傷は治しておいたので、誰も怪我をすることもなく、平和的に解決できた。

平和が一番だからね。

そんな事を考えながら店から出てPDAで時間を確認しようと画面を見ると、？不在着信があります？と表示されていた。

34 掃除の話その3（後書き）

痛い話終了です。結構やわらかくしたつもりだったのですが、いかがだったでしょうか？最初はノコギリとかも使っていたのですが、修正しました。

次回は当然あの原作キャラが登場です。

35 怪人の話（前書き）

禁書の5巻を買ってきて、DVDも借りてきて書いてます。この話が好きすぎて、ほとんど創作できませんでした。そして前回の口直しに。

35 怪人の話

あの実験終了から5日ほど経った4月のある土曜日の夜、五十樹は病院から家へと帰っていた。

「しかし今日はビビったわ。まさか病院にいつがいるとはなア」

五十樹が驚いているのは、思わぬ人間が病院にいたからだ。五十樹が8000人以上殺した相手、御坂美琴のクローンである。

そのクローンに

「誰かと思えばレベル0に殴られて気絶した第一位じゃないですか、とミサカは病院の白い壁と同化しそうなくらいのモヤシっ子にまづは軽く言葉のジャブをはなってみます」

と言われ、さらに

「ところでなんで病院にいるんですか？もしかして、もうずいぶんと経つのに、殴られた怪我が治らないのですか、とミサカは白モヤシの虚弱っぷりを思い、全力で哀れに思います」

などと散々言葉で^{なぶ}捌られ

「ここで前からカエルの手伝いしてンだよ」

と反論すると

「そんなこと知ってるに決まってるじゃないですか、とミサカは冗談もわかんねえのかよ一位の癖に、とやれやれ相手していると疲れるねえというジェスチャーをしながら首を左右にふります。やれやれ」

などと言われ、実験の時とは比べ物にならないくらいの殺意を持ったのだ。

「それにしても馬車馬みてエにこき使いやがって。ここには労基法がねエのかよ」

誰に言うというわけでもなくそうつぶやく。しかし充実感のある疲れだった。

「まあ殺すよりかはマシか」

そして周りの音を反射するように設定し、意識を記憶の深くに沈みこませる。

五十樹はこの三年間を思い出していた。いや、思い出さない日などなかった。

結果的に誰も死ななかったというだけで、実際に自分が行った、8235回の殺人が無かった事にはならないと考えていた。

「あいつならこんな考え一蹴するんだろうがな」

そうつぶやき、友人の事を考える。3年間ずっと街の裏側を駆けずり回り、実験を止めようとしていた藤田久遠のことを。

彼がいなければ実験は止まらなかっただろうし、自分も救われることはなかっただろう、と。

（多分あいつが俺にクローンを蘇生していた事を黙ってたのは、それを知っても俺の心の負担は変わらねエってわかってたからだろうなア。

事実いまだに考えこんじまってるしな。たまにキメエこと言い出すが、あいつとの生活を考えてっと、勝手にニヤけちまうしなア。こりゃあ俺も十分キメエな）

そのとき妙な気配を感じ、後ろを振り返った。するとそこには、小汚い毛布をかぶった女の子が口をパクパクと動かしながら五十樹の後についてきていた。

（なんだア、この怪人チビ毛布は）

そう思いながら未だに口をパクパクと動かし続けるその少女を観察する。そうして音を反射していたのを思い出し、能力の設定を元に戻す。

「いやゝなんというかここまで完全完璧無反応だとむしろすがすがしいと言うかでも悪意を持って無視しているにしては歩いてるペースとか普通っぽいしこれはもしかして究極の天然さんなのかなーってミサカはミサカは首を傾げてみたり」

まあよくもそこまで言葉が続くもんだと感心したが、^{かかわ}拘りあいになる必要も無いと考えた。

「くっだらねエ」

そうつぶやくと、五十樹はまた元のペースで歩き始める。

「さつきからミサカはミサカは自己の存在を激しくアピールしているのに存在全否定？」

するとさつきは聞き流してしまっていた、ある言葉が五十樹の頭に引っかかった。

「あア？…待て。ミサカだと？」

「おおっ、ようやくミサカの存在が認められてよわーい、ってミサカはミサカは自画自賛してみたり」

「おいオマエその頭からかぶってる毛布取っ払ってよく顔見せてみる」

そう言って五十樹は少女が被っている毛布に手を伸ばす。

「つて、えーッと、まさかこんな往来で女性に服を脱げと言うのはいささか大胆と言うかなんというか、ってうわっ」

五十樹が毛布を剥ぎ取ると、少女はあのクローン達と同じ顔をしていた。ずいぶん幼いが。

しかしそれよりも衝撃的だったのは、少女が真っ裸だったことだ。

五十樹は静かに毛布を元のように被せる。

そうしてまた家に向かって歩き始めた。少女も五十樹に続く。

「無反応ってのは結構傷つくかも。ミサカの検体番号は20001号で、妹たちの最終ロットとして製造されたんだけど、コードもまんま打ち止めで、本来は実験に使用されるはずだったんだけど、ってミサカはミサカは愚痴ってみたり」

少女は五十樹の態度を気にするように話し続ける。

「ところが途中で実験が打ち切られて途中で培養器から放り出されちゃって何だかチンマリしちゃってるのって、ねえ聞いている？」

少女は自分の声が五十樹にちゃんと届いているのか確認するように尋ねた。

「それで俺にどおしろってんだ」

五十樹は心底面倒くさそうにそう答えた。

「あなたは研究者さん達との繋がりもあるからコンタクトを取ってもらえないかなあってミサカはミサカは考えるわけ」

そんな少女の依頼を「他アあたれ」と短くキツパリと断った。

「いえーい速攻即答大否定、ってミサカはミサカはやケクソ気味に叫んでみたり。でも他に行くアテもないのでミサカはミサカは諦められないんだから」

少女はなおも食い下がる。その様子を見て、五十樹は諦めたかのように、家に向かって歩き続けた。

部屋の前に到着すると、少女は鍵がかかっているはずの扉を、もともと開いていたかのように部屋に入っていく。

「お邪魔しまーす、ってミサカはミサカは先手必勝」

少女は、入ってしまった者が勝ちだとしても主張するかのように、そう言った。

「おいオマエ俺が悪人だっつの忘れてねェか？」

五十樹は少女のあまりにも能天気な様子に、一応尋ねてみた。

「うーん、それは無いかなってミサカは否定して、やっぱりここでお世話になりたいかな、ってミサカはミサカは頼み込んでみたり…」

なぜかしりつぼみになっていく少女の言葉に、五十樹は再度尋ねてみた。

「なんでだよ？」

「誰かと一緒にいたいからってミサカはミサカは…」

その寂しそうな少女の声と言葉を聞き五十樹は、この少女はあの隣人の存在しなかった場合の自分の姿ではないのかと思った。

「勝手にしろ」

（まァ一晩くらいはいいだろう。どうせ嫌になってすぐに出て行くだろうからな）

五十樹はそう思い、しぶしぶながら了解を出した。

そうして少女はハイテンションなままベッドに向かって走ってい

く。

「わーいってミサカはミサカはベッドにダイブ。一応宣告してお
くけど、寝込みを襲うのはNGなんだからってミサカはミサ「寝ろ」
」

俺にそんな性癖ねエよ、と五十樹は心の中で思い、ソファで眠
りについた。

36 本当の話（前書き）

会話はほぼ原作通り（一部省略）です。

36 本当の話

「ふーん、人の寝顔って素直な表情になるものなんどすなーってミサカはミサカはエセ京都弁を使ってみたり」

五十樹が目を覚ますと、少女が彼の顔を覗き込んでいた。

「オマエまだいたのか」

五十樹は自分の頭をボリボリと掻きながら言った。

「おはようございます、ってかもうこんにちはの時間なんだけど、おなかですいたので何かご飯を作ってくれたりするとミサカはミサカは幸せ指数が30ほどアップしてみたり」

起きてすぐにこのマシンガントークはキツイ、そう思いながら五十樹は部屋を出て行く。

（マズいな、あいつに俺が女を部屋に泊めたつてのがバレたら、ナニ言われっかわっかんねエ。しかもガキだ。笑うのか、このガキを妬^{ねた}むのか、性犯罪者だアとか騒ぐのか。予想もつかねエぞ）

「って台所はそっちじゃないんだけど」

「外に食いに行くぞ」

五十樹は足早に歩いて行く。

（こっから一刻も早く離れねェと）

「えーってエプロン装備の家庭的一方通行が見られると思ったのに、
ってミサカはミサカはぶーたれてみたり」

（そんな場合じゃねェんだよ、デケエ声もやべェんだ）

五十樹は相槌も打たずに歩いて行く。

近所のファミレスに入り、案内された席に座っていると、唐突に
少女が五十樹に話しかけた。

「あなたの髪って天然さん？ってミサカはミサカは尋ねてみたり」

「俺も詳しいことはわっかんねエけどよ、体の色素ってのは紫外線から身を守るもんだろうが。俺は余計な紫外線を全部反射しているわけだから体が色素を必要としてねエってことだ」

五十樹が自分の前髪をいじりながら答えた。

「一応理屈とかあったのね、ってミサカはミサカはビックリしてたり」

少女は培養器の中で妹達から送られてくる情報を受け取りながら、ずっと気になっていたのだろう。ようやくその答えを知ることができて満足そうだ。

「アイツ…天井亜雄？」
あまいあお

五十樹はファミレスの窓から、見覚えのある男の姿を見つけ、立ち上がってそうつぶやいた。

「なに見てるのってミサカはミサカは聞いてみたり」

少女は五十樹がいきなり立ち上がったのを疑問に思ったようで、率直に尋ねてみたのだろう。

「あア？オマエの今一番の目的ってのをちっとは思いついてみる」

五十樹は彼女の能天気さに少々腹を立て、テーブルを叩いた。それに対して少女は、どこまでも能天気に答える。

「なにご飯を食べることだけどってミサカはミサカは即答してみたり」

（まアテメエがいいなら、俺は一向に構わねエがな）

そんな少女に五十樹は呆れかえり、だまってそっぽを向いた。

「おおーあったかいご飯ってこれが初めてだったり、ってミサカはミサカははしゃいでみたり」

少女はテーブルに自分の頼んだ料理が来たにもかかわらず、なかなか食べようとしない。

「ナニやってんだオマエ」

五十樹はそんな少女の行動が理解できずに尋ねてみる。

「いただきまーすっていうのをやってみたーって、ミサカはミサカは希望を言ってみる」

五十樹は脱力し、頬杖をつきながら投げやりに言う。

「自由」

その言葉を聞いた少女は、元気よく手を合わせて、大きな声で「いっただっきまーす」と言い、食べ始めた。

「めちやくちやおいしーってミサカはミサカは評価してみたり」

少女は食器を扱うのが苦手なのか、不器用な様子で料理を食べ続けた。

「あア？こんなもん冷凍とかフリーズドライとかのオンパレードじゃねエか」

五十樹は当然のことだと言うように、そう指摘する。

「誰かと一緒に食べるご飯って、何だか感覚が違うってミサカはミサカは精神論を述べてみたり」

五十樹にはその意味が十分に理解できるので、しばらく黙ったままになった。そして当然避けては通れない、そして聞かなければならない事を少女に聞いた。

「オマエどういう神経してんだ？俺がお前らにナニやったかしらねエ訳じゃねエだろ？」

五十樹がそう尋ねると、少女は食器をお皿に置き、五十樹をまっすぐに見つめて話し始めた。

「ミサカは全てのミサカたちと脳波リンクで繋がっているのでもちろん全て知ってるってミサカはミサカは言ってみる」

「だったらなんで平然としてられんだよ」

五十樹は当然の疑問を投げかけた。

「ミサカはミサカの価値を教えてもらったからってミサカはミサカは断言してみる」

少女は背筋を伸ばし胸を張って答えた。

「ミサカ単体が死んだとしてもミサカネットワークが消滅することはありません。だけどミサカ単体の命にも価値があるんだって、ミサカのためにあの人やお姉さまは命がけで助けに来てくれたって、だからミサカはもうこれ以上一体だって殺されてやらないってミサカはミサカは考えてる」

少女は宣言した。それは自我の目覚め、それは少女たちにとっての大きな大きな第一歩だった。

「あなたがいなければ実験が立案されることもなく命を注ぎ込まれることもなかったってミサカはミサカは感謝してみる」

少女は尚も五十樹の目をまっすぐ見たまま続ける。

「感謝だァ？　なんだよそりゃ俺がお前らを殺しまくったことに変わりはねエだろうが」

五十樹には少女の言葉が理解できなかった。もしできていたならば、毎日毎晩あの実験のことを思い出したりはしないだろう。頭がよいからこそ忘れることのできない記憶。それに縛られ続けている。

「あなたは実験の時なんどもミサカたちに話しかけている。ではその目的は？　ってミサカはミサカはわかりきった質問をしてみる。

あなたの言葉はどれもこれもミサカを罵倒する言葉ばかり。だけでもし否定して欲しくて言っていた言葉だったとしたら。

あなたの言葉はいつも戦闘の前に告げられていたってミサカはミサカは思い出してみる。まるでミサカを脅えさせるように、ミサカにもう戦うのは嫌だって言わせたいようにってミサカはミサカは述べてみる。

ミサカたちはあなたのサインに気づくことができなかった、もし仮にミサカが戦いたくないって言っていたら？　ミサカはミサカは終わってしまった選択肢について考えてみる」

少女の長い長い独白を聞き、五十樹は席を立つ。それは実験を続けることを強制されていた五十樹が、心の底で願っていた事そのものだと五十樹は気づかされたためだ。

「つきあってらんねェ」

そう言い残し、テーブルに背を向けた。見透かされてそして気づかされた。五十樹にとってこの場は、とても居心地の悪いものなのだろう。

すると五十樹の後ろで急にドンと音がなった。五十樹はその音の原因を知るべく、後ろを振り向いた。すると少女がテーブルに突っ伏し、息も絶え絶えに話をしている。

「ミサカはまだ肉体的に未成熟だから、本来ならまだ培養器から出ちゃいけなかったんだけどってミサカはミサカはため息をついてみる」

そして五十樹がテーブルの席についていないことに気づいた少女は、朦朧とする意識で五十樹に声をかけた。

「あれ？どっか行っちゃうの？ってミサカはミサカは尋ねてみる」

五十樹は事も無さげに「食欲なくなっちゃったわ」というと店の出口に向かおうとする。

「ご馳走様っていうのも言ってみたかった、ってミサカはミサカはため息をついてみる」

「そオカよ、そりゃ残念だったな」

その言葉とは裏腹に、五十樹の目には強い意志の光が輝いていた。

五十樹は店を出た足でそのままある場所へと向かう。五十樹にとっては近づきたくも無い場所、あの実験を行っていた研究所だ。

人気のない研究所の中を歩き回り、知り合いの研究者を探し当て、書類の山となっている机の上を漁る。

「なア芳川、妹達シスターズの検体用マニュアルってのはどれだ？あとその設備も借りて行くぞ。実験の凍結で未払いになってる契約料と思ってもらっていい」

彼女の方を一瞥いちべつもせず書類を漁る五十樹とその言動に、彼女は疑問を感じた。頭が混乱する中、思ったままの言葉を吐いた。

「どういうこと？私が気づいたのは数時間前。今も彼女たちの人格データのバグを洗い出している所よ。いえ、人為的な命令文だからウィルスって言ったほうがいいかしら」

彼女は何をではなく何故と尋ねた。

「…待て。ナニ言ってるんだオマエ」

今度は五十樹が混乱する番だった。自分がやろうとしていることと、彼女が言っていることが同じ事象をさしている、そういう気がしたのだ。

五十樹は少女の体調の不調は、まだ未成熟な状態で培養器を出たためだと思っていたのだ。だから簡単に治るだろうと思っていた。

しかし彼女の話の聞くと、事はそんなに単純なものではない雰囲気だ。

そんな五十樹の様子を見て、彼女は説明を始めた。

・最終信号は妹達シスターズの上位固体であること

・最終信号の頭にウイルスが打ち込まれていること

・そのウイルスが起動すると、妹達シスターズに、ネットワークを介して人間たちに無差別攻撃を加える命令を出すこと

・その起動予想時刻が今夜の0時であること

・そしてこれらの犯人は天井亜雄あまいあおであること

それらを説明し、天井亜雄あまいあおを捕まえることと打ち止めを救うこと、どちらを取るかの選択を五十樹に迫った。

五十樹の目の前に、天井あまいの情報と打ち止め的人格データが入った装置、その二つを並べたのだ。

五十樹は一方を手に取り、研究所を出て行った。

37 決意の話

そして五十樹は打ち止めラストオーダーの人格データが入った装置を手に、夜の街を走っていった。

五十樹は少女を救うことを選んだ。

「しかし天井を野放しにしておくこともできねエな。しょうがねエからあいつに頼むか。

そオ言えば、あいつ何でも屋と知り合いだっつてたよなア。その何でも屋に天井の場所を探してもらって、あいつに追ってもらうか」

五十樹は走りながら友人に電話をかける。しかし無情にも電話は繋がらなかった。

「クソっ、なんでこんな時に出ねエンだよ」

五十樹は打ち止めラストオーダーと別れたファミレスに到着した。しかしそこにいるはずの少女の姿は無かった。店員の話では、白衣を着た少女の肉親を名乗る男が連れて行ったとのことだった。

（クソつたれ、天井の野郎か）

そう考えた時に、彼のPDAに電話がかかってきた。画面を見るとあの友人からだった。

S I D E 久遠

PDAを見ると五十樹からの着信があった。すぐに電話をかけると

「緊急事態だ。研究者の天井亜雄あまゐの場所を探してくれ」

と言われた。俺は電話を切り、アッシュに電話をかけ

「すみません、天井亜雄あまゐって研究者の居場所を探しているんですけど、わかりませんか？」

と早口で伝えた。

？ちょっと待ってろ。…そいつの車の位置をGPSで掴んだ。いまデータを送ってやるからな？

と言われ、PDAにメールを受信したのを確認し「ありがとうございます」
いました。その車が移動したら、またデータ送ってください」と電
話を切った。

そして五十樹にその情報を転送して、俺もその場所へと急いだ。
なにが起こってるんだ？

俺は路上に止めてあった自転車を『解析』『作成』し、チェーン
を『分解』して漕ぎ出した。

SIDE 五十樹

10分も経たねうちに、あいつからデータが送られてきた。お
お早エえな。こっからそんな離れてねエな。首洗って待ってろよ、
天井イ！

俺は夜の街を飛ぶように走った。

見イつけたぜエ、天井亜雄。車の助手席にはあのガキが乗ってや
がる。俺と目が合うと、いきなり車でつつこんできやがった。

おいおいオマエ俺の能力忘れたのかア？寂しいねエ。

俺はベクトルを操作して、ガキに衝撃が行かぬエようにして車を止めてやった。車のボンネットがへしゃげてやがる。

「さアて、どうすっかなア」

俺が脅してやると、アイツがドアをこじ開け、外に逃げようとしやがった。だからもう一回ベクトルを操作して、車のドアで挟ンでやった。

逃げられるとでも思っテンのかア？あいつはその場に崩れ落ちた。

「落ち着けよ中年、みっともねエつつうの」

俺はそう言い、助手席側に回り込み、芳川に電話をかけた。

「芳川か？ガキなら確保したぜ」

一応報告しておく。このガキに関しちゃ俺より詳しいからな。

「おい、クソガキの顔に電極みてエのがついてンぞ？」

？おそらく妹^{シスターズ}達の身体検査用キットだわ？

俺はその電極の繋がった先のパソコンの画面を見た。

「BC稼働率ってのは？」

？それは脳細胞の稼働率ね。Brain CellでBC。？

「脳細胞の稼働率？」

「なア、この機械を使ってウィルスを駆除できねエのか？こっからじゃ連れて帰シのに結構時間がかかるし」

？無理ね。書き込むには専用の培養器と学習装置とが必要なの？

電話の向こうから、強い風の音がしやがる。

「おいオマエいま」

？そう、私は今そちらに向かっているとこよ。培養器と学習装置を持ってね。君が研究所へ引き返すよりは、時間を短縮できると思っただのよ？

「オマエの方はウィルスコードの解析は終わってンのか？」

？8割り方ってところね。午前0時までには間に合うわ？

「つたく、どこまで手間かけさせやがるつもりだこのクソガキ」

いきなりガキがわけわからんねエ言葉をしゃべりだしやがった。な
んかのプログラムか？

「おい芳川、これはどオなってやがる」

？ちよつと黙って…、やっぱり、そうなのね？

「おい、何が起こってやがる」

？ウィルスコードよ。もう起動準備に入ってるんだわ。タイムリミ
ットまであと4時間もあるのに。まさかダメー情報だったの？

：聞きなさい一方通行、アクセラレータ嘆くのはまだ早いわ。君は手を打たなけ
ればならない。？

「手エ？まだ手があンのか？」

？もうわかってるはずよ、君にできることはただ一つ、打ち止めを処分しなさい。その子を殺すことで世界を護るのよ？

殺すのか？こんなどこにでもいそうな、ただのガキを。殺さねエでいい方法は絶対にある。それができなくて、なにが第一位だ。電話の向こうの声は無視して考えるか。

「研究所で受け取ったデータスティックの中身は感染前のガキの人格データ」

クソっ、俺にできるのは他にねエのか。俺にできるのは血流を操作したり生体電気を逆流させたり、生体電気？

「おい脳内の電気信号さえ制御できりゃあ学習装置が無くともあのガキの人格データをいじくることができンじゃねエのか？」

？…まさか、君自身が学習装置の代わりをしようの？無理よ君の能力は…？

そこまで話して、電話を放り投げた。やるべきことは決まった。だからあとは実行するだけだ。

「できねエってことはねエだろ。血流操作ができんだから生体電気も操作できねエわけがねエ。できるさ、俺を誰だと思ってやがる。感染前のデータと照合して、余分なデータを消しちまえばいいだけだろうが」

俺は研究所から持ってきた、人格データの入った機械を作動させ、記憶した。そして目の前のガキの額に手を当てて、記憶したデータと実際のガキの頭ン中との差異を確認した。

「簡単なんだよ」

そう自分に言い聞かせた。

「まったくこのクソガキが。人がここまでやってんだ。今さら助かりませんでしたじゃ済まさねエからなア。余分なデータを消しちまえば、こいつは一週間前の状態に戻るってわけだ。俺と出会う前のな」

まア寂しさはあるが、こいつが加害者になるよかアましだろ。

「コマンド実行、削除、削除っ」

クソガキがわけのわからねエことをつぶやきながら暴れ出しやがった。大人しくしやがれ。

ウィルスと一緒に、何を排除してンだろうなア。だからなんだ、忘れちまったほうがこのガキのためじゃねエか

「削除が終わるまで残り10秒、楽勝じゃねエか」

やっと終わりが見えてきやがった。

その時、天井の野郎が立ち上がってこっちに銃を向けてきやがった。今はやべエ。だからもうちょっと待ちやがれ。

冗談じゃねエぞ、こっちは電子顕微鏡クラスの精密な作業をしてんだ。反射にさける演算能力なんぞ残ってねエンだぞ。

さっさとこんなガキから手を離して、反射を取り戻せば、核兵器だろうがナンだろうが、傷一つつきやしねエンだからよ。

…だがそれは無エ選択肢だ。

そんな時、俺の右の方からデッカイ声が聞こえやがった。聞き覚えのある声だ。

「天井いいいゝ！」

アイツは銃を天井に向けて近づいて来る。

ソンでめちゃくちや長げエ10秒が過ぎた。

「不正な処理により、上位命令文は中断されました。これにより検体番号20001号は再覚醒します」

俺は助手席側から車に入り、運転手席の外にいる天井にゆっくり近づいて行った。銃を撃ってきたが、当然反射されてあいつの銃に弾が戻っていった、ソんで銃が暴発した。

「これからどうすっかなア」

体ン中がムチャクチャ熱ちィ。今ならなんでもできるような気がするぜ。

俺は天井の前に立ち、右手を押さえている天井を見下ろしてた。そしたら天井の野郎が俺に話しかけてきやがった。

「な、なにをしているつもりなのだ？今さらお前のような奴が」

こいつの言う言葉はいちいちムカつきやがる。同属嫌悪ってやつかなア。

「わかってンだよ、そんなもん。こんな人間のクズが、今さら誰かを助けようなンざバカバかしいってことくれエよオ」

8000人以上殺したンだ。俺個人でなア。世界レベルの殺人鬼だア。

「全く甘すぎだよなア。自分でも虫唾^{むしず}が走る。…けどよオ、このガキは関係ねエだろ」

（背後にクソガキが静かに寝てる気配がする。まったくノンキなもンだぜ）

「たとえどれだけ俺たちがクズでもよオ！それでこいつが殺されてイイって事には、ならねエだろうがアアア！！」

俺は、俺みたいなクズは、いつかどっかの誰もいねエ場所ですっそりと死ぬンだと思ってたよ。だが決めた。ガキの頭をいじくつて、なンとかなったとわかった時にな。

実験のことで後悔すんのは今日で最後だ。

漠然とした思いだったんだが、俺と同じようなクズを見て決心がついたわ。

「俺はテメエみてエにならねエ！」

あア、殺しちゃったって事実が変わンねエ。今さら見て見ぬふりもしねエ。殺した何倍もの人間を助けてやる。天井、俺はテメエとは違う。独りじゃねエからな。

アイツもすぐ近くまで歩いてきていた。そしていきなりアイツが叫んだ。

「天井ィー！」

天井がアイツの方を向くと左手でポケットから銃を取り出そうとした。その瞬間、アイツが天井を撃った。短く2発。弾は2発とも胸に当たり、地面にうつぶせに倒れた。

そして血の池が広がっていきやがる。

「あ、銃で撃たれそうになったからって、銃で撃ち返したら俺の銃の出所聞かれるよね？」

「まアそりゃあそうだろうなア」

なんつつか、こいつはノンキだ。どオやら助ける気はねエみてエだったのはわかる。助けるよりもどオこの状況を誤魔化そうか悩んでいやる。

するとこいつは天井の背中に手を置き、天井を『分解』しやがった。

「ふう、これでよしと」

なんでかすンげエ笑顔なんだがこいつ。まア俺も天井に撃たれたからなア、別に死ンでも気にはしねエが。それにしても人間一人が丸々消えるってのは、なんかおっかねエな。

そしてしばらくして芳川が来やがった。芳川が「天井は？」と聞くと、こいつはなんのためらいも無く「星になった」と答えやがった。

な・っ・た・じ・ゃ・ね・エ、し・た・ん・だ・ろ・う・が・ア。

芳川はそんなアイツをしばらく見て、無言でガキを車に乗せて帰って行った。

知ってつか天井イ？独りじゃ無けりゃあよ、横に誰かがいればよ、大抵の事はできるような気がすんだよ。

俺も帰るか。

数日後、芳川から聞いた話では、あのガキは芳川の知り合いの家に、芳川と一緒にやっかいになっているらしい。

ガキはガキらしく、日向ひなたにいりゃあいい。俺の近くなんかじゃなくな。

37 決意の話（後書き）

次回、？ゴッドハンド　　く神の手を持った男、更科五十樹く？は
始まりません。一応念のために。

久遠は、？天井の野郎お五十樹を銃で撃ちやがった？↓？よし殺
そう？、くらいのことしか考えていませんでした。

芳川さんの出番が大幅にカットされました。ファンのみなさまご
めんなさい。

38 そっくさんかも（前書き）

今回から第4章に入ります。そしてまたオリジナル展開に戻ります。

38 そっくさんかも

4月も終わろうとしていたその日、約2年半ぶりに学校で授業を受けて来た。5月からのほうがキリがよかったが、あまりにもヒマだったのだ。

中学での顔見知りとは「久しぶり〜」とか「何やってたんだ？ 女か」とかそんなどうでもいい話をして、すぐにまったく関係構築した。ホントに心底退屈だ。

しかし午後の授業が終わると、俺だけ教師に計器類のたくさんある部屋に連れて行かれた。

なんか他の場所と隔離されているような、学校の奥の奥の部屋に。

そして帰宅。

「五十樹い〜」

俺はさっそく五十樹の部屋へとかけこんだ。五十樹はソファで医学本を読んでいた。病院から帰って来てたのか。

「聞いてく俺ってとうとうレベル4になったんだよ」

そう、奥の奥の部屋で、レベル判定を受けたらレベルが上がっていたのだ。

「それでナニがドオ変わったんだ？」

五十樹が聞いてくる。まあ当然だろう。俺はさっそく「じゃあ見ててね」とソレをやって見せた。

そして何を作るか少し考えて、適度に簡単に作れるものと考え、手の甲の上にナイフを『作成』した。

「：今までとどう違がうんだ？」

よくぞ聞いてくれました。説明してさしあげよう。

「今までは手の平からしか能力使えなかったから」

俺は胸をはって答えたが

「sonだけか？」

とリアクションは薄い。まあ確かに。俺もね、実は？こんだけかよっ！？とも思ったんだけど、無理やり自分のテンション上げてたんだよねえ。

考え込んでしまうと、際限なくへこみそうだったから。

「ええっと演算速度が大幅に上がったらしい。あんまり実感ないけどね」

ため息を吐きながら、正直に話した。

「おまえがイイんなら、イイんじゃねエか」

なんか投げやりだ！

「冷たいよ！でも不思議なことに、教師からはこの事は秘密にしてくれって言われたんだよ」

そう、あの奥の奥の部屋は、一般の生徒は全く立ち入る事ができない場所らしく、何重ものセキュリティが張り巡らされていた場所だった。

五十樹の実験を中止に追い込んだことで、秘密裏に命を狙われるならまだしも、秘密裏に検査を受けさせられた理由なんてわからない。

命を狙われるなんて嫌だけど。

「ンだそりゃ？」

五十樹も不思議に思うよねえ、そりゃ。

「理解できないけど、まあ俺も他人に自分の能力を教えたいとは思わないからいいんだけどね。だから俺はレベルは3のままってことにするし」

相手が敵にまわった時に、能力がバレてないのは利点だ。なんか最近いろいろあって、考え方が物騒になってる気がするけど。

「それになんか能力のことも内緒にしとけ、みたいなことも言われた。俺に関する情報も閲覧が制限されてるみたい」

そう言うとき五十樹も不思議そうな顔をした。麦野に頼んで調べてもらうか？でも？俺について調べてください？とか言ったら、爆笑

されるか、気の毒な子扱いされそうだしなあ。

まあ今ここで考えても答えがでるとは思えないので、そのことはアタマの隅に追いやる。

「そオカ」

五十樹はまた読書へと戻った。

「なアおまえ女作らねエの？」

五十樹が前置きもなく聞いてきた。ああやつとか。今まで待った甲斐があったというものだ。

「それってやっと学園都市の技術力で性転換手術を受けて俺と恋人に」

「違いエ全然違いエ！お前のアタマほんとに大丈夫か？」

ん？どこにそんなおかしな事があるんだ？今時自然に子作りしなくても、二人のDNAから子供を作ることなんて簡単なんじゃない？

あんなにたくさんのクローンを作ることができるんだし。

「なに不思議そうな顔してンだよ！オマエは学校に復帰したンだろ？
だったら山ほど女がいるンだろうが」

なるほど。五十樹の意図は十分にわかったよ。

「つまり俺と男同士の恋バナがしたいってことだね？なるほど五十樹も病院で好きな子できたんだ」

人間関係が順調なのはいいことだ。ちょっと寂しい気もするけど。

「話がゼンゼン全く違げェよ、俺に好きな女ができたわけでも、恋バナしてェわけでもねェ！」

なんか見落とした事柄があったかな？わからないから五十樹の言葉を待とう。

「つまり、だ。俺にばっか構ってねェで、女なりダチなり作れって言ってンだ」

「友達ならいるよ？」

裏の人たちばかりだけど。でもあの人たちは友達なのかな？

「どうせ裏の人間ばかりだろうが」

バレてる。さすが学園都市の第一位。

「必要になったらつくるよ。でも女かあゝ俺の好みは結構むずかしいんだよねえ」

「ほオ、一応聞いてやる」

「髪は真っ白で目が赤くて華奢きゃしゃな感じで目つきがちよっとキツくてでも本当は優し「俺じゃねエか、ってか優しくねエよ。」」

そう言って五十樹は少し考え込んで、「もういいわ」と再び本を読み出した。なんか諦められたみたいだ。それにしても、五十樹の表情が何やら苦虫を噛み潰したみたいゆがに歪ゆがんでる。

何か心配ごとでもあるのだろうか？

次の日の金曜日の放課後、俺は家に帰るために街を歩いていた。

通りには結構な人がいて、あまり早くは歩けない。週末だからかな？

すると前方に、人の流れを妨害する原因を発見した。真っ白な髪を後ろで三つ編みにした、身長が150センチちょっとの少女が、周りの人間に次々と話しかけていた。

少女の顔がこちらから見えた。あれ？そっくりさん？

S I D E 五十樹

まったく昨日のアイツの女の趣味を聞いて、マジでビビったぜ。俺に対する過剰な愛情表現？はいつも通りだったから、もう諦めたが。

てかこんな事に慣れちゃうってのも、かなりの重症な気イするがな。

部屋でせっかく医学書を読むことができでんのに、本に集中できねエ。

問題は俺の性転換を望んでることじゃねエ。俺じゃなくとも、俺

とそ・つ・く・り・な・顔・の・女・が・存・在・す・る・っ・て・こ・と・が・問・題・な・ン・だ・。

ふいに俺の家の玄関の扉が開いた。まアアイツだろうが。だがアイツと一緒に入って来た人間を見て俺は固まった。

「おい百合子ゆりこ、こんなところでナニしてンだ？」

そこには研究所に入って以来会うことが無くなった妹の百合子がいた。

「お兄ちゃん」

あいつが目には涙を浮かべて部屋へと入って来た。てか靴ぬげよ。

俺の目の前で百合子が泣き出すと、俺はどうしたもんかと頭を掻いていた。しかしフと視線を感じ、玄関を見ると、アイツがニヤニヤと笑ってやがる。こいつがいたんだった。

「いやゝ兄妹の感動の再会だねえゝ」

ニヤニヤとしながら部屋に入ってくる。

「街で偶然見つけて、五十樹を探してたみたいだったから連れて来た」

アイツは事も無げにそう言った。

ナンテコッタ。

38 そっくさんかも（後書き）

更科百合子はあの有名なネタです。

？百？合子と？五十？樹です。考えた人マジすげえ。

オリキャラヒロイン、この子のことを書きたくて、このSSを始めたのかも知れない。

レベル強度について、レベル4とは軍隊において戦術的価値を得られる程の力、とあります。久遠の能力は補給部隊として力を発揮することができるとでしょう。

39 困った事になったかも（前書き）

いつも読んでくださっているみなさま、本当にありがとうございます。

39 困った事になったかも

「ンで何しにこんなとこまで来てンだ？」

五十樹と百合子ちゃんはテーブルを挟んで二人ともソファアに座っている。

俺は飲み物の用意をして、台所から戻って来て二人の前にコーヒーとミルクの入ったポットと砂糖入れを置き、五十樹の横に座った。

「おに、アニキがぜんぜん連絡してこねェから探しに来たンだよ。18学区にいるって知ってたからな。まア生存確認ってやつだ」

そこまで話すと百合子ちゃんはコーヒーをそのまま飲んだ。

「苦ェ」

そう言って砂糖とミルクを入れた。五十樹ほどはコーヒー好きじゃないのかね？

「んでなンで今の時期なンだ？前から探してたンなら、どっかで会っただろうからなア」

五十樹もコーヒーを飲む。もちろんブラックのまま。

「5月から違う学校に編入するから、その前にけじめっていうか…」

百合子ちゃんの小さな体が、さらに小さく見える。そろそろ助け舟を出すか。

「二人とも落ち着きなよ。兄妹なんだし」

おお涙目の百合子ちゃんはいいね。これが保護欲求か。

場をもたせるためか、百合子ちゃんはまたコーヒーを飲む。そして五十樹は、少し低い声で言った。

「それよりもよオ、知らねエ男に着いていくって、ナニ考えてやがる！」

おお、考え方が？お兄ちゃん？だ。すんごい新鮮だ。こんな五十樹もいい！

「だってアニキの画像持ってたし」

「あア？俺は学園都市の第一位だぞ？俺の画像なんぞネットに溢れてンだろ」

「違げェよ、アニキの寝顔の画像だったから、そンだけ仲良いンだつて思ったンだよ」

五十樹に思いつきり睨まれた。

「いや、俺が持っていないって考える方が不自然でしょ？それにそのおかげでこうして会えたんだし」

五十樹は画像を消せともPDAを壊すから寄越せとも言わなかった。そうしてもすぐにまた撮るだけだとわかってるみたいだ。さすが。

五十樹が大きいため息を吐いた。最近ため息ばかりだね？幸せ逃げちゃうよ？

「さっき編入って言ったか。どこに行くンだ？」

百合子ちゃんは少し落ち着いたみたいで、

「常盤台中学」

と、答えた。

俺と五十樹は顔を見合わせて固まった。

「なんで常盤台なんだよ？」

「御坂さんがいるから…」

と少し照れながら百合子ちゃんが答えた。それを聞いて、五十樹は

「まずいな」

とつぶやいた。百合子ちゃんが不思議そうな顔をしている。おお首を傾^{かし}げてる今の姿、待ち受けにしたいっ！

とりあえずその方法は後で考えるとして、可能な限りオブラートに包んで百合子ちゃんに伝えた。

「いや俺と五十樹は、御坂美琴とあんまり仲が良くないんだよねえ…」

すると百合子ちゃんがいきなり立ち上がって

「おい御坂先輩にナニしやがった！」

怒鳴られた。俺たちが何かしたってのは、決定事項なんだね。五十樹は言葉を詰まらせている。

そりゃあそうだ。実験のことなんて話せるわけがない。だから俺が何とかせねば。

「大丈夫だよ、そう言うことなら俺が何とかするから」

五十樹が心配そうにこちらを見てきた。俺はとりあえず大きく肯くしかできなかった。

そんな感じで安請け合いしちゃいました。一体どうすっかなあ。

俺はそのまま五十樹の部屋を出て、お目当ての人間が通う学校近くまで来た。おっ、ちょうど校門から出てきた。これは幸先あきがいい。

他に二人と一緒にだが。

「やあ上条！」

俺が声をかけると、上条はこちらを見て、ビクッと顔をこわばらせている。

「藤田、一体なんのようだよ。アレはもう終わったんだろ？」

上条はそう言うのと、後ろに半歩下がる。

「いやああの時のお詫びをしようと思ってね。そういうわけだから、お友達のお二人さん、上条をちょこつとのあいだ借りてもいいかな？」

上条は両脇に立つ、二人の友人の顔を不安そうに見ている。

「んゝ用件の具体的な内容によるぜよ」

と金髪が言うので、仕方なくその場で話すことにした。

「上条に女の子を紹介しようかなあと思って」

そう言うと友人1と2に激しくつめよられた。

「なんでそないにかみやんばかり女子おなごと縁があるんやあ。ますますかみやんを渡せんくなったで」

「俺には舞夏うらやがいるから羨ましくはないにゃー。でもかみやんが幸せになりそうなら妨害するぜよ」

くそ、上条の目がちょっと輝いてるってのに、こんなところでこんな鉄壁の妨害を受けるとは。ならば。

「なに言ってるんだよ、二人とも。考えてみなよ。カップルができる原因の7割近くが友人からの紹介だよ？だから上条に恋人ができるイコール女の子を紹介してもらえるってことになるわけよ」

二人とも「おお」と驚いている。当然紹介で7割とかはでまかせ。信じられるっぽい数字を、適当に言っただけだ。

「どうよ？」

「「売った！」」

二人の声がハモった。よし、売買契約完了だな。

「じゃあ上条、ちょっと向こうで話そうぜ」

上条は大人しくついてくる。半信半疑という顔だ。ちょっと冷静になって俺のしたことを思い出しちゃったのかな？少し離れた公園のベンチに二人して座った。

「あの時はあんな事に巻き込んで、本当にわるかった。ただ三年の間、あいつが日に日に疲れ果てて行くのを見て、藁わらにもすがる思いだったんだ。本当にごめん」

俺は頭を下げる。すると上条は、「そんなに大事なんだな、あいつのことが」と優しく微笑んだ。

上条の癖に五十樹のこと？あいつ？呼ばわりすんじゃないよ！？様？をつけるよ、デコ助があ！いや、我慢だ。

「ああ。俺には親も兄弟もないから、あいつだけが家族みたいなもんなんだよ」

「そりゃ仕方が無いのかもな。いいぜ、あの件はもう無しだ」

上条が握手を求めてきたので、単純な人間でたすかった、とホッと息を吐き、上条の手を握った。

「んで、女の子の件なんだけど」

「お、おう」

あからさまに喜んでやがる。こいつってモテそうなのになあ。絡まれてる子を率先して助けるようなやつだから。病的にニブいのかもな。

「ああ一応確認しておくけど、今まで告白されたことと、したことってあるか？」

確認は大事だ。もし俺が今から紹介する人間に、既に告白されていて上条がそれを断っていれば、そこでゲームオーバーだ。

「この上条さんにそんなハッピーイベントあるわけ無いって。告白したことも無いぞ」

この戦、勝てるっ！

「その紹介する子は、実は既にお前の知り合いなんだよ」

「えっ？でも紹介って…」

「そう。俺が紹介するのは、上条の知り合いで既にお前の事が好きな子を教えてやるってこと。どうよ？」

「まさかそんな子がいるわけ…」

ちっ、面倒くせえ。

「よし、もし失敗したら、俺が一ヶ月毎日飯をおごってやるよ」

「えっつ、そんなに自信があるのか？」

「無かったらここに来なかったって。あの実験の時もレールガンの時も上手くいっただろ？」

「確かに。それで誰なんだよ？」

「それは内緒。ただ、明日の土曜の朝の8時に上条を買い物にでも誘うように電話させるから、明日は一日空けておくこと。あ、それとその子との電話が終わったら、間髪かんはついれずすぐに俺に電話してくれ。注意事項とかあるから」

「そんなこと言われたら寝られないって」

「まあまあそれも恋愛の楽しみじゃない？」

俺たちはそのまま別れた。ってか俺が知ってる上条との共通の知り合いの女なんて、一人しかいないんだけどな。

まあクローンも一応そうだが。御坂美琴がムリだったら、クローンにでも話を持っていくか。

40 天使かも

上条と別れた後すぐに電話をかけた。もちろん相手は御坂美琴だ。

？もしもし、なによ？

すごい不機嫌そうな声だ。ってか俺の電話番号をまだ登録しっぱなしだったのか。俺ならすぐにでも通話拒否登録したうえで削除するけど。

「実はお願いがありました」

？はあ？あんた私にそんなこと言える立場なわけ？？

「そのお願いを聞いてくれたら、上条との仲をとりもってやるよ」

ん？無言になった。考えてるのか。つまりは上条への好意は、まだ続いてるってわけだな。まあ自分の願いのために命をかけてくれたわけだからなあ。

？…信用できないわ？

「ただ俺って信用無いんだよ！過去の俺め！」

「俺のお願い事を聞いたら、俺が本気で考えてるってわかっただけだと思っただけだ」

「…なによ、言ってみなさい？」

「そんなに難しいことじゃないんだよ。」

五十樹、アクセラレータ一方通行の妹の百合子って子が今度常盤台中学の1年生として編入するんだけど、俺たちと御坂との間の事にその子を巻き込まない、っていうか、普通に接して欲しいんだよ。

「ただそれだけ。ムリ？」

「…つまりは人質ってわけね、わかったわ。ただし特別扱いしないからね？」

「ありがとな。まあ御坂にも得はあるぞ？その子は御坂のことをすアクセラレータごい慕ってるし、その妹のことを一方通行は溺愛できあいしてる。」

「つまり妹を通じて学園都市の第一位を思いのままにできる」

つまり俺のお願いも上条とのことも、お前にはプラスにしかないっていう風に考えろよ。

まあ五十樹を利用するなんてこと、俺がいる限りさせるわけないけどな。

？わかったわよ。それでその、あいつとの仲を取り持つって、一体どうやるのよ？

「とりあえずは明日の土曜の朝の８時に上条に電話してくれ。それで買い物にでも誘え。それで全てが上手くいく」

？ちよ、ちよっともつとちゃんと説明しなさいよ？

「これに関してはもう説明できることは無いんだよ。ただし注意点としては、絶対に８時に電話しろよ。」

まあ秒単位まで気にする必要は無いけどな。多分これが御坂が上条と付き合う事のできる最初で最後のチャンスだと思うぞ？」

？ど、どうということよ？？

「ん？単純に上条って学校でもかなりモテるみたいなんだよ。つま

りいつ上条が他の女にとられても不思議は無いつてこと。それに上条は優しいから、一回付き合いたしたら中々その子とは別れないと思うよ?」

?わかったわ、やればいいんでしょ、やれば?

「あ、上条と出かける約束ができたなら、電話が終わって10分たったら俺に一回電話してくれ。その時に必勝法を教えてやるから」

?ちよつと今教え?

そして電話を一方的に切って息を吐く。ここまで脅せばさすがに電話をかけるだろう。

俺ってもしかして天使なんじゃね?

五十樹の部屋に戻ると、五十樹と百合子ちゃんが俺の顔を見てきた。本当にそっくりだなあ。

「とりあえずは明日の夜にならないと上手くいくかはわからないけど、可能性は結構高いと思うよ?」

そういうと二人とも安心したようだ。

そして翌日の土曜の朝、電話がかかってきた。

？どっ、どう、えっとどうしたら、いい、の？？

10分経ったらって言っただろうがっ！まだ8時3分だぞ？挙動不審っていうかパニクリすぎてて変質者みたいな御坂からだった。

「とにかく落ち着けよ。ちゃんと誘えたんだな？」

？うん、昼から買い物に付き合ってもらおう？

「そうか。じゃあまずは現状の確認だ」

？どういうことよ。早く必勝法を教えなさいよ？

「まあまあそれも含んでるから。じゃあまず、御坂はどんな人間か、

俺が教えてやる」

？じ、自分のことくらい自分が一番よく知ってるわよ！あんたまた私に喧嘩売ろうってわけ？？

「落ち着けて。あ、ちょっとキャッチ来たから、しばらく心を落ち着けとけ」

俺はもう一件の電話に出た。上条からだった。

？おい藤田、御坂から電話があったぞ？これって…？

「ん？御坂のこと嫌いか？」

？いや、そんなことないけど。むしろ可愛いと思ってる？

「じゃあ問題無いんじゃないか？」

？大ありだって。あいつが俺のことを好きなわけないって？

「理由は？」

？だってあいつはお嬢様でレベル5、一方俺はバカでレベル0、釣り合うわけないだろ？

「それって上条の事を好きじゃない理由にはなってないけどな。ひとつ聞きたいんだけど、御坂って上条の学校のこととかレベルのこととかバカにしたことあるのか？」

？それはねえよ？

「じゃあ反対に、レベル5でお嬢様なのにレベルや学校のことをバカにしない、すごいいい子ってことだろ」

？言われて見れば、確かにな？

「んで一番肝心な事を聴くぞ？お前は御坂美琴の事が好きか？正直に答えろ」

？俺は…俺は御坂のことが好きだ？

この勢いで好きじゃないとは言えないだろう。勢いと雰囲気流させてもらった。まあ少なからず悪くは思ってたようだしな。

そして言葉にしたら、その言葉に縛られることになる。まあ本人は、？思いを確認した？くらいにしか思っただろうけど。

実験前に上条の人となり調べておいてよかった。

「なら問題ないじゃないか。今日のデートがんばれよ。御坂は普段は学校でちやほやされまくってるから、上条なりに気を使ってやればいいから。あ、ちゃんと告白してやれよ、じゃあな」

？おう、わかった。ありがとな？

そして御坂との通話を再開する。

「落ち着いたか？」

？もう大丈夫。わかった。つづけて？

「よし。まず御坂はレベル5だ。外見も問題無い。むしろトップクラスだ。そしてお嬢様学校に通ってるけど、とても気さくで皆に慕われてる。」

でも本人はそんな特別扱いをあんまり嬉しくないと思ってる節がちょっとある。そのせいか、同等に扱ってくれる上条の事は得がたい人間だと思ってる。

だけどそれゆえに、素直になれずにキツくあたってしまうこともある。そんなとこだな」

本当にみんなに慕われているかは知らない。そう言われて嫌に思うヤツは少ない。

自分を褒める人間の言葉は、相手によく伝わる。

節がちよつとあるとか、人間てのは複雑だから、100パーセントこういう性格ってやつはいない。曖昧あいまいな性格判断や占いを信じてしまうのと同じだ。

それで俺の話信じさせる。俺の言うことは正しいと思わせるのだ。

？あんたちよつと怖いわ？

てめえのために動いてやってんだろうが！あ、違うか。

「まあ今の話を総合するとだな、御坂美琴はすごい魅力的だってことと、素直になれば大抵の男は落とせるってことだ」

そして俺の言葉を信用させた後、まずは自信をつけさせる。

？…ありがとう？

上条からの返事がNOだったら、話はここで終わらせてた。自信をつけさせることが必勝法だったことにして。けどYESだったのでトドメをさしておく。

「それでな、今から言う必勝法をよく聴くんだぞ？」

？わ、わかったわ。お願い？

「上条って、御坂の事が好きなんだよ」

？へ？え〜〜っ！ちょ、ちょっと、えっと、それ、どういう事よ？？

「どういってそのまんま。本人から聞いたから間違いない。やる気でたか？」

うっううう？

「では健闘を祈る」

これでムリならもう俺には手におえない。それにここまでやってやったんだ。百合子ちゃんのことちゃんと約束を守ってくれよう。

とりあえずはそう信じるしかないか。

41 死ぬかも

上条と御坂の仲を取り持った日の夜、俺は街を歩いていた。土曜の夜だというのに通りに人は結構いる。

1時間ほど前に御坂と上条二人から電話があって、つきあう事になったと報告があった。御坂などは

「アイツの妹だっけ？この御坂様にまっかせなさい」

と上機嫌だった。その御坂の言葉を五十樹と百合子ちゃんに伝えると、五十樹は胸を撫で下ろし、百合子ちゃんからは尊敬の眼差しを頂いた。

目を輝かせながら上目遣いの百合子ちゃん…ご馳走様です。

百合子ちゃんは今晚は五十樹の家に泊まるらしかったので、3人でパーティーでもやろうという事になり、俺ひとりがい出しにでかけることになった。二人で落ち着いてゆっくり話もしたいだろうからね。

人ごみの中を歩いていると、見知った顔を見つけた。フレンダと絹旗だ。声をかけようと思ったけど、二人ともかなり急いでいるらしく、強引に人ごみをかきわけて行った。

麦野との待ち合わせにでも遅れそうなのかな？

その時、人ごみの中でもわかるくらいの、異様な雰囲気の子がいた。一目であればヤバいと思えるくらいに。

そいつは二人の後を追っているようだった。慌てる様子はなく、ゆっくりと歩いて。しかしあの男、なぜか既視感がある。

どこで見たんだ？ 特力研か？ 思い出せない。

見なかったことにするか？ いや麦野に殺され、…違う、俺はそいつらの後を追った。

生意気なフレンドの顔と、絹旗の泣き顔が頭に浮かんでしまった。クソっ、あいつらと仲良くなりすぎた。

路地に入ったところで見失ってしまった。するとガラスを引っかけたような金切り声が聞こえたので、俺はその声の方に向かった。

ああ確実にヤバいことに足つつこんでるよなあ俺。

路地の行き止まりの前に3人はいた。そこには、左足を切り落と

されて倒れているフレンド、体中から血を流しながらもなんとか立ち上がろうとしている絹旗、そして俺に背を向けている男。

それを見て俺は、すぐさま行動にうつった。

俺は右手で拳銃を『作成』し、引き金を引いた。…いや引いたつもりだった。

考えがまとまらない。視界がぼやける。

誰かが俺の名前を叫んでいる。

そしていつのまにか膝をついていた。その時に気づいた。

俺の左足の脛すねから下が無かった。

銃を見ると、いや、見ようとすると、右手も無かった。

体から、血がどんどん流れていく。

俺はうつ伏せに倒れた。体が勝手に銃を拾おうとしている。

俺の切り落とされた右手は、まだ銃を握っていた。

どんな攻撃をされたのか、まったくわからなかった。

その時、その男がゆつくりとこちらに歩いて来るのが見えた。

ここで死ぬかもしれない。

そう思うと、五十樹の顔が頭に浮かんできた。

せめて、せめて五十樹に俺以外の人間、できれば好きな女が現れるまでは死にたくないなあ。

その時あの打ち止めと呼ばれる少女を思い浮かべてしまい、さすがに幼女はないだろう、と少し笑ってしまった。

すると男が俺に向かって話を始めた。

頭は朦朧としているのに、なぜかはっきりと声は理解できる。

「お前がついて来てたのはわかった。だからまあ軽くマイてやったんだけどな。それなのに、ヒーローみたいに登場してきやがったから、ムカついて攻撃しちまったよ」

俺は左手に鋭い痛みを感じた。見てみると、銃を拾おうとしていた左手を男に踏まれていた。

手の指と甲の骨が折れていくのがわかる。

その痛みのおかげで意識がはっきりとしてきた。

甲の骨？甲？

俺は鼻で空気を肺いっぱい吸い込んで息を止める。

そして一気にその男を『分解』した。

しかし出力が足りなかったのか、上半身がグチャッと上から降ってきた。

男に当然意識は無い。

俺はそのまま手を伸ばし、残りを『分解』した。

死ぬかと思っただけでまだちょっと危ない状態って気がする。

安堵からか、そのまま意識を失いそうになる。

俺って不意打ちとかばっかりな気がする。別に正義のヒーローに憧れるわけじゃないけど、正々堂々と正面から戦える力欲しいよなあ。

とりあえずは目の前の右手から治すか。

なんとか這いつくばったまま、目の前の自分の右手を掴み、切断部を『操作』して治し、左手、左足を治した。

自分の胸に左手を当て、心臓に少しずつ血液を作り出していく。

あまりに血を失いすぎた。そしてフレンダの方へと歩いて行った。

うう体がふらふらする。

酔っ払った時みたいにまっすぐ歩けないぞ。

切り落とされたフレンダの足を拾い、体がある場所まで持つてきて足を繋いだ。

フレンダの首を触ると、気絶しているだけだった。

これで死んでたら、俺の苦勞を返せ！と告訴するところだったよ、まじで。

「藤田、だいじょうぶ？」

絹旗が心配そうに聞いてきた。

「お前よりかは大丈夫だな」

と、全身血まみれの絹旗を見て笑ってやった。

「藤田のくせに」と手を振り上げてきたので、必死に謝った。

俺はのび太かよ。

さて、と絹旗に向きなおした。

「とりあえず死ぬような傷は無さそうだけど、病院に行くか？それとも俺が治すか？」

「なんでフレンダは超治して、私にはそんな事聞くんですか？もしかして麦野と同じ超Sの人ですか？」

「違うわ、超Sってすごい嫌な表現なんだけど。そしてちよつとSの気もあるかもしれないけど、って話を戻すと、俺が治すには触らないとダメなんだよ。手でな」

そう言いながら、何かを揉む手の動きをしてやった。やっぱりSかも。

「うゝ藤田のくせに藤田のくせに」

絹旗は両手で胸を押さえて目を閉じた。

「二つの意味で無えよ」

「どういう意味ですか！」

怒鳴られた。

「胸が揉むほど無いってことと、揉むつもりも無いってこと」

殴られた。痛いよ。

とりあえず胸以外を全て治し、最後に胸を見るとザツクリと切れていた。

こんな薄い胸でよく死ななかったなあと感心しながら手の甲で触れて治してやった。

その後、胸に触られたと絹旗が騒ぎ出したので、手の甲で触れば痴漢じゃない、と一般常識を教えてやった。

そしたらまた殴られた。なんでさ？

よっぽど喧^{やかま}しかったのか、フレンダが目を覚ました。

寝ぼけているようだったので、タクシーを拾うまで背負ってやった。

そのあいだに歩きながら絹旗は麦野に電話していた。

「一緒に麦野に会いに行って」

絹旗が頼んできた。

「どっか怪我してんの？」

あの人が怪我をしている姿が想像できない。まあ片腕を切り落とされても元気いっぱい走り回っていそうだけど。

「ううん、怪我は無いって。超元気でした。でもお礼が言いたいて」

罨だ。あの人に似合わない言葉ベスト3の一つだ。ちなみに他は謙虚と思いきやだ。

そしてあの人がお礼というときは、（復讐的な）お礼参りの事を

指す気がする。怖くて本人には言えないけど。

「悪い、五十樹に心配かけるから」

まあこれも理由としては本当だしね。

そうして買い物をして五十樹の家に戻った。すると遅いとかの文句は一切出なかった。二人で良い時間をすごせたのだろう。

五十樹がこっそりと、なんかあったのか？と聞いてきたので、また明日ゆつくりと話すよ、と返した。

今日はもうね、本当に限界かも…。

42 死んでたかも

そして3人でのパーティーを始めた。俺としてはとっとと寝たいのだけど、嬉しそうな百合子ちゃんの顔を見るとやらざるを得なかった。

「ンでアニキ、結局隣のは誰なんだ？」

俺は五十樹を見た。どんな風に紹介してくれるのだろうか、ドキドキしながら。

「ダチ兼、家政夫だ」

ここはっ、喜ぶべきかやっぱりと肩を落とすべきかつ。家政夫か、まあ料理とか日用品の買出しとかしてるし、正しいか。

でもこんなに素直にダチって言うてくれるとは思わなかった。

ニヤニヤが止まらないっ。

「五十樹のダチの藤田久遠だ。よろしくね」

俺は握手をしようと百合子ちゃんの前に手を出した。しかし百合子ちゃんは握手しようかどうか、俺の手と五十樹の顔をオロオロと交互に見ている。

汚くなんかないって！号泣しちゃうよ？

そして五十樹がうなずくのを見た百合子ちゃんは、やっと握手してくれた。

「と、ところで百合子ちゃんは、五十樹と外見がそっくりだけど、やっぱり能力も同じなの？」

百合子ちゃんはまた五十樹を見て、五十樹が頷き、やっと話をしてくれた。

しゃべっても汚染されたりしないって。

「あア、まアアニキの劣化版って感じだな」

「そっか」

俺はそれ以上は聞かなかった。聞いてしまうと今度は俺の能力の話になる。

本当の事を話したら、今度は百合子ちゃんが友達に俺の能力を聞かれた時に嘘をつかなくてはならなくなる。

ダミーの能力でも考えるか。どんなのにしようかな？

「それで今まではどこに住んでたの？」

「あアアニキとは違う研究所で世話ンなってた」

五十樹とは離れた所で五十樹に対する人質みたいな扱いだったんだろうな。

そしたらあんまり酷い扱いはされてなかったかもね。

そんな感じでパーティは終わった。

「こいつはたまにキメェこと言うから気をつけろよ」

とか五十樹が百合子ちゃんに言ったりしてたけど。

愛情の裏返し…だよな？

次の日の朝、百合子ちゃんは帰って行った。俺は昨日の事を話そうと、五十樹と向かい合った。

しかしその時、PDAが振動した。画面を見ると麦野からだった。こんな時間から起きてるのか。事後処理みたいなことでもしてんのかな？

？昨日は世話になったみたいね？

「いや、ただの成り行きで…」

？まああれはあんたが原因なんだけど、ねえ？

は？ヤ●ザモード発動か？それはあまりにも言いがかりすぎですよ。

「えっと、どういことですか？」

？昨日のあいつは学園都市の第二位よ？

うへえよく生きてるよなあ、俺。ちょっと何かが少しでも違ってたなら、死んでたかもしれないね。ん？第二位？それって…。

？あんたからの、第二位を調べてくれ、って依頼を受けたでしょ？

それを調べてたのが同じ暗部の私^{第四位}だった。

あいつからしたら、自分を敵にまわそうとしている第四位を、自分が殺^ヤられる前に殺^ヤつとくか、ってな感じだったんでしょね？

はい、ごめんなさい。いやあだってあの時は、上条が五十樹に勝てる見込みってそんなに無いって思ってたから…。

次案を考えておくって大事でしょ？

「すみませんでした」

？まあいいよ。こっちも仕事として受けた事だったからね。でもよく勝てたねえ。ま、絹旗の話じゃ完全に不意打ちだったみたいだけど？

めっちゃ笑ってらっしゃる。麦野にしたら命を懸けた殺し合いなんて日常茶飯事なのか？ いやいや麦野が命の危機なんて。

麦野の命の危機（笑） って表記しなきゃならないよね。

？まああんたみたいな格下相手にでも、油断してたら殺^ヤられるってことがわかったからさ。今後は私も格下相手でも気を抜かないことにするよ？

言ってる意味は十分に理解できるし、十分に正しい。でも？格下？って言葉に棘棘しさを感じるんですが。

ひょっとして、自分の獲物を奪われたとか思ってるのか？狩人、いや肉食獣っぽいし。

「麦野さんは怪我しなかったんですか？」

？ええ大丈夫よ。ちょっと戦ってからすぐに撤退したし。滝壺がいたからね。それと今回はたまたま相手があんたの能力を知らなかったから油断したけど、もうこんな事に首をつっこむのはやめなさい？

背中がゾクツとした。心配された？

？あんたの巻き添えはもうこりごりだし？

ですよねー。いや、ここは前向きに、これは麦野がデレたって考えるん：ムリだ。とっとと男作ればいいのに。

あ、もうすでにハーレムとか持ってるかも。金と力にものを言わせて。でもほとんど性的な色気って感じないんだよねあ。

麦野が惚れる相手ってどんな相手だろうかね？どっかの小国の王

子様とかか？逆に御坂のこともあるし、レベル0の…想像できない。

てかデレてる麦野が想像できないし。

？ちょっと聞してる？？

やべえ、妄想にふけてしまった。

「はい、もちろん」

？だったらいいんだけど。じゃあ今回の事は二人を助けてくれたから帳消しにしてあげるわ。じゃあね？

電話が切れた。いやいやさつき

？第二位の事は、仕事で受けたことだから問題無し？

みたいなこと言ってたじゃないか！なんで

？貸しは帳消しにしてあげる？

みたいな感じなんだ？もういいや。あれはああいうイキモノなんだろう。

そう思うことにしよう。

そして「おまたせ」と改めて五十樹の方を向く。

「ンで昨日なにがあったんだ？」

「えっと、知り合いがヤバそうな男に追われてたから、追っかけて
いったら戦闘に巻き込まれた」

目つきが怖いよ、五十樹さん。

「どこのヒーローか？レベル上がって調子にのったンじゃねエの
？」

「それはないと思うんだけどね。ただ知り合いだったから何とかし
ないって」

確かにあの時、レベルが上がった事は考えなかった。それにレベ
ルが上がった実感が無いから調子に乗るなんてできないし。

「ンで今の電話もなンか関係あンのか？」

「そうそう。わかったのは、今回の騒動は俺が原因だったってことと、俺が殺したのは第二位だったってこと」

「はア？第二位なンぞ相手にしてンじゃねエよ！」

おっしや
仰るとおり。俺も相手なんかしたくなかったんだけどね。

「そうだね。本当に今回は運がよかっただけだったって思うよ」

はあ、とりあえず学校に行こう。ダミー能力はどんなのにするかなあ？

42 死んでたかも（後書き）

麦野が格下相手に油断しなくなりました。浜面がんばれ！

43 お兄ちゃん子かも

SIDE 百合子

4月の最後の日、今日から常盤台の寮生活が始まる。部屋は一人部屋だった。

多分同室の子が私のことを怖がって断ったのだろう。まア今までずっとそんな感じだったしなア。

私のお兄ちゃんは、この学園都市の第一位だ。それにたくさんの方から褒められる。

そして妹の私はお兄ちゃんとそっくりな外見をしている。だから目立つし怖がられる。

先日、街でいつものようにお兄ちゃんの住所を、手当たり次第に街の人たちに聞いてると、変な男に声をかけられた。

「五十樹のことを探してるの？案内しようか？」

これがキャッチセールスか。最初に思ったの第一印象はそんな感じだった。

でも一方通行のことを、ちゃんとお兄ちゃんお兄ちゃんと五十樹って言った。もしかして知り合いかもと考えていると、

「怪しい人間じゃないよ。五十樹の家の隣に住んでる友達だから」

怪しい人間は、みんな自分のことを？怪しくない？って言う。私にだってそれくらいわかる。

でも今までで初めて見つけたかもしれない手がかりだし。

「ん、初対面の男を信用しないのは偉いけど…。あ、そうだ俺の宝物を見せてあげるよ」

男はそう言いながらPDAを操作している。そして画面をこちらに見せて来たので見てみると、お兄ちゃんの寝顔が写ってた。

次々と、顔のアップ、上半身だけ、全身、違う角度から、ソファから少しだけ髪の毛が出るもの、寝ているお兄ちゃんとツーショットのものなどイロイロ。

画像の中のお兄ちゃんは、私の記憶と比べてずいぶん大きくなっていた。泣きそうになった。

居場所を知っているのは間違いなさそうだ。でも逆に、こんなこ

とをする男を信用してもいいンだろうか、という気がしてきた。

もしも本当に友達なら、お兄ちゃんがすごい苦勞してるンだろうなア。

結局その男についていくことにした。なぜなら私はレベル3の能力者だからだ。

大抵の人間ならなンとかできる力がある。まあお兄ちゃんみたいに全てを自動反射はできないけど。

そのあと結構立派なマンションに入り、ある部屋の前に止まると、チャイムを押すことも鍵を開けることも無く部屋に入って行った。

無用心すぎるよ、お兄ちゃん…。

そこで、本当に何年ぶりかにおにいちゃん与会えた。？お兄ちゃん？と呼びかけそうになって？アニキ？と言い直した。多分。

嬉しくて実はあんまり覚えてない。言ってないよね？私はもう大きくなったのだ。お兄ちゃんなんて言ったら、なんか、ちよつと恥ずかしいのだ。

そういうもンだと思う。他の人は知らないけど。

そこで少し、ほんのちよつとだけ泣いてしまった。嬉しかったか

ら泣いたのだ。

私は間違っていないと思う。うん、そういうもんだ。

そのあと常盤台に入った理由を聞かれて、御坂さんがいるからと答えると、二人の表情が曇った。

どうやら何か迷惑をかけたらしい。

どんなことをしたのか教えてくれないので、言えない様な酷いことをしたんだろう。

私の、常盤台で御坂先輩と仲良くなるという夢は、始まることもなく終わってしまったみたいだ。

けどその次の日の夜に、問題は解決したってお兄ちゃんの友達が言ってくれた。しかも御坂先輩が、私のことをまかせろとまで言うてくれたらしい。

お兄ちゃんが困るような問題を解決するなんて。結構すごいやつなのかも知れないな。

そのあと、あいつはパーティの買い出しに出かけて、お兄ちゃんと部屋で二人っきりになった。

だから人目を気にせずにたくさん話をした。友達はほとんどでき

なかったけど、結構楽しく暮らしていたことを。

数年分溜め込んでいた思いを全部吐き出した。

お兄ちゃんは「そオカ」と頭を撫でてくれた。手が暖かくて、また泣いてしまった。

泣いてる間ずっと頭を撫でてくれたので、たまには泣くのもいいかもと思ってしまった。

私は結構お兄ちゃん子かもしれない。

そしてとても静かに「なんか困ったことがあったらよオ、俺の名前を躊躇なく出せ」と言ってくれた。

私はやっぱりお兄ちゃん子だ。心配されるのがとても嬉しい。

そのあと、「俺がいないときはあいつも頼ってやれ。大抵のことはなンとかしてくれンだろ」とも言った。一応覚えておこう。

どれだけ泣いたかわからないくらいに、あいつが帰って来た。少し疲れてるみたいだったけど、そんなに買い物が大変だったンだろうか？

3人でごはんを食べているとき、あいつに握手を求められた。私はどうしたらいいのかわからなくなった。だって他の人は、私に触れることすら怖がるのだ。

どうすべきなのかわからなかったから、私はお兄ちゃんのほうを見た。そしたらお兄ちゃんが頷いた。大丈夫ってことなんでしょう？

恐るおそる握手すると、あいつはすごい笑顔だった。家族以外で、初めて人から手をにぎられたかもしれない。

胸の中がちょっとだけ暖かくなった。

夜はお兄ちゃんと一緒に寝たかったけど、言い出せずに一人でベッドで寝た。お兄ちゃんはソファで寝てた。お兄ちゃんおやすみなさい、と心の中で言っ、目を閉じた。

次の日の朝、二人にお別れを言っ、お兄ちゃんの部屋を出た。

帰るときになぜかあいつが「いつでもおいでよ、待ってるからね」と言い、お兄ちゃんも「あア」と言ってくれた。

寮に行くのがちょっと不安だったけど、そんな気持ちはどこかへ飛ンで行ったみたいだ。

お兄ちゃんと、ついでにあいつに笑われないように、がんばらないと。

43 お兄ちゃん子かも（後書き）

ちなみに久遠は、玄関のドアを『操作』で鍵を開け、閉めるときに直しています。

44 なんとかやっていけるかも

SIDE 百合子

寮の部屋で荷物の片づけをしていると、扉をノックする音が聞こえた。

扉を開けると、そこに茶髪をツインテールにした、胸のサイズに同族意識を感じてしまう女の子がいた。

「わたくしの名前は白井黒子と申します。更科百合子さんですね？寮監からあなたを寮を案内するよう申しつけられました」

「おおありがと。じゃあお願いするね」

「ではさっそく参りましょう」

白井と名乗った女の後に続いて廊下を歩いて行く。私が怖くないのだろうか。

いや、さっき寮監に言われたって言ってたから、まアそういうことなのか。

気の毒なことさせちゃったな。

「ごめんな」

いつのまにか口から言葉が勝手に出ていた。

「何がですか？」

「あのさ、私の兄のこと知ってるでしょ？だからみんな私のこと避けるから、さ。何で白井さんが案内役選ばれたか知らないけど、白井さんにも迷惑かけてるだろうなっ、て」

あアダメだ。何か泣きそうだ。何でこんなに弱いんだろう。強くなるうって決めたばかりなのに。

「ああそんなことですよ。お気になさらずに。わたくしが案内役ジャッジメントに選ばれたのは 風紀委員 であり、あなたと同年だからですわ。そしてわたくしはその人となりを見てしか判断しませんわよ」

思わず下唇を噛んだ。涙が零れないように。

「ありがとう」

小さくそれだけしか言えなかった。白井さんはなんでもなかったかのように「さあ案内をつづけますわよ」と、歩いて行った。

「黒子おおお！」

遠くから叫びながら女の人が、いやあれは御坂先輩だ。どうしようどうしよう、どうすることもできなかった。

「お姉さま」

「今日新入生を案内するって言ってたから、探してたのよ。その子があいつの妹ね？」

御坂先輩が私を見た。ううう何を話せばいいんだろ？あいさつ挨拶しなきゃ。

「ごめんなさい！」

うう、また勝手に口からわけのわからないことを。

「ん？どしたの？」

「兄とその友達が迷惑かけたみたいだから、その…」

「あいつから話聞いてるの？」

御坂先輩の表情が少し硬くなってる。やっぱりすんごい迷惑かけたんだ。どうしよう。

「あ、はい、いやあの何をしたのかは全く。でも何かすごい酷いことだって、何となくは…」

「んゝそれが微妙なのよねえ。助けられたって言えばそうだし。まああなたのお兄さんには思うところはもう無いわ」

「というと、兄の友達のほうでしょうか？」

「それがもつと微妙でねえ。騙されたんだけど、それ以上のことしてもらったし」

御坂先輩がなぜかニヤけだしました。あいつは何をしやがったのだろう。

「お姉さま、まさか最近ずっとデレデレデレデレしてらっしゃるのは、更科さんと何か関係がおアリなのですか？」

白井さんがこちらを見てきた。なにか疑うような視線で。私にはさっぱり意味がわからないので、首を横に振り続けるしかできない。

「関係あるっちゃあるかもね。でも更科さんのお兄さんの友達に、ちょっとね」

「まっまさかその殿方とおつきあいを？」

「あいつはあんな陰険じゃないわよ」

「まあまあまあおつきあいしてらっしゃる方がいらっしゃるのは事実ですね？どこの馬の骨ですか？」

白井さんがハンカチを口に咥^{くわ}えて、キーっと言っている。これをしてる人を初めて見たかも。

その時うしろから、「あのー」と小さな声が聞こえてきた。振り返ると女の子が二人立っていた。

身長差的に、どうしても胸に目がいってしまう。また悲しくなっ

てきた。

片方の黒髪の子が頭を下げてきた。

「先日は危ないところを助けていただきありがとうございました。
あわつきさまあや
私、泡浮万彬と申します」

そう言えばお兄ちゃんを探してた時に、数人の男に絡まれてた女の子を助けた覚えが。

「あ、あの私にできる事しただけだから」

そう言えば常盤台の制服を着てたかも。もう一人も

「わんないきぬほ
湾内絹保です。これからよろしくお願いしますね」

と言ってくれた。それから「失礼します」と言って二人は歩いて行った。

やっぱりここってお嬢様学校なんだなア。

「へーすごいじゃない、更科さん。あ、これから百合子ちゃんて呼んでいい?」

御坂先輩に褒められてしまった。百合子ちゃん、ちゃん、ちゃん。これはもうどうとでもなってしまうって位に嬉しい。

「は、はい。私、御坂先輩ならこうするだろうって思ってる」

あア生きててよかった。でも白井さんから何か黒いモヤが出てきてる。

「百合子百合子、はっ、百合？ あなたまさかわたくしのお姉さまによこしま邪な考えをおもちですか？」

白井さんのツインテールが、風もないのにウネウネと動いている。げ、幻覚かな？

「私はいつからあんたのものになった！そしてそれはあんだだけ！！」

白井さんは御坂さんから電撃を浴びせられている。でも心なしか喜んでいるような…。人間の奥深さを知った気がする。

お兄ちゃん、私でもここでもなンとかやっていけるかもしれないよ。

45 できることがあるかも

SIDE 百合子

私の常盤台での生活が本格的に始まった。入る前に考えていたのとは比べ物にならないくらいに上手くいつてる。

最初は確かにみんなから距離を置かれていたように感じていたけど、あわつき泡浮さんやわんない湾内さん、白井さんが私に普通に話しかけるから、自然とみんな話しかけてくれるようになった。

どうやらその3人が私のことを良いように周りに話をしてくれているようだった。

不謹慎な言い方かもしれないけど、あわつき泡浮さんを助けて本当によかった。

でもたまに派閥つてのに誘われることがある。

初めて誘われた時に、よくわからなかったので、「御坂先輩はどの派閥なんですか？」と尋ねると「御坂さまはどこにも所属してないですよ」と教えられた。

だから私は「じゃあ私もどこにも所属しません」と宣言した。

「そうですか」と少し表情を硬くして、その人はその時は引き下がってくれたが、その人の友達らしき人たちは連日のように誘いに来た。

あの人たちの？眼？は、今まで嫌というほど見てきたものだ。？私を、学園都市第一位の妹を利用しようとする人達？だ。

目の前の私じゃなくて、その後ろの第一位お兄ちゃんを見ている。

でもこれは、ここに来る前からわかっていたことだ。

だからあまりにしつこく、お手洗いにまで押しかけられた時には、「兄に困った事になっている、と相談せざるをえません」と言っただ。するとその人たちからの勧誘は已やみました。

この言葉が通じる相手でよかった。お兄ちゃんありがと。

でもお兄ちゃんちゃんの存在を頼って何かをするのは、本当はとても嫌だ。

自分こそが一番お兄ちゃんちゃんを利用しようとしている人間に思えてくるから。

だから私は御坂先輩に憧れているんだと思う。あの人みたいに強くなって、お兄ちゃんちゃんに頼らなくてもいい私になりたい。

いつもそう願ってる。

たまに学校の帰りに御坂先輩とご一緒させてもらうこともある。

白井さんが風紀委員のときは、御坂先輩を独り占めできるのだ。クレープをおごってもらってしまったこともある。

「あ、あのなにかお返しを」と言うと「いいのいいのこれくらい」と言ってくれる。

でも何かをさしあげたくて、あいつに相談してみた。お兄ちゃんはこのことには向いていないのだ。

そうしたら一週間位して、ちょっと古ぼけたカエルのストラップをあいつから手渡された。

よくわからないけど、「大丈夫大丈夫」と言うので、御坂先輩に「この前のお礼です」とさしあげたら、抱きつかれた。

私はもう死んでもよいかもしれませぬ、お兄様。

今度はお兄ちゃんに「あいつにお礼をしたいんだけど、どうしたらいい？」と相談した。

きっとお兄ちゃんが一番あいつのことを知っていそうだからだ。

でもお兄ちゃんは「あいつに絶対にお礼がしたいなんて言うんじゃない、絶対だ」と釘をさされてしまった。

そんな理不尽なことを要求されるのだろうか？

それでも何かしたかったから、しつこく頼み込んだ。そしてたがしふ「顔をみせにくるのが一番喜ぶんじゃないの？」と教えてくれた。

そういうものだろうか？

実際にお休みの日に事前に連絡をして顔を出しに行ったら、すごくさんのお菓子とかケーキで出迎えてくれた。

そして全て手作りらしい。さすが家政夫さんだ。食べてるところをたくさん写真に撮られた。

こんなの撮ってどうするんだろう？

その後お兄ちゃんとなにか言い争っていたけど。

一度、御坂先輩の彼氏さんにもお会いした。

待ち合わせまで御坂先輩と話をさせてもらっていたのだ。

挨拶をすると、「へーあいつの妹かー、美琴の言うとおり、そっくだな」と言われた。

そして「あいつも藤田も元気か？」と聞かれたので、ちょっと嫌な予感がしたので「あ、あのあたなにも何かご迷惑を…」と尋ねると、彼氏さんは御坂先輩の顔を見て頬ほほを指で掻かき「なんにもないよ。」

藤田とは友達だしな、最近会ってないけど」と笑顔で言ってくれた。

とてもいい人みたいでよかった。

あの彼氏さんと一緒にいる御坂先輩は、とても幸せそうに笑って、いつも以上に綺麗に見えた。

私は周りのみんなに助けられている。それはとても嬉しいけど、とても歯がゆいとも思う。だから私は私のやりかたで、私にできることをやるのだ。

私にも何かできることがあるかもしれないと考えて、街で不良に絡まれている女の子を見かけたら、すぐに跳んで行って助けることにした。

そして学校でもクラスメイトなどに変な男に付きまとわれていると言われれば、自分にできる範囲で助けたりもした。

そしてある日、私をしつこく勧誘していた子にも、相談された。

私は少し迷ったが、私にできることをしようと、それを受けることにした。

その日、私は病院に緊急入院することになった。

S I D E 久遠

俺はその日、ダミー能力のための小道具を作っていた。真っ赤で手がつつこめるくらいの中着袋だ。

俺の考えた能力は、家の中に置いてある物なら、この中着から取り出せる大きさのものなら何でも取り出せる、という空間能力アポートの一種と言うことにした。

当然、巾着袋に手をつっ込んで中で『作成』し、取り出すのだ。

すでに家の中のものは大抵『解析』済みなので、問題はないように思われる。

そして袋の色。赤い袋は持っているが目立つ。

それを腰のベルト通しに吊るしておく。そうすれば人に「その袋なに？」と聞かれることになる。

その時に能力の説明をするのだ。それを繰り返すことで、俺の能力をみんなに誤認させることができるというわけだ。

教師に説明すると、「少々問題はあるが、それで良いと思う」と言われた。

ちなみに俺が何をやってるのかと言うと、巾着袋にチクチクと自分のイニシャルを縫っている。

悪戯で誰かに袋を入れ替えられ、それにも関わらず能力を発動させてしまうという事を避けるためだ。

そのとき五十樹から電話がかかってきた。すると「百合子が俺のいる病院に運び込まれた、すぐに来い」とだけ言われて電話が切れた。

俺は取るものもとらずに病院に向かった。

あそこには五十樹もカエル先生もいるから大丈夫、自分にそう言い聞かせながら。

受付で病室を教えてもらい、病室に急いだ。中に入ると、茶髪のツインテールの子がいた。

「状態は？」

「もう問題は無いようです。峠は越えたようですわ」

「知ってたら経緯を教えてもらえないか？」

「はい、その前にわたくし、ジャッジメント風紀委員の白井黒子と申します。

更科さんは街のスキルアウトに後ろから鉄パイプで頭を殴られたようですわ。

それを目撃した通行人が、巡回していた風紀委員を現場まで連れて行って今に至るというわけですよ」

「犯人の手がかりは？」

「今のところ何も。ジャッジメント風紀委員を見てすぐに逃げ出したようですので」

「この子の兄きは？」

「第一位でしたら、先程まで叫びまくっていて、カエル顔のお医者様にどこかに連れて行かれましたわ。思っていたのと違って妹さん

思いですのね」

「話してくれてありがと。俺は藤田久遠だ。じゃあ」

とりあえずカエル先生の部屋へと向かった。中に入るとカエル先生と五十樹がいた。

先生は机で書類を書いており、五十樹は椅子に座ったまま動かなかった。

「話は一応聞きました」

「そうかね。少し彼と話をしてくれないか？僕はちょっと出てくるから。頼んだよ」

そうして部屋には二人っきりになった。

「五十樹？大丈夫？」

「おい、犯人を見つけンぞ。ブチ殺してやる」

五十樹はとても静かだった。一見は。しかしずっと止まることな

く体が小刻みに震えている。

百合子ちゃんがもし命を落としていたら、この病院はよくて半壊していただろう。

俺は五十樹の両肩を掴んでゆっくりと諭す。

「大丈夫だよ、五十樹。なぐんにも心配しなくてもいいよ。俺がぜくくんぶ片付けるから。五十樹は医者になるんだろ？だから殺しちゃいけないよ」

そう、俺はそのためにここにいるのだ。

46 安全かも（前書き）

今回は長い上にグロいので、あとがきに粗筋を書いておきます。
グロが苦手な方は粗筋だけ読んで、次話におすすみください。私なりに表現には注意して書いたつもりです。

46 安全かも

病院を出てアッシュに電話をかけ、「一方通行の妹を襲った人間を探してる。

なにかわかったら、どんな小さなことでもいいのでその都度教えてくれ」と頼んだ。

百合子ちゃんの病室に戻ると、御坂と上条が来ていた。

「おお藤田、百合子ちゃんのこと美琴に聞いて駆けつけたんだ」

「そっか。ありがとな」

俺がお礼を言うのは変かもしれないが、五十樹の妹なのだ。もう家族のようなものだ。

「それで一方通行アクセラレータは？」

俺から五十樹は百合子ちゃんを溺愛していると聞いている御坂は、恐るおそる聞いてきた。

「大丈夫、百合子ちゃんが入院してる限り、この病院を破壊したりしないから」

「ちょっと聞きたい事と違うけど、大丈夫ならいいの」

五十樹のことを心配しているのだろうか？ 幸せになると周りの人間に寛容になるのかもね。

そこに俺がいてもできることは無さそうなので、俺は家まで五十樹の着替えを取りに戻った。確実に病院に泊り込むだろうからね。

再び病院に戻り、「五十樹が元気じゃなかったら、百合子ちゃんが目を覚ましたときに心配しちゃうよ？」とだけ伝え、着替えの入ったカバンを置いて家に帰った。

その日の夜の11時過ぎに、アッシュから連絡が入った。

「場末の飲み屋で第一位の妹の頭を割ってやった、と自慢するイカレた男の情報が入った。場所を送ってやる。ただ名前はわからねえ」

俺はその飲み屋に向かうことにした。念のため、顔の作りを『操作』で変え、髭面にし、体型がわからなくなるような服を着てキャ

ップを被り、位置情報で犯行がバレないようにPDAを置いて家を出た。

店に着き中に入った。客はほとんどおらず、一人の男が「やってやったぜ、一位の妹をよ」とクダを巻いていた。

店員は顔をしかめていたが、放置している。男の歯はボロボロになっていて、明らかにシンナーか何かの薬物のお世話になっているようだった。

「その話詳しく聞かせてくれないか？」

「おおいぜ。今日の昼にな「その前に場所を変えないか？ ゆっくりできる隠れ家があるんだよ。俺におごらせてくれよ」、…へへへ悪いな」

そう言って男を店から連れ出した。店員はあからさまに喜んでいた。

そのまま俺は、五十樹の実験の時に下見した実験場に男を連れ込んだ。使われなくなった倉庫街の倉庫の一つに向かい、扉を開けてやり、男を先に入らせ、「ここが隠れガッ」何かを言おうとした男の首の根元を警棒で殴りつけた。

俺はブルーシートを敷いてその上に男を乗せ、ガムテープで手足を拘束し口を塞ぎ、男の両足を使い物にならなくなるまで警棒で殴り続けた。

男はただただうめき声を上げている。

だんだん拷問^{この手の作業}に慣れてきている自分がいやだ。

体が汗でベトベトになるまで殴り続け、口からガムテープを剥がした。

「お前一人の犯行か？」

「いでえいでえよお、勘弁してくれえ」

俺は男の髪の毛を掴むと、一度持ち上げシートに叩きつけた。手がベトベトする。

髪になに塗ってやがんだよ、気持ち悪い。

「お前一人でやったのか？」

「そうでふ、ひほりでやりまひた」

歯が何本か欠けていた。まあ元々シンナーでボロボロだったが。

「たまたまあの子を見つけたのか？それともどこからか後をつけたのか？」

「ホキわだいのへいふくひたほんなにたのまへて」

常盤台の制服着た女に頼まれた？顔見知りかよ！

百合子ちゃんは犯人の心当たりがあるかも知れないな。

俺は男を仰向けにし、睡眠薬とミネラルウォーターを『作成』し、そいつの口に流し込んだ。

そして口をガムテープで塞いで、そのまま放置して家に帰った。

俺は常盤台の在校生の生徒の顔と名前のわかる資料をアッシュに頼み、そしてベッドに入った。

しかし寝付けなかったので、巾着袋の刺繍をつづけることにした。

次の日もちゃんと学校に行った。基本的な生活リズムを変えると、

あとで疑われることになる。

学校から帰ってくると、ポストにアッシュから分厚い封筒が届いていた。

部屋に戻り着替えると、また昨日と同じ変装をして、男のもとへ向かった。

倉庫に入ると異臭がした。この男、垂れ流してやがる。そして寝ている男の腹を蹴って起こしてあげた。

口のガムテープを剥がしてやるとそいつの前に常盤台の資料を広げた。

まずは一年生からだ。60人ちょっと、一枚の紙に10人ずつ乗っており、計11枚だ。

「この中にお前に頼んだ人間はいるか？」

10分ほどして「ほの、ひゃまもとのほだ！」3枚目の紙に書かれている顔写真の女の名前を叫んだ。

山本野亜…こいつか。

俺はまた睡眠薬と水を流し込もうとすると、

「しやべったんだから ひゆるしてくれよ 許してくれよ」

と叫ぶ男の言葉を見し、薬を水で流し込んで、ガムテープで口を塞いだ。

んなこと約束した覚えはないんだけど。

家に帰ると、PDAに不在着信があった。かけ直してみると、カエル先生が出て、百合子ちゃんが目をさましたと教えてくれた。

俺は途中で小さなカップケーキをいくつも買い込み、病院に向かった。

病室に着いてノックをしたあと、「どうぞ」という声を聞いて中に入った。

病室には百合子ちゃん一人だった。みんなに連絡すると百合子ちゃんが疲れるだろうと先生が気を使ってくれたのだろう。

「やあおはよう」

俺の顔を見ると、髪型を気にしだした。やっぱり女の子だねえ。

「お、おはよ。心配かけてごめん」

「百合子ちゃんが謝ることなんて何もないよ。カップケーキ買って来たけど食べる」

「うん、ありがとう」

そして箱を開けて百合子ちゃんに選んでもらい、病室にあった皿にケーキを乗せて渡した。

一応手づかみで食べられるものを選んできた。

「美味しい、です。ありがとう」

またお礼を言われてしまった。今度はカップケーキを作ってお見舞いに来よう。

「食べながらでいいから聞いてね。山本野亜って名前に聞き覚えある？」

「いや、わかんない」

俺はカバンから資料を出して、一人の顔写真を指差した。

「この子なんだけど」

「あ、知ってる。あの日もこの子に連れられてそれで、そこでききなり…」

百合子ちゃんが震え出した。名前は知らない程度の知り合いだったのか。

俺は優しく頭を撫でてやる。

「だいじょうぶだよ。ここはもう安全だから。なんたって学園都市の第一位がいる病院だからね。世界で一番安全かも」

俺は笑顔で言った。

「その子が犯人なの？その子をどうするの？…お兄ちゃんが知ったら、もしかして殺しちゃうかも」

「大丈夫だよ。百合子ちゃんがそうして欲しくないなら、俺が絶対にさせないから」

というより、そう言う処理は俺の仕事だから。俺は百合子ちゃんの頭を撫で続ける。

「なにか飲み物かってくるよ。どんなのがいい？」

「甘いやつ」

百合子ちゃんの声はとても悲しそうだった。「ちょっと待っててね」そう言い残して自販機に向かい、ココアを買って戻った。

「はい」とそのフタを開けて手渡し、口にするのを待って「おちついた？」と聞くと「うん」と答えた。

「ねえさっきの子に酷いことするの？あんだ、久遠からも酷いことしないようにお兄ちゃんに言って」

初めて、初めてっ久遠と呼ばれました。おほつ。テンション上がります！

燃えてきつたああああ！

「全部まかせて！でもさっきの子の名前を他の人に、五十樹にも内緒にしてくれないかな？犯人がわからなければ、五十樹でもどうしようもないからね」

「わかった、そうする」

「じゃあ俺は帰るよ。また来るからね」

「ありがと、またね」

俺は病院を出ると、さてどうしようかな？と考え始めた。

拉致って話を聞いて消してしまえばいいと思ってたからねえ。

その前に拉致する方法も考えてないけど。

家に向かって歩いていると、とても良いモノを見かけた。

これがいい！×○食品さん、君に決めたっ！

S I D E 山本 野亜

あれ？私どこにいるのかしら？ここはどこかしら？

やだっなにこの臭い。あら？体が椅子に縛られてる。

口にもなにか張られていて、声がでないじゃないの。

何があったか思い出さないと。今日は学校が終わって欲しかったカバンを見に行つて、それから。

あ、有名食品会社の試供品を貰つて、あとで飲もうと思つてたのに、わざわざ水を手渡されたからそこで飲んだんだつた。

それから気持ち悪くなって…その後が思い出せない。

「あ、起きた？」

男が話しかけて来た。鉄の棒を右手に持って近づいてきた、地面を引きずりながら。

口のガムテープを剥がされた。

もっとゆっくり剥がしなさいよ痛いじゃないの！

「いくら欲しいんですか？」

「は？金が目的じゃないよ？あ、先に言うトレイプとかそういうんでもないから」

「なら一体何のためにこんな不埒なマネをしたの？答えなさい！」

「更科百合子、知ってるよね？隣にいる男も知ってるでしょ？」

横を見ると、確かに私が10万渡して、あの子を襲うよう頼んだ男がいた。

顔がちょっと血まみれですけど。

「頼んでないわ。私が襲わせた証拠でもあるんですか？」

認めてなるもんですか。

「知ってるかと聞いただけなのに、なんで犯人がだれかに頼んで襲わせたって知ってるんだ？」

そ、それは、それは。

「わかったわ。話をするから拘束^{これ}を外してちょうだい」

「話をしてくれたら確実に外すよ。ってか君に決める権限は無いと思うんだけど」

「…わかったわ。あの子はね、私がせっかく派閥に誘ってあげたのに断ったのよ？ あんな第一位の妹ってダケの女をよ？」

私の好意を無碍むげにするなんてありえないわ。これでいいでしょ、早く外してちょうだい」

とりあえずここを出てしまえば、どうとでもなる。10万くらいで動くゴミどもは掃いて捨てるほどいるんだから。

「ひとつ聞きたいんだけど」

何かしら？ やっぱりお金の無心かしら？

「ノアって男の名前だよな？ お前の親はそんなことも知らないくらいにバカなのかあ？」

S I D E 久遠

名前を知ってからずっと気になっていたことを聞いても、答えが返って来なかったので、とりあえず鉄パイプで女の両脛りようすねをアッパースイング気味に殴りつけた。

「なっなにをぎゃああああ」

うるさい。

口はやっぱりガムテープで塞ごう。

ちなみに試供品を配るときからずっと、顔は変えてる。そして声帯をいじる事で、声を変えられることができる事にも気づいた。

死なないように、全身を満遍なく、逆に頭以外を鉄パイプで殴り続ける。

もちろん治療は忘れない。

気絶したら頭に水をかけるのもね。

綺麗に塗られた爪をペンチで抜いたり、その指を一本ずつ落したり。

こういう事をするのがほんとうに手馴れてきたかも。2時間ほどそんな事をしていた。

時計が無いから、正確な時間はわからないけど。

そしてそれらの傷を治してまた頭から水をかけ、女が起きるのをまった。

中々起きないので、起きるまで水をかけ続けていると、10分後

にやっと起きた。

「おっはよく悪夢の続きだよ」

なにか女が唸^{うな}ってる。あ、もらしやがった。きたねえなあ。

俺はその女の前まで、ずっとここに寝かせっきりの男をブルーシートごと引きずってきた。

うう臭い。

「君には常盤台を自主退学してほしいんだ。いう事を聞いてくれな
いと」

そして女の目の前で男をブルーシートごと『分解』した。また女が騒ぎ出した。そしてそのまま気絶した。

俺は女の体中の傷と汚れた下着を、本気で嫌なんだけど、『分解』で異物をとりのぞいた。

そして傷を治し、拘束を解き、座らせていた椅子も『分解』して、その場を去った。

数日後、その女は自主退学し、百合子ちゃんには「何をしたの？」と詰め寄られたので、「お話したただだよ」と答えた。

やっぱり平和が一番だ。

46 安全かも（後書き）

アッシュからの情報で実行犯の男を見つけ、芋づる式に依頼者の女も捕獲。女の目の前で男を分解し、女には自主退学をさせる。めでたしめでたし。

47 これが幸せってものかも

犯人たちとお話をした後、家に帰ってシャワーを浴び、深夜までカップケーキを作り続け、そして満足のいくものが出来上がったのを確認すると、ベッドに入った。

今日はゆっくり眠れそうだ。

翌日学校から帰ってきて冷蔵庫のカップケーキを手にとつと、病院に向かった。

自販機でココアを買って、ノックして病室に入ると、百合子ちゃんは雑誌を読んでいた。

「いらっしやい」

「やあ元気そうだね」

百合子ちゃんは「うん。もうばっちり」とピースサインをしてきた。

ほんんとうによかった。もしもダメだったら、五十樹によって学

園都市は…考えるのをやめよう。

「でもお兄ちゃんは、まだ安静にしてろってウルサくて、退院させてくれないの」

五十樹、君は立派なシスコンだ。大丈夫だ五十樹、俺はそんなシスコンの五十樹を応援してる。

「百合子ちゃんのことを心配なんだね、きっと」

百合子ちゃんは、「でも限度があるよ」とちょっと照れながら言った。

「カップケーキ作って来たけど食べる？」

「わざわざ作ったの？」

おうよ、作りましたともさ。作ったほうが材料に関して安心できるし、店で売られてるのと味は大差ない、はず。

「おおよ。遠慮せずに食べてくれ」

その時、病室のトビラをノックする音が聞こえた。

百合子ちゃんが「どうぞ」と言うと、常盤台の制服を着た二人組みが入って来た。

「わんない 湾内さんにあわつき 泡浮さん、わざわざありがとう」

百合子ちゃんの反応からすると、良好な関係の友達のようなだ。

俺は二人に椅子を勧めると、「よかったらお一ついかがですか？」とカップケーキをさし出した。

二人は「よろしいんですの？」「では遠慮なくいただきます」と手に取った。

「あ、遅れたけど、俺の名前は藤田久遠、百合子ちゃんの二番目の兄です。よろしく」

「ちょっと、私の友達になにサラッと嘘教えてンだよ！」

まあ兄的な立場だし、そんなに間違ってるとも思えないんだけど。

「久しぶりに会ったからって、まだ兄と認めてくれないんだね？お

兄ちゃんががんばるから！」

「なんで変な小芝居に入ってンだよ！二人とも嘘だからね、こいつはお兄、アニキの友達の、ただの隣人だから！」

二人は、口に手を当てながら、「あらあら」とか「まあまあ」と微笑ましそうに見ている。

そして口を小さく開けて、ケーキを食べ始めた。

んーこれこそお嬢様だよね、食べ方に品がある。

「これとっても美味しいですわ」

「どこのお店のものですか？」

嬉しいなあ。自分が作ったものを褒められるのは、テンション上がるよ。

これから毎日作ってこよう。今日はどんなのを作ろうかな。

「いや、俺の自作だよ。ちなみに味の決め手は、隠し味の愛情です」

百合子ちゃんが飲んでたココアを吹き出した。ベタなネタにベタなりアクションで返すとは、なかなかやるね。

「えひっえひっ、：へ、変なこと言わないでよ」

百合子ちゃん顔が真っ赤だよ、むせ過ぎだね。

「愛情はちゃんと入れたよ？なんてゆうか、こう火をつけた蝋燭を台所に並べて意味不明な文字を周りに書き込む感じで」

「何の儀式だよそれ、何を召喚するつもりだよ」

俺たちのこんなやりとりに、友達二人は「あらあら」「まあまあ」と笑っていた。

楽しんでもらえたようでよかったよ。

そのあと俺は、「後は若いもんにまかせるとしますか」と病室を出た。

百合子ちゃんが「3歳しかかわらな」と律儀につっこんでくれたが、最後まで聞かずに廊下へ出た。

これが幸せってものかもしれないな。ふとそう思った。

そして向かったのは五十樹のいるところ。どこにいいのかわからないので、とりあえずカエル先生の部屋に向かった。

部屋に入ると休憩中なのか、ソファーに寝転んで医学書を読んでいた。

かなり落ち着きを取り戻したようだ。

「やあ五十樹、いま話だいじょうぶ？」

「おオ問題ねエ」

俺は五十樹の向かいのソファーに座り、報告した。

「実行犯には消えてもらった。それでそれを依頼した百合子ちゃん
の同級生には、百合子ちゃんにお願いされたから、一生消えない心
の傷をつけて自主退学してもらった。その子の名前知りたい？」

「：いやあいつがそう言うなら、それで十分だろ」

五十樹はソファーに寝転んだまま、こちらに目を合わせない。

「悪かったな、全部お前に押し付けちゃって」

五十樹はとても申し訳無さそうだ。

「なに言ってるんだよ、こういうのは俺の得意分野だからいいんだよ」

別に五十樹の能力がこういうのに向いていないわけじゃない。ただ性格的に、向いていないのだ。

勢いに任せて周りのものも一緒に壊してしまいそうだ。それに。

「五十樹は立派な医者にならずに。できればもう誰も殺さないでくれると嬉しいんだけど」

「オマエはどオすんだよ！」

うおっ、怒鳴られた。ビックリした。

「俺も週一くらいでは病院に来てるし、それに人体の再生には拷問ああい」

のはいい練習になるし。それにもう慣れちゃったし」

「それでいいンかよ？」

「いいんだよ、これで」

俺が笑顔で言うと、やつとこっちを見た五十樹は、「フンッ」とまた本を読み始めた。

退院してとりあえず3人で五十樹の部屋に向かった。百合子ちゃんが寮で一人部屋だと知って、「なんか起こったらどオすンだよ？」という五十樹の要望によるものだ。

マンションの玄関に入り、五十樹の部屋の前まで来ると、そこに見知った二人の女の子がいた。

普通のミサカと小さいミサカだった。

「これはこれはアクセラレータ一方通行とそのご一行じゃないですか奇遇ですね、とミサカは偶然をよそおってみます」

「なにが偶然だ！こんな偶然あるか！そもそもマンションの玄関はどうやって入りやがった！」

つい怒鳴ってしまった。

「これは異なことを、ミサカ達的能力を使えば電子ロックなんて簡単にちよちよいのちよいです、とミサカ10000号、キリ番ゲツトだぜ、は、そんなこともわっかんねえのかよこの金魚の糞クが、とちよっと下品な言葉をつかってまで金魚のウンコを威嚇します」

な、なんてムカつく野郎だ！

「あのねあのね、ミサカはミサカは妹さんの退院祝いと改めてお礼のために来たんだよ、ってミサカはミサカは二人の仲裁をかってでてみたり」

横をみると百合子ちゃんが目を輝かせてた。

「あ、あにき、この可愛くてちっちゃくてクリクリなのはなんなんだよ？」

どうやら百合子ちゃんのツボにはまったようだ。

「あア？まアレールガンの妹みたいなもンだなア。まアとりあえず中に入れ」

そして五十樹、百合子ちゃん、俺、ラストオーダー打ち止め、バカの順番で部屋に入っていく。

そして俺は打ち止めが玄関に入ったのを確認すると、バカが入ってくるのを阻止するために、玄関を閉めようとした。

しかしバカは足を挟みやがった。クソ。

「何をするんですかこの単細胞生物は、とミサカはガキかよこいつはと扉を開けようと、ぐぬぬぬぬ！」

「五十樹にはバカは腹を下して漏らしながら泣いて帰って行ったって伝えといてやるよ。早く足をひっこめろ！」

「やめろよ、ミサカの純情可憐なイメージが壊れたらどうしてくれるんだとさらにぐぬぬぬぬぬ！」

「クソとか言った時点で、もうすでに手遅れだバカめ！」

「そんなこと言わずに入れてください。あ、入れてっていうのは、

一方通行の部屋に入れてくださいと、一方通行に対して挿入アクセラレータしてくだ
さいという、二つの意味があります、とミサカはバカなおまえに
でも理解できるように、懇切丁寧に説明してやったんだからいい加
減扉から手を離せ」

「いい加減入れてやれ」

見かねた五十樹に言われて扉から手を離すと、バカは後ろに尻餅
をついた。

「さすがは一方通行アクセラレータ、どっかの童貞バカとは一味違います、とミサ
カはお尻を払いながら、本当は一方通行アクセラレータにお尻を払ってほしいなあ
と心情を吐露とろしてみます」

「バカはおまえだ！そして五十樹だってまだ童貞だ！」

「オマエらとつと入りやがれエ！」

怒られたじゃないか。覚えてろよ。

百合子ちゃんはソファラストオーダーに座り、膝に打ち止めを乗せて、ご満悦
のようだ。ふたりでキャッキャウフフとやっている。

俺は五十樹と百合子ちゃんと自分の分のコーヒ―、それに打ち止^{ダイ}めのためのリングジュース、バカのためにコップに入れた水道水を持ってリビングにいるみんなに配っていった。

すると水の入ったコップを見た五十樹が呆れてため息を吐いた。

「いいかげん、オマエら仲直りしろよ」

「まあバカが先に謝れば、考えなくもないけど」

「はっ、なにを言ってやがんだこんちくしょう、この童貞早漏ボウヤ^{アッセラレータ}が、と一方通行の童貞はミサカが頂くと先ほど決定しました、とミサカは近いうちに知識を仕入れておくのでまってるね」

しかたない、聞き分けの無いバカに最終奥義を見せてやろう。

「そんなこと言っちゃっていいのかなあ？ みせてやるぜ、この3日間、寝ずに特訓した成果を、よ！」

俺は自分の声帯を『操作』し、とうとう完成した形に変化させた。

「イイねイイね、最っ高だねエ、愉快にケツ振りやがって、誘って
ンのかア？ もたもたしてっとブチコンじまうぞオ？」

そう、五十樹の声を完全再現したのだ。

それを聞いたみんなはポカーンとしている。五十樹と百合子ちゃん
は顔が真っ赤だ。

「おお、これぞ神の御業、^{みわざ}録音するのでもう一度今のセリフを、と
ミサカは先ほどの無礼をとりあえず今だけ、欲しいものが手に入る
までは従順な振りをして頭をさげてみます」

「だが断る！」

ああこの言葉が良かったんだよ。すると胸に衝撃を受け、壁
にぶつかった。胸を触ると、肋骨が何本か折れていた。

「ここまで下手に出てやったのに、とミサカは暴徒鎮圧専用弾を装
填している銃を構えます」

うう痛い。部屋の中で銃を撃つとはこいつ本物のバカだ。

47 これが幸せってものかも（後書き）

ちよいとしばらくお休みします。1週間かもしれないし3日かもしれない。こんな小説を待ってくださっている奇特な方がいらっしゃるのなら、ご迷惑をおかけします。

48 こわれたかも

SIDE 百合子

やっと退院できた。入院中はみんなに迷惑かけちゃったな。

登校したら、みんなが笑顔で迎えてくれた。

入院中にたくさんお見舞いにも来てもらったし。

退院してから変わったこともある。それは友人からの相談に乗ること。

それ自体は止めたわけじゃない。やっぱり困ってる友達を放っておけないから。

だから、一人で現場に行くのを止めることにしたんだ。

緊急の場合でも、まずは風紀委員に連絡してから向かうことにした。

今まででなんでこんなに簡単な事をせず、一人で全部できるなんて考えてたんだろう？

たぶんレベル3ということと、お兄ちゃん第一位の妹だからって気持ちがあったからだと思う。

誰でも殴られるのは嫌だ。だから殴られそうになったら必死で抵抗するものなんだ。

私って傲慢ごうまんだったなア。

退院から一週間ほど経って、そろそろ生活も元通りになってきたある日、街で小柄な女の子に話しかけられた。

「お願い助けて、私の友達が男にからまれてるの」

私は一瞬躊躇ちゅうちよした。だってあんなことがあった後だから。

風紀委員に電話をしなきゃと思ったけど、なぜか早くこの子の言うことを聞いてあげなくちゃダメな気がしてくる。

そして私はその子についていった。電話をかけることなく。

S I D E 久遠

百合子ちゃんが退院して結構経ったな。元気になってよかったよ。

入院生活で、学校の友達とも上手くいってるのもわかったし、全くなにも問題なさそうだね。

俺の方は真っ赤な巾着袋を腰につけて、学校に通っている。考えた通りに巾着について聞かれると能力の説明をした。

しかしなぜかみんな、「もっと趣味のいいものはなかったのか？」と言う。

そんなに変か？

あ、このまえ、百合子ちゃんが退院したのを祝おうということで、三人で買い物に出かけた。巨大なショッピングモールに。

五十樹と一緒に百合子ちゃんの服を大量に買おうとしたら、百合子ちゃんに「一着にしてお願い」とよくわからないお願いをされた。

二人でなら、「この店にあるもの全部っ！」ってセリフを言っても大丈夫だよ？てか一回言ってみたいよね？

五十樹と俺は、ジャケットと万年筆を買った。

実験がまだ始まっていなかった夏の日に、二人でした話をやっと実行したのだ。

二人で少しだけ感傷にひたってしまった。

まあ万年筆店では結構な数の万年筆を『解析』したのは、俺だけの秘密だったりするけど。

いやぁ本当にピンキリなんだね、万年筆って。だからムリを言っ
て高いものもケースから出してもらったりして。

そのお札に、買えるだけのインクを買ったけど。

そのあと三人で公園に行った。百合子ちゃんがボートに乗りた
いと言ったのだ。

五十樹が最初にボートに乗り、次に乗ろうとした百合子ちゃんは、
ボートが揺れるために中々乗れなかった。

すると五十樹は水に手をつけて、能力でボートを動かないように
した。

それいいな、デートでやったら絶対にうけると思う。そう言っ
たら、「予定がねェ」と一蹴された。

「そろそろ彼女作りなよ…。百合子ちゃんのことは俺にまかせて
さ」と言うと、二人に殴られた。

暴力反対です。似たもの兄妹め。

俺は最近の楽しかったできごとを、自宅でまったりと思い出している。

あの時の買い物でこっそりと五十樹のために買ったシルバーの腕輪の入った箱をテーブルに置いて。

そして五十樹への日ごろの感謝の手紙を書いて、その箱の上に置いた。

そのときチャイムがなった。どうやら荷物が届いたみたいだ。

送り主を聞くと、百合子ちゃんからだった。なんだろう？期待しちゃうよ？

荷物を受け取ると、ちょっと重かった。でも百合子ちゃんからのプレゼントだ。

嬉しすぎてスキップしちゃうね。

けど調子に乗りすぎて、荷物を落としてしまった。割れ物だったらどうしよう。

すると箱から液体が漏れてきた。ちゃんと梱包しろよ、それでもプロか？

ついでだからちょっと空けてみるか。まだエントランスから出たばかりだけど。

そこに入ってたものを数秒のあいだ見て、俺は…意識を失った。

S I D E 五十樹

警察から病院に電話があった。藤田久遠のことで言われたので、とうとうバレたかと思った。

心当たりがありすぎて、言ってみるまでなンもわからねエ。

受付で「藤田久遠の関係者だ。一体何の容疑だ？」と聞くと、奥から年配の男が近づいて来た。

「更科五十樹くんだね？説明するからこちらに来てくれないか？」

俺はそいつの後に続いて部屋に入った。

「まず、彼は被疑者じゃあない。今日彼の住むマンションに、あるものが届けられてね。それを見た彼がうずくまって大声を上げているのを住人が警察に連絡したんだよ」

「あるものってなンなんだ？」

「それは……君の妹さんの首だ」

はア？首なんて送ってこれたら、百合子は死ぬじゃねエか。なに言ってんだ？こいつ。

「混乱するのも無理はない。ほどなくして妹さんの通う学校近くで、首のないご遺体を発見した」

「あいつが死ぬわけねエだろうが！」

俺が机を叩くと、机は床と同化した。なんだよなんだよ何言ってるんだよ、俺は心のまま叫んだ。

「どれだけ時間が過ぎたのか。」

「藤田久遠はどこにいる？」

「彼はいま警察病院で鎮静剤を打って寝かされているよ」

「百合子の…体は」

「見るかい？じゃあ着いて来てくれ」

言われるままついていく。足が重い。わけがわからねエ。なんも考えらんねえ。

地下の一つの部屋に入ると、白い布がかけられたものがあつた。男がそれをめくって肩までみえるようにした。

「一応綺麗にはしたんだけどね」

見てみると、首は体に縫い付けられ、そうしてその縫い目が見えないようにするように、塗料がぬられていた。俺はその場で崩れ落ちた。

S I D E 久遠

頭が痛い。ここはどこだ？

「目が覚めたようだね。どこか具合の悪いところはあるかい？」

髭面の白衣の男が入って来た。

「頭痛がすごい……なんで俺はここにいますか？」

悪夢だろ、さすがにあれば。いやいや無いない。

「アレを見て、興奮していて手が付けられなかったのですね、鎮静剤を打たせてもらった」

聞くのは怖い。もし本当に起こったのだとしたら俺は。

「アレって、あれは百合子ちゃんの」

男は少し考えて、そして肯うなずいた。そこでまた意識が遠のいていく。遠くで「鎮静剤を」とかなんとか声が聞こえる。

たぶん、おれは、このときに、こわれたのかも、しれない

48 こわれたかも（後書き）

どうしてこうなった……。本当に作者は百合子ちゃんが好きだったんですが、本当に、どうしてこうなった。

49 壊

S I D E 五十樹

アレから百合子の葬式を俺の家でやった。全部葬儀屋にまかせてな。

来てくれる連中はみんな泣いてた。だが俺は泣けなかった。

これは俺が自分のやったことを棚に上げて前に進もうとした罰なんだって思いがあったからだ。

あいつは葬式にも出なかった。部屋から全く出ていないようだ。いないようだったのは、あれからあいつの顔を見てねェからだ。

とうとう我慢の限界が来て、あいつの部屋に入ることにした。線香の一本でもあげさせるべきなんだ。

扉を能力で壊し中に入った。部屋の中は何もかもがグチャグチャだった。あんなに綺麗に片付いていたのに。

奥の部屋から声が聞こえた。

その部屋へ入ると、異様な光景が目の前にあった。

十数体の百合子の体、それに話しかけているあいつの姿だ。

「違うよ、そうじゃないんだよ、百合子ちゃんがね、いやいや、うん、一番なのは、うんうん、かわりはないよ。うん、だからね、もうちょっとだけ、わかってるって。殺してほしいんだろ？ん？だって百合子ちゃん、殺されちゃった、うん、じゃないか。うん当然だよね、でもね、もうちょっとで、上手くできそうなんだよ、だって話ができるわけだから、え？後でいいの？やっぱり先に殺して欲しいんだ。連絡？連絡が来るの？へー、うん、じゃあね、うん、待ってることに、うん、するから。元気でね」

わけがわからねエ。なんだよなんだよこれ。なんなんだよこのありさまは？俺はあいつの胸倉をつかむと無理やり立たせた。

「テメエどういうつもりだ！何やってやがんだ！」

「ああ五十樹、ひさしぶりだね。これは体を作ってるんだよ、百合子ちゃんの。さっき五十樹も聞いただろ？百合子ちゃんの声。きつとちゃんとした体があればもどってこられるんだと思うんだ。でもさ、先に敵を打ってほしいんだってさ。やっぱり謙虚だよね、百合子ちゃん。自分のことよりもまずは他人のことを心配するなんてさ。本当によくできた子だよ。五十樹は百合子ちゃんが結婚するときには泣いちゃうんじゃない？俺は結構泣いちゃう自信あるんだけど。だから五十樹の泣き顔をちゃんと録画できるかが心配なんだよね。」

そのまえに百合子ちゃんがつれてきた相手を五十樹は殴っちゃいそうじゃない？でも殴っちゃだめだよ？相手死んじゃうから。でもどんな男を連れてくるんだろうね？五十樹みたいな医者を連れてきてお兄ちゃんみたいなのが好きだからとか言われちゃったら反対できないよね。いや、五十樹なら問答無用でいちゃもんつけるか。でも本当に殺さないでよ？百合子ちゃんが幸せになるのが一番なんだからさ。医者が人を殺すのは、手術の失敗のときだけにしないよね。あ、でもどうしても殺したい相手がいたら俺に言ってくれたらちゃんと処理するから。オプションで拷問もつけることができるから、その時は教えてね」

あア、もう日常はかえってこねエンだな。

「俺には百合子の声は聞こえねエよクソツタレ」

そう言い残して部屋を出た。

S I D E 久遠

ん？おかしいな。あんなにはっきりと声は聞こえたのに。もしかして百合子ちゃんは、殺しのことを五十樹に内緒にしてほしいのかな？でもそんな風に頼ってもらえたら嬉しいな。

あ、P D Aが振動してる。画面には：知らない人からか。

「もしもし」

「初めまして、藤田さん。私が誰だかわかるかしら？」

女の声だ。聞いた覚えがないなあ。

「わからないな。どちらさま？」

「そうねえ、あ・な・た・が・待・っ・て・い・る・人・間・と・い・え・ば・わ・か・る・か・し・ら」

ああ、本当にきたよ、百合子ちゃんの言う通りだった。

「どこに行けばいいんだ？」

「あら話が早いのは嬉しいわ。じゃあ彼女が死んだ場所まで今から来てくれる？もう夜中だけど」

「わかったよ。すぐに行くから待っててくれ」

ああ。百合子ちゃんのお願いだ。叶えなくっちゃね。

その場所には、たくさんの花や飲み物が置いてあった。彼女がみんなから慕われていたのがわかって、ちょっと誇らしい。

立ち入り禁止のテープをくぐって中に入った。その空き地になっている場所に、2人の人影があった。

「さきほど電話で会話したものよ、よろしくね」

その女は小柄で華奢な体つきをしていた。けどそれに似合わないような丈の短いドレスを着ていた。

「で、用件は？」

まあ用件がなんであれ、やることに変わりはないんだけど。

「もちろんわかってるでしょ？あなたが考えてる通りのことよ」

「君が犯人なのか？」

「まあ犯人の一人ではあるわね。ちなみに実行犯は彼よ」

女が横にいる男を指差した。そこには見覚えのある男がいた。

雰囲気の違いすぎて、わからなかった。

男の背中からいきなり一対の白い翼が生えてきた。

「俺がナ、あの女をヨ、ブチ殺したんだヨ。そしてオマエも、ブチ殺す」

その男から吹く突風で吹き飛ばされた。コンクリートブロックの壁に頭をぶつけた。

油断していた？ いや、あの時と同じように、攻撃が見えなかった。

「一応ハンデということで、彼の能力を教えてあげるわ。彼の能力は未元物質。レベルは3よ。」

この世に存在しない素粒子を生み出し、または引出し、操作する能力。まああなたの頭でどれだけ理解できるかわからないけどね。」

俺の頭？ 確かに頭は良くないな。白い羽が伸びてきて、右腕を切り落とされた。

あの時もこうやってやられたのか？でも速度は段違いだな。

俺は左腕で右腕を元に戻した。

「とっととかかって来いよ、俺の未元物質ニ、テメエの常識ナんざ
通用しねえガな」

「俺にはその白い翼をつけるようなイカレた趣味は理解できねえよ。
あいにく俺は常識的な頭しか持ってねえからな」

常識的な頭か。非常識な人間のことは理解できねえよなあ。頭？

おおおおおおお、天啓が来たぜ。頭が足りなけりやあ増やせば
いいじゃないか。

俺はさっそく自分の背中の肩甲骨の下あたりに、薄く引き伸ばし
た脳を作り出し、元あった脳とつないだ。

おゝゝゝ頭が焼け切れそうだあああ！周りが遅おおおい。

また白い翼が飛んでくる。右の手の平の上半分が無くなった。治
そうとすると、左手で触っても無いのに、右手は治った。

「こりやすげえ」

右手にナイフを『作成』し、飛び上がって刺そうとすると、一枚の羽がそれを防いだ。

そしてもう一方の羽が俺の左手を狙ってくる。俺はそれをかわして、左手で掴み、『解析』してみた。

「すげえ情報だなあこりや！」

頭に今まで見たことも無い情報が流れ込む。そしていま解析したばかりの白い羽を、左手の甲に『作成』してみた。

小さな30センチくらいの一对の羽が俺の手に生えた。使い方で完璧にわかる。テンション上がってまいりましたっ！

俺はそれで男を攻撃し、男は違う攻撃手段で反撃し返してくる。

右手で『作成』したスタングレネードを投げつけると、相手はそれを珍しいものでも見るかのように見つめ、そして視覚を失った。

俺はその隙に、男の首を切り落とした。

「さすがねえ、あなた。計算ではもつとギリギリになると思ったのに」

S I D E 心理定規

垣根が死んで私たちの組織、？スクール？は開店休業状態だった。もともと 垣根一人でもっていたようなものだったからね。

垣根が死んだからといって、特に何も感じなかったわ。ビジネスとしての付き合いだったし。

ある日おもしろい仕事を請けた。なんでも 垣根を殺したやつと垣根のクローンを戦わせるらしい。

その指揮をとってほしいと言われたわ。

条件は、？相手をちゃんとやる気にさせてから戦わせること？？そんなの簡単じゃない。

相手の資料にちゃんと書いてあるじゃない。

私は能力を使って女を誘い出し、彼に殺させた。

言葉にすればこれだけのことでよ、ほんとあつけない。上からとうとう本番の実行許可が下りた。じゃあさっそく電話しましょう。

ああ負けちゃったわね、クローン。案外あつけなかったわ。でもまだまだクローンはあるのよ？これからしばらく仲良くしましょう。

あら、相手が私に近づいて来たわ。そして私の顔に顔を近づけてくる。

ダメよ、そんな軽い女じゃないの。能力を強くして、言う事を聞かせましょう。

あ、あれ、ググアッ、喉に、噛み付…かれ…。折れ……………。

50 解

SIDE 五十樹

あれからアイツにはあってねエ。だから今、俺はアイツの居場所を探してンだ。

あの日以来アイツは部屋には戻って来ねエ。

だが、荒れ果てたアイツの部屋の中で、俺宛の手紙と小さな箱を見つけた。とりあえず手紙を読む。

?五十樹へ、いつも色々ありがと。

これは五十樹に似合うと思ったので買いました。

白い外見と結構なじむと思うので、よければ使ってください。

あんまり高いものじゃないけどね。

久遠?

箱を開けると、銀の腕輪が入っていた。左腕につけた。悪かねエな。こうなりや意地でも探し出してやンぜ。

いまは目に付くスキルアウトを片っ端から捕まえて、情報を聞き出してる。

大事なのはリーダーらしき人間を最後まで残しておくことみてエ
だ。

部下がやられていくのを見せた方が、情報を簡単に聞きだせるか
らなア。

何人もの情報屋、何人もの裏の人間に当たったが、誰もアイツの
居場所がわからねエみてエだ。中にはアイツの事を探してるやつも
いた。

俺の知らねエアイツの人間関係があった。ほんと、俺アアイツの
ことをなンも知らねエんだな。

打ち止めラストオーダーや御坂美琴レールガン、それに上条も、アイツと俺の心配をして家
まで来やがった。なにを言ってンのかよくわかんなかったが。

手当たり次第にゴミどもを片付けてたら、俺の周りには誰もいな
くなった。まアアイツに会う前に戻ったってだけのことだ。

夜の街を歩いてつと、銀色の鏡が路上に浮かんでやがった。いい
ねいいね、最近誰も相手してくンなくてヒマしてたんだよ。

相手になってやるよ、クソツタレ。

そしてその日以降、学園都市内で一方通行を見たものは誰もいなくなつた。
アクセラレータ

SIDE とある研究施設内

そこにあるのは数々の計器類、そして書類の山だった。男が二人、会話している。

一人は黒髪に、鋭い目つき、40歳台だろうか。目の下には深い隈がある。そしてもう一人は20歳台の、耳にピアスをした茶髪の若者。

「しゅにゅん、藤田久遠の反応完全に消えちゃいましたねえ」

茶髪の男は、黒髪の男を主任と呼んでいる。

「ああ、頭蓋骨に仕込んだアレの反応が途絶えたようだ」

主任と呼ばれた男は、“マイク付GPSの電波範囲”と書かれた資料を読みながら答えた。

「やっぱり寂しいっすか？」

「なぜだ？」

主任と呼ばれた男は、資料から目を話すことなく言葉を返した。

「だって藤田主任が名付け親なんでしょ？」

「この実験の責任者は私だったただだよ、実験対象に感情を抱くはずもない。君はネズミに感情移入するのか？」

男はひとつため息を吐く。

「まあそりゃそうっすけどね。でも主任って何でもできそうなのに、名前を付けるセンスは無いっすよね。クローンだからクオンなんて」

男は楽しそうに笑う。

「……実験体の、物事の名前というのは、もっともわかりやすいものが良いと思ったのだが。そんなに変か？」

心底理解できないという様子で、主任は話した。

「いやあ確かにわかりやすいっちゃあわかりやすいですけど。でもできそこないでしょ？デュアルスキル多重能力者の」

「だが確かにアレが一番出来がよかったのは事実だ。学園都市の第一位と第二位のDNAマップから作り出したクローン。商品としてはかなり有用だと思うのだけどね」

主任は自分の研究に一定の成果を感じているようだ。

「でも第一位の能力は20パーセント未満、第二位の能力に関しては、完全に裏返って発現しちゃいましたけどね」

男はちゃかすように言った。

「科学の進歩というのは、得てしてそういうものだ」

「あ、そうそう、あの第一位のクローンの妹、大きく成長させることができたら一体貰えませんか？

ああいう生意気そうなのを無理やり犯^やりたいんですけど、まだちゃんと成長させる事ってムリじゃないっすか。久遠みたいに、学習装置で愛情を書き込んだりせずに。

成功したらお願いしますよ」

藤田は資料を読むのをやめた。

「…考えておこう。ああそれよりもっと良い方法がある。君がその研究の責任者になりたまえ。モチベーションが高ければ高いほど実験は早く進む」

主任の言葉に、男は主任に駆け寄った。

「いや、ちょっとまってくださいよ、俺はもう2つも責任者やってんすよ？もうムリですって」

「大丈夫、私は5つだ」

主任は事も無げに言う。

「主任と一緒にしないでくださいよ」

男はこれ以上忙しくなっていたまるか、と狼狽している。

「さあ今後の方針を決める会議が始まるぞ」

主任はもうその話は決定だと言うかのように、話を切り上げ、部屋の外へと歩いて行く。

「ちょっと待ってくださいって」

その後を、急いで必要な資料をかき集めた男が追いかけて行った。

藤田久遠に関するレポート

一方通行と未元物質ダークマターのクローンである。

一方通行アクセラレータの能力である、解析、ベクトル変換のうち、解析部分のみを発現させる。未元物質ダークマターの能力に関しては、全く発現せず、代わりに未元物質以外の物質、世界に存在する通常の物質を操作する能力が発現した。

一方通行アクセラレータが暴走した時の楔くさびとするため、一方通行アクセラレータに対して漠然とした愛情を学習装置で書き込むことにする。その効果を、AIM拡

散力場によって補強するものとする。

なお、二人を管理するため、藤田久遠の頭蓋骨には、高機能マイクとGPSを埋め込むことにする。なお、藤田久遠のサブとして、更科百合子を一方通行の妹として、関係者に認識させる。

レベル6シフト絶対能力進化実験の失敗により、藤田久遠の排除を行い、アクセラレーター一方通行を再度実験に復帰させるものとする。

同時に、ダークマター未元物質との戦闘を強制させ、藤田久遠の可能性についても測定するものとする。

×月○日

藤田久遠、完全に消息不明。

□月△日

アクセラレーター一方通行、完全に消息不明。

50 解（後書き）

とりあえず前編終了です。

ちよいと裏話を。他の作者様はオリ主に難しい漢字の名前をつけてらっしゃる方が多かったので、逆に普通の名前をつけようと思いましたが。

そして昔読んだ、るろうに剣心に出てくる新撰組の斎藤一を無表情にしたキャラをイメージして、斎藤一の改名後の？藤田五郎？から、今回の？藤田主任？を書きました。

そしてまあ責任者の藤田主任が、？この実験体に名前がいるな。苗字は私と同じでいいか。ありふれているしな。名前はクローンだからクオンでいいか？てな感じて名づけられました。

これを投稿後、ゼロの使い魔を原作とした後編である？とある初恋SS（後編）？を投稿します。結構な数の伏線をそちらで回収しつつ、ハッピーエンドに向かって突き進みます。

もしよければ、作者ページから進み、そちらも引き続き読んでくださると幸いです。後編はゼロ魔です。

51 絹旗小話（前書き）

急に絹旗を書きたくなりました。

51 絹旗小話

藤田がいなくなつてから、1年が過ぎた。あれからアイテムは、まあいろいろあったの。

パシリが増えたり、裏の組織同志で争ったり、そのパシリを麦野と滝壺が取り合ったり、フレンドがそのパシリを逆恨みしたり。ほんとど変わっていない。

違う。たぶん私だけが超変われて無い。みんな変わっていつて、私だけが置いてけぼりをくつてるの。

戦闘に関しても、今までよりも捌め手からを使うようになった。今までは全て前から押しつぶすように殲滅せんめつするのが好きだった麦野が、

「蝶のように舞い、蜂のように刺す？ 私のためにあるような言葉じゃない」

とか言つて、不確定要素が生じた時の退避が早くなった。虫を潰すのが超好きそうなのに。それに格下相手にも、超油断しなくなった。

アイテムは相変わらず超平和だ。でも平和な時には、余計な事を考えてしまう。そんな時は麦野やバカ面にはよくからかわれる。

「それは恋だにゃ」

「へーお前もそんな年頃なんだなあ」

とか。こ、恋とかよくわからないし。バカ面は、なんだかオッサン臭い。そのままバカ面にそう伝えたら、想像以上のダメージを負ってた。やっぱりバカ面は超バカ面なのよ。

私は藤田とは一日しか一緒にいなかった。だから恋って言われても……。わ、わからないのだ。でも顔が熱くなって、うーうーと唸っていると、滝壺が超抱きしめてくれた。

「大丈夫、私は絹旗を応援してるから」

いつもとは違う、しっかりした声でそう言ってくれた。ちょっと泣いてしまった。

本当にみんな変わった。私も変わらないとダメなんだと思う。とてもイヤだけど、もう会えない気がするから。

みんなこうやって大人になっていくんだと思う。そう考えて、私たちちょっと泣いてしまった。

51 絹旗小話（後書き）

近いうちにまた外伝を投稿します。タイミングとしては、後編を参照していたださい。

52 その後の学園都市

「へっきゅしょん」

古い倉庫の中で、くしゃみの音が響いた。

「どうしたんだい？夏風邪？それってバ」

「うるせえよ、誰かが俺の噂をしてんだよ。どっかの透き通るような、陶器の様な白い肌の絶世の美女とかな」

くしゃみをした男が、もてない男まるだしの願望を吐き出す。

「確認するまでも無くバカだったね」

それに対して、いつものことだと諦めたもう一人が毒を吐く。

「ヒドいな！」

ここは古い倉庫の中なので、冷房は無い。いちおう冷蔵庫はある

が、ムダに広いので空調を入れても効果が低いのだ。

二人は何をするともなく、それぞれソファで寝転がっている。たまにペットボトルにはいった水を口にしながら。

「アイツがいなくなって結構経つよな」

独り言のように、その男、加東はつぶやいた。

「藤田くん？ そうだね。いい子だったね」

それに南原も、助けられた時のことを思い出しながら答える。

「やっぱ実験の…、そうなら俺らにできることはねえか」

内容はわからないが、彼らの知り合いの少年が、危ないことに自ら飛び込んでいったのは知っている。少年の目つきを見て、“止めようが無い”と感じ、彼ら二人は何もなかったのだ。

「僕らは彼がいつ帰って来てもいいように、今までの生活を続けるのがいいんじゃない？」

それだけしかできない。

「おおそうだな」

本当にそれだけしかできない。しかし二人とも、自分たちはそれでも先に進む必要があるというのを自覚している。

倉庫の中に、また少し沈黙が流れた。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

「そろそろちゃんと先の事を考えた方がいいんじゃない？ ってミサカはミサカは検体番号10000号に、これで何度目かの提案してみます」

ミサカと名乗る小さな女の子が、もう一人のそっくりな顔つきの少女を心配そうに見上げる。

「申し訳ないです上位固体、しかしミサカはミサカネットワーク上の、

“一方通行に言わせたい言葉ランキング”

を全てあの黒髪にモノマネさせるまで、諦めることはできない、と心に決めたことを宣言します。

ちなみにランキング第一位は、“そ、そこから先は一方通行だから、ンなもン入らねェよ”です」

10000号と呼ばれた少女は、目を瞑り、頭の中のランキングを確認しつつ答えた。

「下位固体たちの成長の方向性に疑問を感じる、とミサカはミサカは犯罪者にはならないでね?と一応お願いしてみる」

上位固体と呼ばれた少女が、別の意味で心配をした。

「大丈夫で…うぐっ」

「泣いてるの?ってミサカはミサカは…」

今まで平気そうにしていた10000号の目から、大粒の涙が零れた。それを見て、上位固体の少女も、今にも泣き出しそうだ。

「し、心配ありません。これはその、すぐに…おさまると…ふうう

ぐうっう」

10000号は自分の服の胸部分を掴み、必死に涙を堪えようとする。しかし涙は零れ続ける。

「あの二人に何があったのかはわからないけど、でもミサカたちは、グスッ、この命を最後までめいっばい使いきるべきなんだと思うよ、ってミサカはミサカは力いっぱい慰めて…うわああああん」

今まで我慢しつづけられていた上位固体が、ついに大声を上げて泣き出した。

「ふふふ、上位固体も泣きたかったのですね。今日だけはたくさん泣いて、明日からがんばりましょう、とミサカはダメ人間的な対処法を提案してみます」

上位固体の涙を見て、10000号は少し笑って、そうしてちょっとだけ前向きな意見を伝えてみた。

「うん。へへへっ」

上位固体も、その少しの前進を感じて、嬉しそうに笑った。

御坂は、どこか誇らしげだった。私の彼氏よ、すごいでしょ、とでも言う様に。

「まあ結局、魔術サイドの人間にも、頼める限り探してもらったけど、見つからなかったからなあ」

照れ隠しなのか、上条は話を消えた二人のことに戻そうとした。

「ああそういえば、アンタ可愛いシスターたちと随分仲がよさそうだったんだけど、こういうことか説明してくれない？」

御坂がこの1年を思い返すと、やはり上条の周りには可愛い女の子が多い、と再確認した。

「可愛いシスター？シエリーのことか？それともオルソラ？もしかしてアークビショップか？あの人はアレでも結構な歳らしいぞ？ああ五和のことかな？なんかおしぼり好きみたいなんだよ。何の意味があるのか知らないけど」

御坂の機嫌が、微妙に悪くなっていることに気がつかず、上条は自分から地雷原に突き進んでいった。

「あんたは…どんだけ…いろんなところにちよっかいだしてんのよ
お〜！」

上条に浮気をするつもりはないと知りつつ、情緒不安定な年頃なのか、御坂はいつもの通り暴走する。

「や、やめ、家電がああああ不幸だあ〜！」

そうして二人の変わらぬ日常が繰り返される。

テンプレ

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「本当に君はなにも知らないんだね？」

病院の個室で、カエル顔の医師がどこかに電話をかけている。

「私も、プランが遅れた…とは言わないが、進行速度が遅くなって困ったことになったのだ。可能なら探し出したいと思っているよ」

体がすっぽり入る巨大なビーカーのような入れ物に、逆さの状態
で浮かんだ男は、目を瞑ったまま答えた。

その男、アレイスターも最初は戸惑った。プランの主軸である一クセラレータ方通行が、何の前触れも無く学園都市から姿を消したのだから。

しかしアレイスターは、第一位と第二位のDNAマップから二人のクローンを生み出した。そしてそれとは別に、彼らの“脳”も作り出した。その数は各10万個ずつ。

その10万個の脳を共感覚醒を利用して、脳波を一定のパターンに統一させて、並列演算ネットワークを構築した。

早い話が10万個の脳で、幻想御手レベルアップを使っただ。シスターズ妹達の実験時よりも簡単に低コストで作業を進めることができた。

ただし製造後の脳を入れておく容器の手配と、その置き場所を確保するには手間がかかったらしいが。

「そうかね。君が知らないのであれば、もう打つ手はないね」

アレイスターの情報収集能力を知っているカエル医師は、そう返した。

「少なくとも私の知る場所にはいないことは確かだ」

アレイスターも、そう念を押す。本当に知らないようだ。

「わかったよ。では失礼するね」

カエル医師は受話器を置くと、座っている椅子の上で大きく伸びをする。

（本当にあの二人の医師としての才能は、何よりも惜しいと思えるほどだったのだね。どこかで無事でやってくれればいいんだが）

カエル医師のその思いに答えを返すものは、誰もいなかった。

「しかしバラバラならともかく、あの二人が一緒の場所にいるなら、たとえどんな場所であれ、何とか上手くやっていることさね」

カエル医師は、予言を告げるようにそう呟くと、明るい顔で、患者のカルテを眺め出した。

52 その後の学園都市（後書き）

久しぶりに学園都市に目を向けてみました。

スキルアウトの二人は、特に変化はありません。簡単に変化できないからこそスキルアウトです。

シスターズたちの間にも、“腐”や“サド”などの情報が広がってしまっていたようです。好奇心旺盛な彼女たちのことですから、ありうろと思いました。オソロシイ…。

上条さんは、やっぱり世界を救います。しかも護衛として御坂美琴がつかまいます。そして御坂という彼女がいても、やはり周りには女の子が集まります。そういう星の下に生まれたのでしよう。

レベルアップパーシスターズは、他のどこかで既に使われているネタかもしれません。自分で書きながら、かなりヤツツケ感が強いなあとは思ったのですがWいちおう調べた限りでは無かったのですがね。

まあ科学者さんたちは、新しい技術よりも、今まで成功した技術を再利用するかなあと。信頼度の面から。

それではまた後編で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6059t/>

とある初恋SS（前編）

2011年9月20日21時07分発行